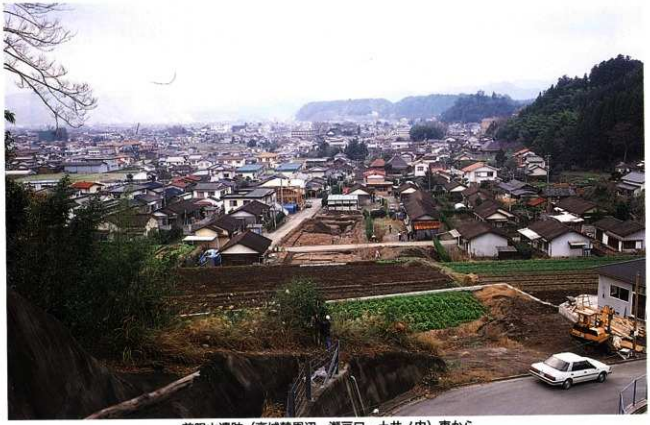
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第55集

慈眼山遺跡

国家公務員合同宿舎（日田住宅）建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

大分県教育庁埋蔵文化財センター



慈眼山遺跡（高城麓周辺　瀬戸口・土井ノ内）東から

側面　正面　背面

十一面観音像（３次調査　C-5 区出土）

慈眼山遺跡（「上ノ馬場」道路推定地から「高城」・「土井ノ内」を望む）

慈眼山遺跡出土　貿易陶磁器

序　　文

本書は、大分県教育委員会が、大蔵省九州財務局大分財務事務所の依頼を受けて実施した国家公務員合同宿舎（日田住宅）建設事業に伴う慈眼山遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する日田市は、大分県の西部に位置し、古代から太宰府・博多に向けて開かれた西の玄関口として、また県西部の政治・経済の中心地としての役割を果たして来ました。特に、江戸時代には、幕府直轄領の「天領」となり、西国郡代が置かれると、豊後國のみならず、九州諸藩の大名を監視する拠点として重要な場所となりました。また文化面でも広瀬淡窓が私塾「咸宜園」を開くと、塾生は全国から集まり、幕末から明治に活躍する多くの人材が巣立って行きました。

慈眼山遺跡の発掘調査では、こうした江戸時代以前の日田盆地の状況の一端を明らかにすることができました。すなわち、中世に日田郡を支配した大蔵氏などが盆地東部の慈眼山を山城とし、その麓に館を設置し、南側に城下町を形成していた状況を垣間見ることができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究資料として広く活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、多くの方々のご理解と御協力をいただきました関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

平成23年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所長　山口博文

例　　言

1．本書は、日田市城町に所在する慈眼山遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は国家公務員合同宿舎（日田住宅）建設事業に伴い、大蔵省九州財務局大分財務事務所から委託を受け大分県教育委員会が実施した。
3．発掘調査は平成２年度に３号棟（現１号棟）、平成３年度に２号棟の建設に先行して実施した。
4．現地での写真撮影・遺構の実測は調査担当者が行った。
5．遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については、整理作業を委託した九州文化財総合研究所が行った。
6．出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門1977）において保管している。
7．本書で使用する方位はいずれも座標北である。巻末折込図の座標値については、日本測地系の数値である。
8．本書の執筆・編集は坂本嘉弘（大分県教育庁埋蔵文化財センター）が行った。

目　　次

第１章　はじめに
第１節　調査に至る経過……1
第２節　調査の経過……1
第３節　調査組織の構成……1

第２章　遺跡の立地と環境
第１節　地理的環境……2
第２節　歴史的環境……3

第３章　調査の方法と成果
第１節　調査の概要……5
１．調査区の設定……5
２．遺構と遺物……6
第２節　平成２年度調査－１次調査－（Ｂ地区Ⅰ）……7
１．土坑……7
２．溝……10
３．整地層……30
４．表土及び遺構混入遺物……37
第３節　平成３年度調査－３次調査－（Ｂ地区Ⅱ）……40
１．平成２年度調査区との関連と検出された遺構……40
２．古代……41
(1)土坑……41
(2)井戸……42
３．中世……51
(1)土坑……51
(2)井戸……61
(3)溝……63
(4)柱穴状遺構……65
(5)石積み遺構……68
(6)整地層……99
(7)表土・表採……108

第４章　総括……111
第１節　古代の慈眼山遺跡……111
第２節　中世の慈眼山遺跡……113
１．遺構出土土師質土器の時期……113
２．中世の慈眼山遺跡の景観……116
遺物観察表……121
報告書抄録……136
写真図版……137

挿 図 目 次

第1章

第2章

第1図　日田盆地と周辺の主要遺跡分布図……　2
第2図　慈眼山遺跡周辺の調査状況……　3

第3章

第3図　慈眼山遺跡調査区位置図（1／600）……　5
第4図　平成2年度調査(B地区Ⅰ)主要遺構分布図……　6
第5図　B地区Ⅰ　SK02実測図 ……　7
第6図　B地区Ⅰ　SK02・04・06・07出土遺物実測図……　8
第7図　B地区Ⅰ　SK04実測図 ……　9
第8図　B地区Ⅰ　SK05実測図 ……　9
第9図　B地区Ⅰ　SD02出土遺物実測図(1) ……　10
第10図　B地区Ⅰ　SD02出土遺物実測図(2) ……　11
第11図　B地区Ⅰ　3区SD03出土遺物実測図(1) ……　12
第12図　B地区Ⅰ　3区SD03出土遺物実測図(2) ……　13
第13図　B地区Ⅰ　SD03実測図 ……　14
第14図　B地区Ⅰ　3区SD03出土遺物実測図(3) ……　15
第15図　B地区Ⅰ　3区SD03出土遺物実測図(4) ……　16
第16図　B地区Ⅰ　3区SD03出土遺物実測図(5) ……　17
第17図　B地区Ⅰ　SD03出土遺物実測図(1) ……　19
第18図　B地区Ⅰ　SD03出土遺物実測図(2) ……　20
第19図　B地区Ⅰ　SD03出土遺物実測図(3) ……　21
第20図　B地区Ⅰ　SD03出土遺物実測図(4) ……　22
第21図　B地区Ⅰ　SD03出土遺物実測図(5) ……　23
第22図　B地区Ⅰ　SD03出土遺物実測図(6) ……　24
第23図　B地区Ⅰ　SD03出土遺物実測図(7) ……　25
第24図　B地区Ⅰ　SD04出土遺物実測図 ……　26
第25図　B地区Ⅰ　SD04・05出土遺物実測図 ……　27
第26図　B地区Ⅰ　SD06出土遺物実測図 ……　28
第27図　B地区Ⅰ　SD07出土遺物実測図 ……　29
第28図　B地区Ⅰ　整地層出土遺物実測図(1) ……　31
第29図　B地区Ⅰ　整地層出土遺物実測図(2) ……　32
第30図　B地区Ⅰ　整地層出土遺物実測図(3) ……　33
第31図　B地区Ⅰ　整地層出土遺物実測図(4) ……　34
第32図　B地区Ⅰ　整地層出土遺物実測図(5) ……　35
第33図　B地区Ⅰ　整地層出土遺物実測図(6) ……　36
第34図　B地区Ⅰ　整地層出土遺物実測図(7) ……　37
第35図　B地区Ⅰ　表土及び遺構混入遺物実測図(1) ……　38
第36図　B地区Ⅰ　表土及び遺構混入遺物実測図(2) ……　39
第37図　平成3年度調査(B地区Ⅱ)主要遺構分布図
（1／250）……　40
第38図　B地区Ⅱ　SK23実測図 ……　41
第39図　B地区Ⅱ　SK23出土遺物実測図 ……　42
第40図　B地区Ⅱ　井戸遺構実測図 ……　43
第41図　B地区Ⅱ　井戸遺構井戸枠実測図 ……　44
第42図　B地区Ⅱ　井戸遺構出土遺物実測図(1) ……　45
第43図　B地区Ⅱ　井戸遺構出土遺物実測図(2) ……　47
第44図　B地区Ⅱ　井戸遺構出土遺物実測図(3) ……　48
第45図　B地区Ⅱ　井戸遺構出土遺物実測図(4) ……　49
第46図　B地区Ⅱ　井戸遺構出土遺物実測図(5) ……　50
第47図　B地区Ⅱ　SK02実測図 ……　51
第48図　B地区Ⅱ　SK03実測図 ……　51
第49図　B地区Ⅱ　SK04実測図 ……　51
第50図　B地区Ⅱ　SK05実測図 ……　52
第51図　B地区Ⅱ　SK03・05出土遺物実測図 ……　52
第52図　B地区Ⅱ　SK10出土遺物実測図 ……　53
第53図　B地区Ⅱ　SK10実測図 ……　54
第54図　B地区Ⅱ　SK12実測図 ……　54
第55図　B地区Ⅱ　SK12出土遺物実測図 ……　55
第56図　B地区Ⅱ　SK14実測図 ……　56
第57図　B地区Ⅱ　SK15・16・18・19・20出土遺物実測図 …　56
第58図　B地区Ⅱ　SK19実測図 ……　57
第59図　B地区Ⅱ　SK21出土遺物実測図 ……　57
第60図　B地区Ⅱ　SK22・25出土遺物実測図 ……　58
第61図　B地区Ⅱ　SE11実測図 ……　59
第62図　B地区Ⅱ　SE11出土遺物実測図(1) ……　60
第63図　B地区Ⅱ　SE11出土遺物実測図(2) ……　61
第64図　B地区Ⅱ　SE13実測図 ……　62
第65図　B地区Ⅱ　SE13出土遺物実測図 ……　62
第66図　B地区Ⅱ　SD02出土遺物実測図 ……　64
第67図　B地区Ⅱ　SD03出土遺物実測図 ……　65

第68図　B地区Ⅱ 各地区柱穴状遺構出土遺物 …… 66
第69図　B地区Ⅱ D-6検出柱穴状遺構出土遺物実測図… 67
第70図　B地区Ⅱ 石積遺構実測図 …… 68
第71図　B地区Ⅰ（1次調査）北壁土層図 …… 69
第72図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(1) …… 70
第73図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(2) …… 72
第74図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(3) …… 73
第75図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(4) …… 74
第76図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(5) …… 75
第77図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(6) …… 76
第78図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(7) …… 77
第79図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(8) …… 78
第80図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(9) …… 79
第81図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(10) …… 80
第82図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(11) …… 81
第83図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(12) …… 82
第84図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(13) …… 83
第85図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(14) …… 84
第86図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(15) …… 85
第87図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(16) …… 86
第88図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(17) …… 87
第89図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(18) …… 88
第90図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(19) …… 88
第91図　B地区Ⅱ 石積遺構出土遺物実測図(20) …… 89
第92図　B地区Ⅱ C-5石積遺構出土遺物実測図(1) …… 90
第93図　B地区Ⅱ C-5石積遺構出土遺物実測図(2) …… 92
第94図　B地区Ⅱ C-5石積遺構出土遺物実測図(3) …… 93
第95図　B地区Ⅱ C-5石積遺構出土遺物実測図(4) …… 94
第96図　B地区Ⅱ C-5石積遺構出土遺物実測図(5) …… 95
第97図　B地区Ⅱ C-5石積遺構出土遺物実測図(6) …… 96
第98図　B地区Ⅱ C-5石積遺構出土遺物実測図(7) …… 97
第99図　B地区Ⅱ 整地層出土遺物実測図(1) …… 100
第100図　B地区Ⅱ 整地層出土遺物実測図(2) …… 101
第101図　B地区Ⅱ 整地層出土遺物実測図(3) …… 102
第102図　B地区Ⅱ 整地層出土遺物実測図(4) …… 103
第103図　B地区Ⅱ 整地層出土遺物実測図(5) …… 104
第104図　B地区Ⅱ 整地層出土遺物実測図(6) …… 105
第105図　B地区Ⅱ 整地層出土遺物実測図(7) …… 106
第106図　B地区Ⅱ 整地層出土遺物実測図(8) …… 107
第107図　B地区Ⅱ 整地層出土遺物実測図(9) …… 108
第108図　B地区Ⅱ 表土・表採遺物実測図(1) …… 109
第109図　B地区Ⅱ 表土・表採遺物実測図(2) …… 110

第4章

第110図　日田五郷(夜明郷を除く)と古代の主要遺跡 … 112
第111図　慈眼山遺跡B地区(1・3次)調査出土土器編年図 …… 114
第112図　慈眼山遺跡の字図集成 …… 116
第113図　慈眼山遺跡の現在図と字名 …… 117
第114図　大蔵古城と城下町(慈眼山遺跡)復元想定図 … 119

巻末折込

第115図　慈眼山遺跡(1・3次調査)遺構配置図(1／200)

遺物観察表目次

第1表　遺物観察表（土器・陶磁器　①）…… 121
第2表　遺物観察表（土器・陶磁器　②）…… 122
第3表　遺物観察表（土器・陶磁器　③）…… 123
第4表　遺物観察表（土器・陶磁器　④）…… 124
第5表　遺物観察表（土器・陶磁器　⑤）…… 125
第6表　遺物観察表（土器・陶磁器　⑥）…… 126
第7表　遺物観察表（土器・陶磁器　⑦）…… 127
第8表　遺物観察表（土器・陶磁器　⑧）…… 128
第9表　遺物観察表（土器・陶磁器　⑨）…… 129
第10表　遺物観察表（土器・陶磁器　⑩）…… 130
第11表　遺物観察表（土器・陶磁器　⑪）…… 131
第12表　遺物観察表（土器・陶磁器　⑫）…… 132
第13表　遺物観察表（土器・陶磁器　⑬）…… 133
第14表　遺物観察表（木製品）…… 134
第15表　遺物観察表（土製品）…… 134
第16表　遺物観察表（石製品）…… 134
第17表　遺物観察表（金属製品）…… 135
第18表　遺物観察表（瓦）…… 135
第19表　遺物観察表（銭）…… 135

写真図版目次

巻頭カラー1
慈眼山遺跡（高城麓周辺一瀬戸口・土井ノ内）東から
「一面観音像（3次調査 C-5区出土）
巻頭カラー2
慈眼山遺跡
（「土ノ馬場」の道路　推定地から「高城」・「土井ノ内」を望む）
慈眼山遺跡出土貿易陶磁器
写真図版　1 …… 137
慈眼山遺跡（「瀬戸口」と「土井ノ内」）南から
慈眼山遺跡（B地区Ⅰ）1次調査区全景
写真図版　2 …… 138
B地区Ⅰ（1次調査）SD03全景
B地区Ⅰ（1次調査）SD03近景
B地区Ⅰ（1次調査）SD03遺物出土状況
写真図版　3 …… 139
B地区Ⅱ（3次調査）古代の井戸全景1（東から）
B地区Ⅱ（3次調査）古代の井戸全景2（南から）
B地区Ⅱ（3次調査）古代の井戸全景3（北西から）
写真図版　4 …… 140
B地区Ⅱ（3次調査）古代の井戸近景
B地区Ⅱ（3次調査）古代の井戸と底面の遺物
B地区Ⅱ（3次調査）古代の井戸の内側状況
写真図版　5 …… 141
B地区Ⅱ（3次調査）SE11
B地区Ⅱ（3次調査）C-5石積み遺構とSE13
B地区Ⅱ（3次調査）SE13の井筒
写真図版　6 …… 142
B地区Ⅱ（3次調査）SD02・SD03
B地区Ⅱ（3次調査）石積み遺構（西から）
B地区Ⅱ（3次調査）石積み遺構（南から）
写真図版　7 …… 143
B地区Ⅱ（3次調査）墨書土器「門」・墨書土器「林」
B地区Ⅱ（3次調査）熊泉窯系青磁各器種
B地区Ⅱ（3次調査）龍泉窯系青磁と磁竜窯系の鉢
写真図版　8 …… 144
B地区Ⅱ（3次調査）朝鮮王朝産陶器
B地区Ⅱ（3次調査）備前焼の壺と擂鉢

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

北部九州のほぼ中央部にある大分県日田市は、江戸時代は天領として栄えた都市で、現在でも大分県西部の中心地としての役割を果たしている。このため、市内には税務署や社会保険事務所など国の機関も多数あり、そこで働く職員のための宿舎が、国家公務員合同宿舎である。

日田市城町二丁目にあるこの施設は、昭和63年時点では、平屋で老朽化しており、集約的な再整備が計画されていた。この計画は平成元年から具体化し、国家公務員合同宿舎日田住宅として鉄筋三階建ての鉄筋集合住宅、三棟を建設し、敷地内に駐車場と公園を整備するものであった。

大蔵山古墳跡　慈眼山永興寺

ところが、この場所の北側丘陵部には、中世の日田盆地を治めた大蔵氏と関連する大蔵山古墳跡があり、丘陵から西に延びる尾根の先端には11世紀創建と伝えられる国指定の木造十一面観音像を持つ慈眼山永興寺（えいこうじ）もあり日田の歴史にとって重要な場所であった。そこで、大分県教育委員会は国家公務員合同宿舎建設に先立ち、九州財務局との協議を行い、平成元年に遺跡の範囲・保存状況を調べるため、確認調査を実施した。その結果、建設予定地内には中世の遺構が良好な状態で残っていることが判明した。

こうした経過を踏まえ、大分県教育委員会は、平成２年から大蔵省九州財務局と委託契約を結び、国家公務員合同宿舎（日田住宅）の建設事業に伴う発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の経過

日田市城町二丁目に計画された国家公務員合同宿舎日田住宅は、１号棟・２号棟・３号棟の３棟の建設が予定されていた。平成２年は、敷地内の南寄りに建設される３号棟建設予定地（現１号棟）の発掘調査を実施した。調査区は、東西約53m、南北約13mで、３号棟建設範囲に合わせて設定した。平成２年度の発掘調査は、９月５日に着手し、調査区に沿った東西方向の区画性の強い中世の溝が東端で北側に直角に曲がることを確認して12月17日に終了した。

中世の溝

平成３年度の発掘調査は、平成３年８月８日に着手し、３号棟の北側に建設が予定された２号棟部分と、それに伴い掘削事業を行う範囲を調査区として設定した。調査区からは、平成２年度に検出された区画性の強い、東端が北に屈曲する中世の溝の展開部分も検出された。さらに、中世の井戸や土坑も多数検出され、大規模な中世の居館跡と推測することができた。また、古代の井戸が良好な状態で検出され、平成４年２月19日に終了した。

居館跡

なお、慈眼山遺跡の発掘調査は、以後日田市教育委員会が民間開発に伴い実施しており、県教育委員会が実施した平成２年度国家公務員合同宿舎の調査を１次調査、同年大分県教職員住宅増築に伴う発掘調査を２次調査、平成３年度国家公務員合同宿舎の調査を３次調査と整理し、平成21年12月現在で、10次調査に達している。

第３節　調査組織の構成

慈眼山遺跡の発掘調査体制は以下のとおりである。所属・役職は当時のものである。

平成２年	文化課長	後藤　正二
	文化財第１係長	清水　宗昭
	主査	坂本　嘉弘（調査担当）
	嘱託	新宅　信久（調査担当）
	嘱託	古武　牧子
平成３年	文化課長	秋葉　正嗣
	文化財第１係長	清水　宗昭
	主査	坂本　嘉弘（調査担当）
	嘱託	後藤　方彦（調査担当）

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

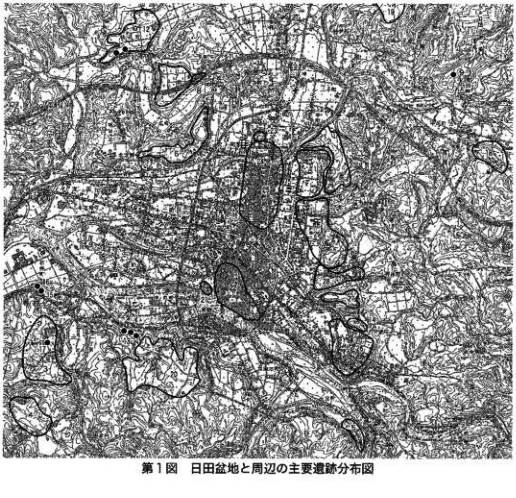
大分県の西部に位置する日田市は、平成の大合併で広域化し、福岡県と熊本県と接する。その中心地は、有明海に注ぐ筑後川の上流名である三隈川流域に開けた標高約80mの盆地である。日田盆地と呼ばれるこの盆地は、南端を三隈川が西流し、この川に北から有田川や渡里川・二串川を合流した花月川が流れ込むことで、この地形が形成されている。盆地の周囲は、標高100mから200mの台地や丘陵があり、山林や畑地・水田として土地利用されている。

三隈川流域

さらにその周囲は、北に標高1200mの英彦山から続く標高343mの田代山や標高345mの龍体山、東に標高678mの月出山岳や標高707mの一尺八寸山から西に延びる山塊、南は標高1150mの渡神岳や標高1231mの釈迦岳から北に延びる山塊があり、九州山地を形成している。こうした山々を源流とする谷川が日田盆地に集合し、日田は「水郷日田」と呼ばれ、水の豊富な地域として知られている。豊かな水量は、流域の水田開発を促し、上流には棚田が整備されており、ほぼ平坦な日田盆地は広大な水田地帯となっている。

「水郷日田」

慈眼山遺跡は、この平坦な水田地帯の東隅に位置し、東側は標高約150mの丘陵があり、北側はその丘陵から西に延びる標高約 120 mの尾根が壁のように遮断する地形に包まれるように立地する。このため、遺跡が形成されている部分は、西に面した緩斜面上となっており、近世以降は棚田の水田として土地利用されている。



1．慈眼山遺跡
2．大鷹古城跡
3．長者原遺跡
4．平野遺跡
5．手崎遺跡
6．吹上遺跡
7．小迫辻原遺跡
8．草場遺跡
9．有田古墳
10．朝日天神山１号古墳
11．朝日天神山２号古墳
12．朝日宮ノ原古墳
13．護願寺古墳群
14．法恩寺古墳群
15．ガランドヤ１号古墳
16．ガランドヤ２号古墳
17．穴観音古墳
18．平鳥遺跡
19．幕原遺跡
20．上野遺跡群
21．日隈城跡
22．日隈城下町跡
23．月隈城跡
24．永山布政所跡
25．月隈城下町跡
26．上井手遺跡
27．会所山遺跡
28．会所宮遺跡
29．六波羅遺跡

第１図　日田盆地と周辺の主要遺跡分布図

第２節　歴史的環境

旧石器時代

日田盆地とその周辺での人間の活動の痕跡は、旧石器時代から見ることができ、盆地南部の段

長者原遺跡

丘上に立地する長者原遺跡や平野遺跡からナイフ形石器や角錐状石器や細石刃が出土している。

手崎遺跡

縄文時代の状況は盆地内でも遺跡が確認されるようになり、盆地の東南部で、三隈川と大山川が合流する自然堤防上には手崎遺跡がある。遺跡からは縄文時代の各時期の遺物が出土しており、河川に面した立地は、縄文人にとって良好な生活環境であったと推測される。特に縄文時代後期後葉の三万田式土器の時期の遺構として、隅丸方形の竪穴住居跡が検出されている。

水田稲作が本格化する弥生時代の日田盆地とその周辺は、遺跡数が急増するとともに、規模も拡大する。盆地の北西部に広がる台地上には、竪穴住居や溝で構成される安定的で、継続的な集

吹上遺跡

落が営まれている。吹上遺跡では、弥生時代前・中期の袋状竪穴が多数検出され、盆地を南に見

貝輪

下ろす台地の縁には南方産の貝輪を身につけ、細形銅剣を副葬した人物の成人用甕棺の墓が複数

細形銅剣

検出されており、日田盆地をひとつのまとまりとする王権の存在を暗示する状況を見ることができる。

小迫辻原遺跡

さらに、小迫辻原遺跡では、弥生時代前期から始まる集落が、後期には楕円形の環濠を持つ集落に変貌し、古墳時代の初めには方形の溝で囲まれた居館を出現させる集落景観の変遷をたどることができる。こうした集落を構成した人々との墓地としては、小迫辻原遺跡の東側に隣接した

草場遺跡

草場遺跡があり、土坑墓や甕棺墓などが200基以上調査されている。

古墳時代は、畿内を中心に分布する前方後円墳に象徴される。日田盆地では前・中期の前方後円墳は確認されていないが、６世紀以降になると、盆地の小河川沿いや縁辺などに横穴石室を持つ前方後円墳や古墳群が築かれるようになる。有田川流域の

有田古墳

有田古墳、二串川流域

朝日天神山１・２号墳

に朝日天神山１・２号墳、盆地南部の石井地

護願寺古墳

区には護願寺古墳、盆地南東部の刃連地区に

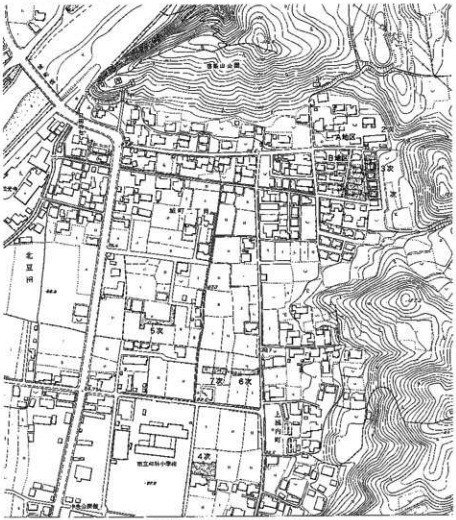
法恩寺古墳群

は法恩寺古墳群を見ることができ、奈良時代の日田五郷の萌芽的な傾向を見ることができる。こうした古墳の中

ガランドヤ古墳

には、石井地区のガランドヤ古墳や穴観音古墳のように、石室面に彩色された装飾を持つ古墳もある。

古墳の造営に係わった人々の集落は、盆地



第２図　慈眼山遺跡の調査状況

葛原遺跡
平鳥遺跡
比多国造
日下部君
邑阿自
日田郡

やそこの周辺で多数確認されており、手崎遺跡や盆地東北部の丘陵上の葛原遺跡、有田川流域の平鳥遺跡など多数調査されている。こうした人々の墓は、盆地を緩取る丘陵の崖面や急斜面に横穴を穿ち、墓地群を形成している。

この頃、国造本紀によると日田盆地と推定される地域に「比多国造」が存在する。また豊後風土記によると、欽明期に日下部君の祖、邑阿自が朝廷に靭部として使えており、畿内勢力と密接につながる、政治領域として成立していると見ることができる。

五郷
上野第１遺跡
郡司
「大領」
中井王
日下部為行

８世紀初頭、大宝律令の制定により、日田盆地とその周辺は、日田郡となり豊後国に組み込まれた。この時の、日田郡は、古墳時代の小地域を継承し、靭編・石井・在田・亘理と日田盆地の西側地域の夜開を加え五郷で成立していた。こうした中、「延喜式」によると、古代駅伝制の石井駅が設置された記載があり、石井地区がその有力地となっている。また平成元年頃に調査した、上野第１遺跡からは、「豊馬豊馬」と刻書された石製品や、８世紀代の掘立柱建物群・竪穴住居跡、連続土坑で構築された南北に延びる道路状遺構が検出され、その可能性を高めている。

律令制定下では、「大領」・「小領」・「主帳」の３名の郡司が任命されるが、盆地北側の台地上にある小迫辻原遺跡からは、南向きに「コ」の字状に配置された８世紀代の掘建柱建物群が検出されており、「大領」と読める墨書された須恵器片が出土し、郡衙の可能性を暗示している。

９世紀の日田盆地に関連する事柄として、「日本後紀」の承和９年（842）に、前豊後国介中井王が日田郡に本拠をおいて、悪政をおこなったと記述している。さらに11世紀になると、長元９年（1036）に日下部為行により、「石井別符」の開発の申請が行われたことが、「宇佐神宮領大鏡」に伝えられている。と同時に、６世紀以来、靭編郷を拠点にし、中央政権と繋がりながら、日田盆地の有力者として存在していた日下部氏は衰退してゆく。

日田大蔵氏
日田神社
大友姓日田氏
大友義鑑
「郡老」
太閤蔵入地
宮本長次郎
日隈城
栗山利安
天領
丸山城
永山城
日田県

以後、日下部氏に代わり日田郡を支配するのが、盆地北部の花月川周辺である在田郷・亘理郷を拠点とする日田大蔵氏である。日田大蔵氏は、地頭職を源頼朝から安堵され御家人となり、開発された領地は寄進され日田荘（金剛心院領）となった。この大蔵氏は花月川左岸の慈眼山丘陵一帯に山城を築き、現在その周辺にある永興寺や日田神社などはその名残と理解されている。

しかし、日田大蔵氏は文安元年（1444）に断絶し、大友姓日田氏に交替するが、大友姓日田氏も日田親将が大友義鑑の勘気を被り、16世紀前半に途絶える。以後日田郡の支配は大友氏から指名された坂本・財津・羽野・石松・堤・高瀬と後に加わる佐藤・世戸口の８奉行の「郡老」が行うが、文禄２年（1593）大友氏が豊臣秀吉により除国されると、豊後国は、太閤蔵入地となる。

日田郡には文禄３年（1594）に宮本長次郎が代官として赴任し、盆地南部の三隈川北岸にある日隈山に日隈城を築き、城下町として東側河畔に隈町を整備した。その後、慶長元年（1596）に毛利高政が入部するが、慶長５年（1600）の関ヶ原の戦いの後、慶長６年（1601）に毛利氏が佐伯藩に転封されると、黒田孝高が入城し、家臣の栗山利安が在城し、日田郡を１年間治めた。

ところが、17世紀初頭、地理的に九州の中央に位置する日田は、江戸幕府が天領とし、代官小川光氏が赴任する。小川は盆地中央部にある月隈山に丸山城を築き、南側に丸山町を整備した。その後、元和２年（1616）に入部した石川忠総は丸山城を永山城に改め、城下町として豆田町を造成する。以後、この地は17世紀代に中津藩・杵築藩・肥後熊本藩の預地や天和２年（1682）から貞享３年（1686）の日田藩主松平氏領の一時期を除き、日田代官所として、幕末まで続く九州の政治的な拠点となる。そして明治維新を迎えた天領日田は、明治元年（1868）に日田県となるが、明治４年（1872）大分県に編入され今日に至る。

第３章　調査の方法と成果

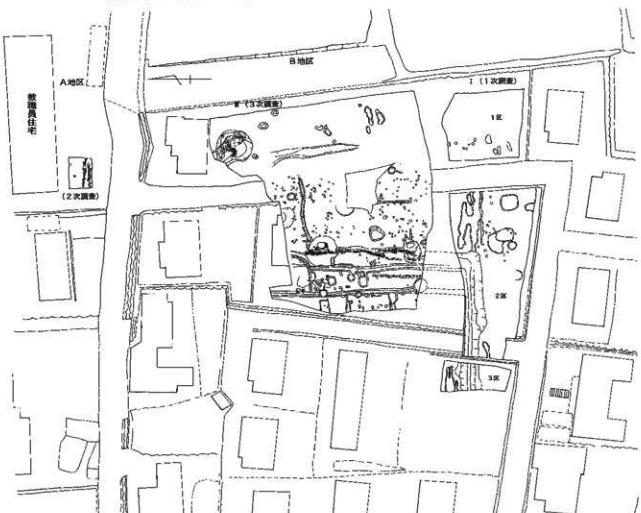
第１節　調査の概要

１．調査区の設定

平成元年から平成３年にかけて、慈眼山遺跡のある日田市城町二丁目では、大分県教職員住宅の増築や国家公務員合同宿舎の建設などが相次いで計画・施工された。遺跡は周知遺跡であったため、大分県教育委員会では、それに伴い確認調査と本調査も順次実施した。しかし、平成２年度は教職員住宅（２次調査）と国家公務員合同宿舎の建設工事に伴う調査が同じ平行して行われた。このため、混乱を避けるため、先に着手した教職員住宅の南側を東西に通る道路を境に、北側をＡ地区、国家公務員合同宿舎の建設予定地である南側をＢ地区とした。

慈眼山遺跡Ｂ地区となった国家公務員合同宿舎建設予定地は、平成元年度の確認調査に基づき、平成２年度に３号棟建設予定地の本調査を実施した。その調査区（１次調査）は、慈眼山遺跡Ｂ地区Ｉとし、東西に長い建設予定地に合わせて、東西に細長い形状となった。検出された遺構は、溝・土坑などがあったが、それぞれ種類別に１号から順に命名した。このため１号溝と１号土坑が存在する。

平成３年度は、前年度と北に隣接する２号棟建設予定地とその周辺の削平部分の発掘調査を実施した。（３次調査）調査区名は前年度の命名方法を継承し、慈眼山遺跡Ｂ地区Ⅱとし、調査区内に磁北を中心に南北10m、東西８ｍのグリットを設定し、第37図のように南北方向に北からＡ～



第３図　慈眼山遺跡調査区位置図（１／600）

E、東西方向に東から１～６とした。検出された遺構名は溝をＩ号から、井戸を含む土坑もＩ号から順に命名したが、古代の井戸は井戸遺構とした。柱穴状遺構は、グリットごとにピット１から順に番号を付け、調査を実施した。

古代の井戸

平成３年度の調査成果は、平成４年３月に概報として刊行しているが、その遺跡名は慈眼山に調査区の字名である瀬戸口を加え「慈眼山瀬戸口遺跡」としている。

２．遺構と遺物

慈眼山遺跡は、周辺にかつて中世の仏像群を持つ寺院があること、山城があること、城町の地名などから、中世の居館やそれに関連する遺跡を想定していた。平成元年の試掘調査でもそのことが証明され、平成２・３年の２回にわたる発掘調査では、この想定どおり、中世の遺構群とそれに伴う遺物が出土したほか、古代の遺構・遺物も検出された。

中世の居館

古代の主要遺構は井字状に板組した井戸枠の井戸であるが、周辺からは「門」や「林」の文字を墨書した須恵器が出土している。

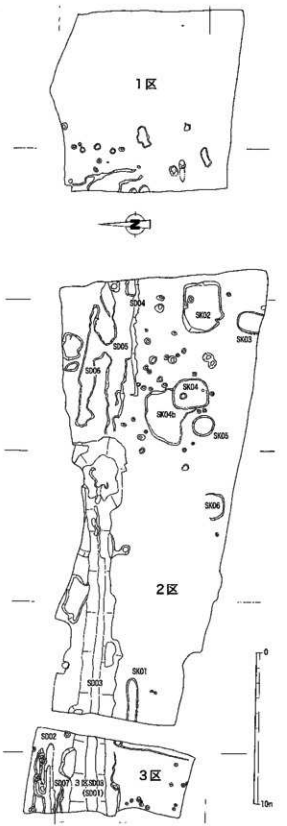
井戸枠

墨書

中世の遺構は、区画性の強い東西方向の大規模な溝や、西に緩く傾斜する斜面を削って平坦面を創出した造作の痕跡が認められ、さらに段を補強するため石積みも確認された。こうした区画内からは井戸や土坑が検出され、遺構内からは中国産の青磁や白磁に伴い多量の土師質土器が出土した。中でも注目されるのは一寸程度の青銅製の十一面観音菩薩像である。

十一面観音菩薩像

以上のように、慈眼山遺跡で検出された古代と中世（15世紀）の遺構と遺物から想定すると、日田盆地の中で、断続的な、政治的中心地であった可能性を示すものと言える。



第４図　平成２年度調査（Ｂ地区Ｉ区）主要遺構分布図

第２節　平成２年度調査－１次調査－（Ｂ地区Ｉ）

Ｂ区Ｉの調査区は東西に細長く、地下の埋設物や道路の関係で、東から１区・２区・３区に分けて調査を実施した。遺構名は調査時は土坑・溝としたが、報告ではそれぞれSK・SDで行う。

１．土坑

SK01

SK01は、２区の南で検出された東西に細長い土坑である。確認できた遺構の規模は、長さ2.8m、幅0.7mで、西端は未調査区となっている。深さは約５cmと浅く、床面は平坦である。遺構内からの出土遺物は細片が多く、図示していない。時期は15世紀代であろう。

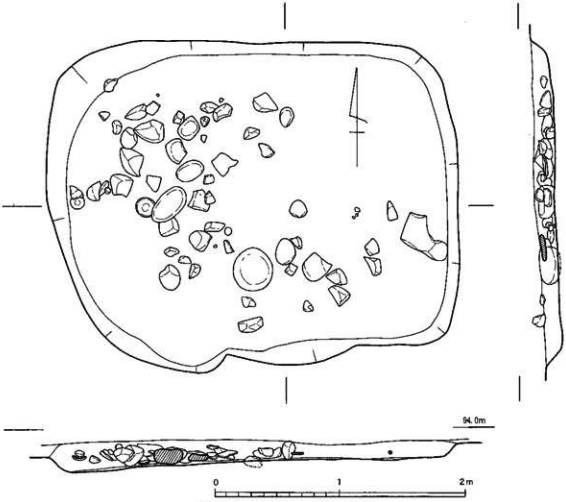
SK02

第５図に図示したSK02は、２区の東部で検出された。形状は概ね隅丸長方形で、長軸をほぼ東西にとる。遺構の規模は、南北約3.3m、東西約2.5mで、検出面から約８cmの深さで、平坦な床面に達する。遺構内からは、土師質土器の坏をはじめ、多数の遺物が出土した他、拳大や大小の礫が多数検出された。

代表的な出土遺物は第６図１～３に図示した。１・２は土師質土器の坏で、ほぼ完形品で出土した。底部は糸切り底で、内面は撫で仕上げられている。特に２の内面底部近くは強い押さえによってロクロ目が残されている。２点とも口径は約13cmで、器高は約３cmである。

挽き臼　３は挽き臼の下臼の破片である。安山岩製で、受け部の口径は約33.4cmで、内面は研磨されている。底径は29.4cmで、外面には敲く打板やノミの加工痕跡を残す粗い仕上げである。

遺構の時期は、土師質土器の器形から15世紀代と想定する。



第５図　Ｂ地区Ｉ　SK02実測図

SK03

SK03は２区の南壁沿いで検出された南北方向に長い楕円形の土坑である。調査は、遺構の北側部分のみを掘削し、確認された遺構の規模は、南北1.5m以上、東西1.5mで、検出面からの深さは、約20cmで、床面は平坦である。

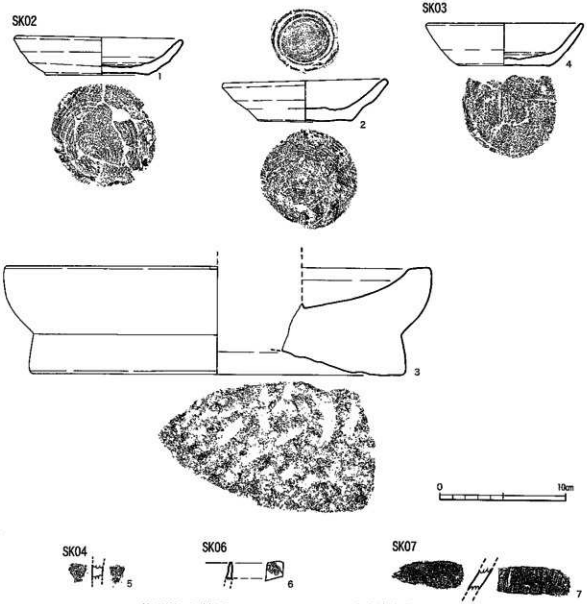
遺構内からは、第６図４に図示した糸切り底の土師質土器の坏が出土している。

SK04

第７図に図示したSK04は、２区で検出した土坑で、北西部で同規模の浅い不定形な土坑と切り合う。調査時の遺構名は、図示した土坑をSK04ａ、北西部の浅い土坑をSK04ｂとしたが、SK04bは出土遺物も少なく、形状も不明確で不定形であるため、本書では、SK04aをSK04として報告する。

SK04の形状は、概ね南北方向に長軸を持つ隅丸長方形をしている。その規模は、南北約2.8m、東西約2.2mである。遺構の床面は、中央部に直径70cmの掘り込みがあるなど平坦ではなく、検出面からの深さは、最深部で35cmある。

遺構内からの遺物の出土状況は、流れ込んだように、小さな土器片が多数出土している。この



第６図　Ｂ地区Ｉ　SK02・04・06・07出土遺物実測図

ため、図示をしたのは第６図５のみである。この土器は、内面に布目の圧痕が残り、古代の製塩土器と考える。しかし、これ以外の土器片は、中世の土師質土器の破片が目立つ。このため、土坑の時期は、15世紀代と考える。

製塩土器

SK05

第８図に図示したSK05はSK04の西側に隣接して検出された土坑である。遺構の形状は、直径約1.4ｍの、ほぼ正円形をしており、検出面からの深さは、床面がレンズ状に窪むため、中央部が一番深く約20cmである。

遺構内からは、小破片が流れ込んだ状況で、検出された。小片であるため、図示していないが、土師質土器であり、周辺の遺構の時期とほぼ同じと考える。

SK06

SK06は、２区の中央南寄りで検出された浅い土坑である。形状は、直径約1.8ｍの円形状をしているが、北側は削平され不明である。検出面からの深さは、南寄りの遺存状況が良く、約30cmある。

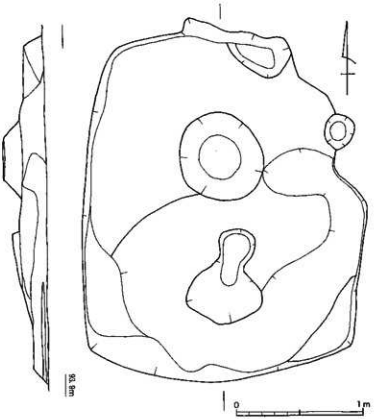
遺構内からは、流れ込んだ状況で土師質土器等が出土した。第６図６に図示したのは外面に細い隆起線文で描いた文様がある青白磁である。

青白磁

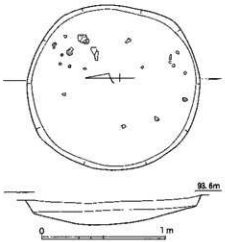
SK07

SK07は、２区の北端で検出した土坑で、SK02の北側にあたる。遺構の規模は長軸が約1.2m、最大幅約0.8ｍの東西に長い土坑である。検出面からの深さは、約25cmで、遺構内からは流れ込んだ状況で、土器の細片が出土した。第６図７に図示した遺物は、滑石製の石鍋の破片である。周辺の遺構と同じく、15世紀代の土坑と考える。

滑石製の石鍋



第７図　Ｂ地区Ⅰ　SK04 実測図



第８図　Ｂ地区Ⅰ　SK05 実測図

２．溝

Ｂ区Ｉでは、東西方向に延びる数条の溝が検出された。特に２区から３区にかけて検出された溝は、規模も大きく区画性の強いものである。この溝の名称は、３区から順に遺構検出したため、３区で検出した部分を SD01、２区で検出したより広範囲で、多くの遺物が出土した部分を SD03 として調査を実施している。本来は同じ溝であるため、報告では SD01 を３区 SD03 とし、SD01 を欠番とする。

SD02

３区で検出された東西方向に延びる細長く浅い複数の割り込みをSD02とした。遺構の形状は、少なくとも二条の溝が接して掘り込まれており、東側で二手に分かれ、削平のためか途切れている。両者の先後関係は不明であるが、大きな時期差は考えられない。

確認された遺構の規模は東西約4.6m で、北側の溝の幅は約50cm、南側の溝の幅は約60cm で、西側は調査区の外に延びている。検出面からの深さは、両者とも約20cm で、底面は比較的平坦である。

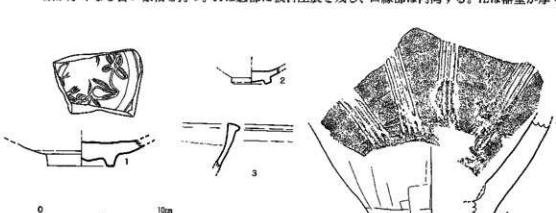
遺物は、両方の溝とも、廃棄された状態で、礫と一緒にまとまった量が出土しているが、溝ごとの遺物の区分が困難であったため、一括して報告を行う。それらは、第９･10図に図示したが、第９図１は龍泉窯系の青磁碗の底部である。高台周辺は露胎で、見込み部分には釉の下にヘラ描きの文様がある。２は、白磁碗の底部である。高台周辺は露胎となっている。３は焼締め陶器の鉢である。肥厚した口唇部から内面は露胎で、外面は自然釉がかかっている。４は底径7.5cm の暗灰色をした瓦質土器の捕鉢である。四本の櫛歯で擂り目を加えている。

龍泉窯系
白磁
焼締陶器
瓦質土器擂鉢

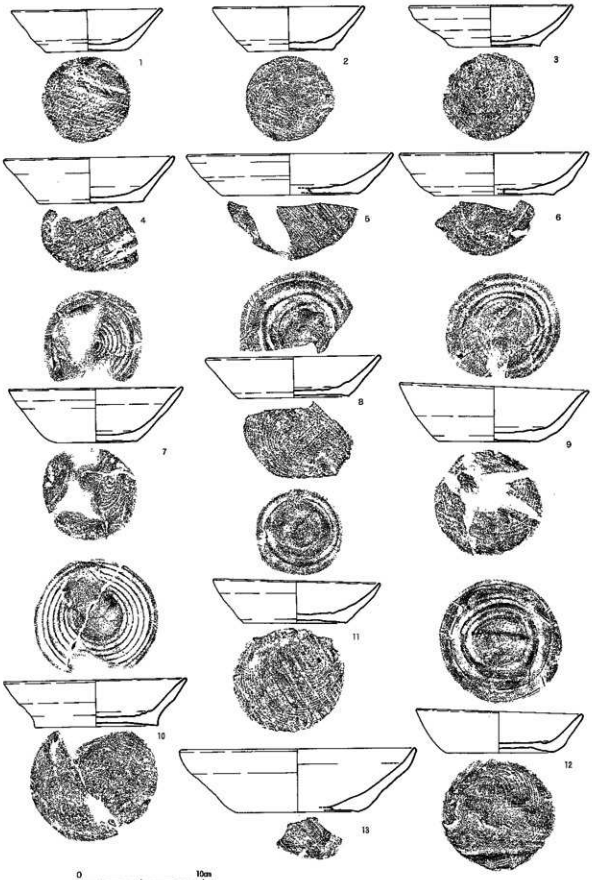
第10図１～13は土師質土器の坏である。検出された状況は、１・２・９・11・13は完形品で、それ以外の土師質土器も３分の１から４分の３程度残る大型の破片で、使用後一括して廃棄された様子である。製作方法はいずれも底部は糸切り底で、粘土塊から切り離した粗らかい段階に簀の子状の板に乗せるためか、板目圧痕が観察される。口縁部や内面は撫で仕上げである。口縁部の断面形は、底部近くの器壁が厚く、口縁端部にかけて、尖るように延びる。１・２は底部に板目圧痕が残り、内面はロクロ回転を利用した渦巻き状の撫で跡が観察できる。３は３分の２程度の破片で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。４は３分の１程度の破片である。底部には簀の子状の板目圧痕が残り、口縁部はわずかに肥厚する。５・６は３分の１程度の破片である。５の底部は細かい斜め方向の圧痕が観察できる。

板目圧痕

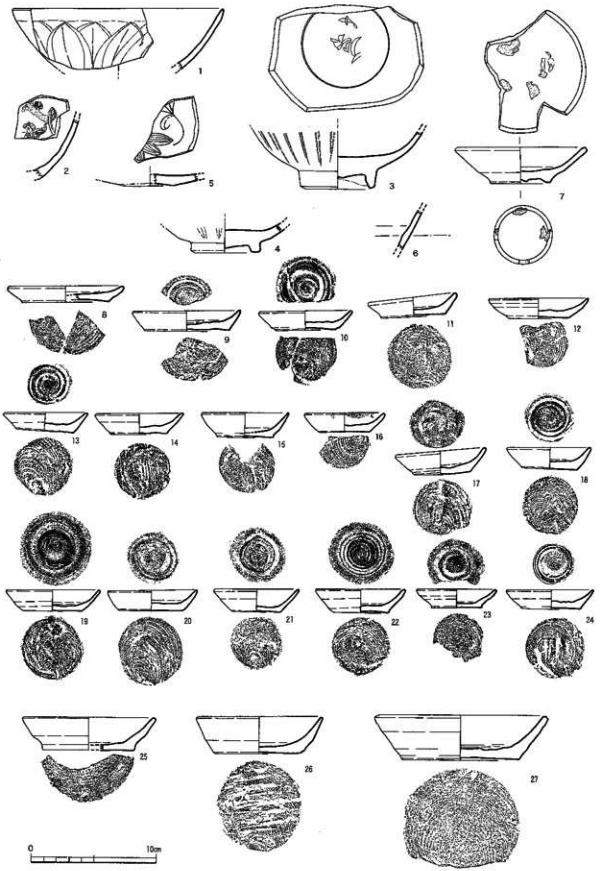
７は底部・口縁部とも薄手の仕上げで、器高も高く碗的な様相を見せる。口縁部はわずかに肥厚し、内面には強い押さえによるロクロ目が観察できる。８は３分の１程度の破片である。内面に指押さえによる渦巻き状のロクロ目が残る。９は口縁端部が外反する。10の口縁部は注意で器壁が厚くなる古い様相を持つ。11は底部に板目圧痕を残し、口縁部は内湾する。12は器壁が厚く、



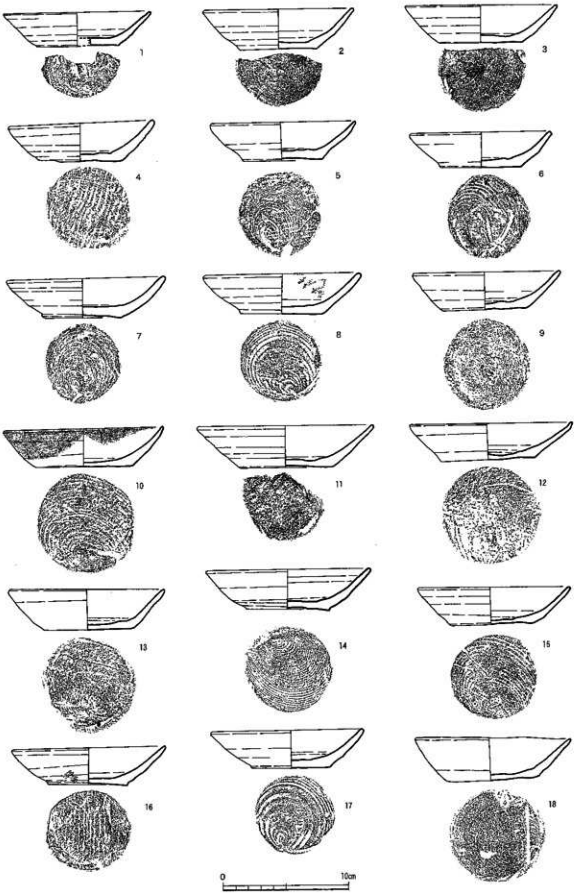
第９図　Ｂ地区Ｉ　SD02 出土遺物実測図(1)



第10図　B地区Ⅰ　SD02出土遺物実測図(2)



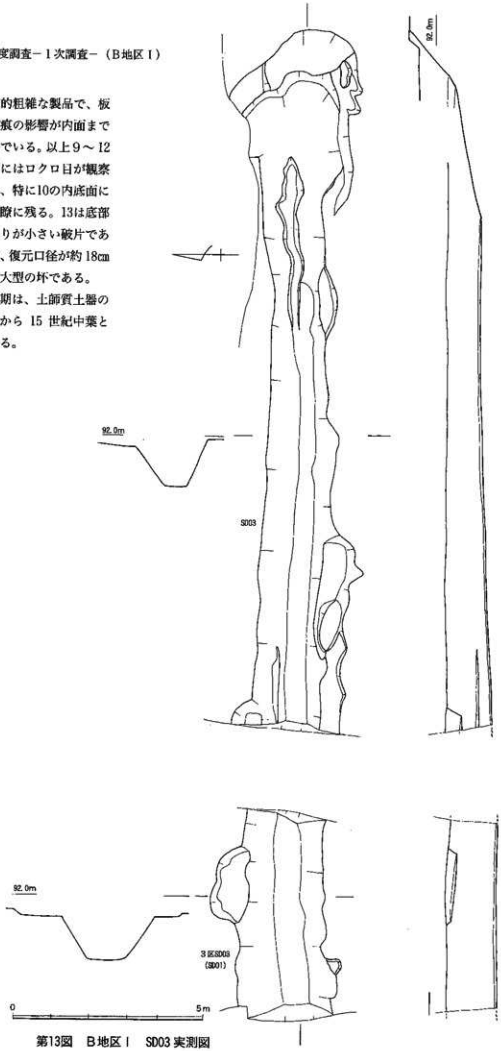
第11図　Ｂ地区Ｉ　３区SD03出土遺物実測図(1)



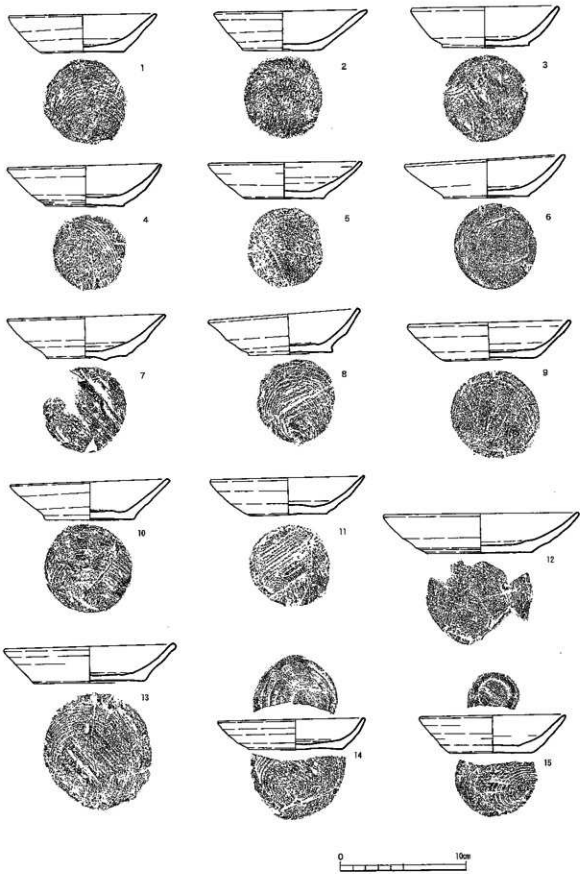
第12図　Ｂ地区Ⅰ　３区SD03出土遺物実測図(2)

比較的粗雑な製品で、板目圧痕の影響が内面まで及んでいる。以上９～12内面にはロクロ目が観察され、特に10の内底面には明瞭に残る。13は底部の残りが小さい破片であるが、復元口径が約18cmある大型の坏である。

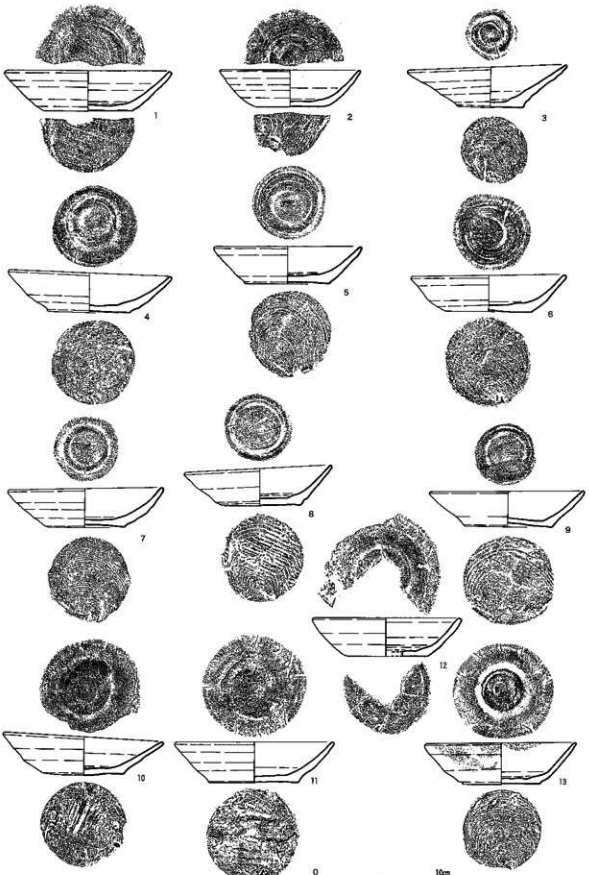
時期は、土師質土器の器形から 15 世紀中葉と考える。



第13図　Ｂ地区Ｉ　SD03 実測図



第14図　Ｂ地区Ⅰ　３区 SD03 出土遺物実測図(3)



第15図　Ｂ地区Ⅰ　３区 SD03 出土遺物実測図(4)

SD03

SD03はＢ区Ｉで検出された最大規模の遺構である。確認された遺構の規模は、東西に約22m直線的に延び、東端部で北に屈曲する。検出面から底面までの深さは、東端部で約0.9m、西端部で1.5mであり、その比高差は約60cmで、流れ込んだ水は地形的な傾斜に沿って東から西に流れる。

遺構内からの出土遺物は第11・12・14～23図に図示したが、出土状況と位置をできるだけ限定するために、２区と３区出土の遺物を区別して報告する。

第11・12・14～16図は３区出土のSD03の遺物である。先に述べたとおり、調査時はSD01で遺物の取り上げを行っている。第11図１は龍泉窯系の青磁碗で、鎬蓮弁が外面に施文されている。２～４も龍泉窯系の青磁碗で、２は内面に文様があり、３・４の底部は外面に鎬蓮弁が施文されており、高台の内側は露胎となっている。５は見込み部分に花文のある白磁の皿である。６は外面の上位に厚い黒褐色、内面には稜があり薄い茶色の釉がかかる。以上は中国産陶磁器である。７は暗灰色で、内面と高台に４ヶ所目跡が残る口径10cmの雑釉陶器で、朝鮮王朝産と考える。

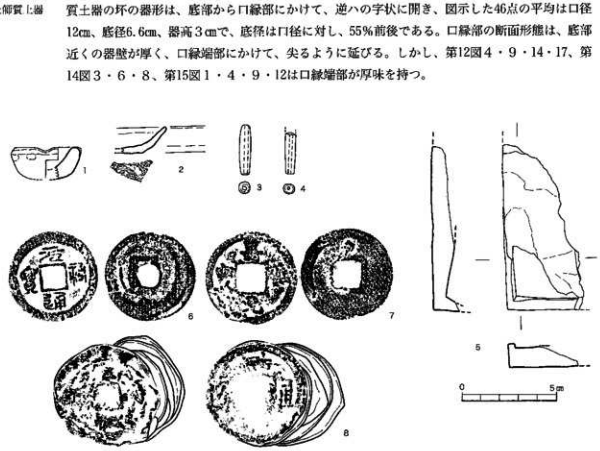
龍泉窯系
青磁碗
鎬蓮弁

８～24は土師質土器の皿である。特に８・９は口径に対し、器高が低く、さらに、口径に対し底径の比率は78％と大きく古い様相を持つ。10～24は口径６～７cmで、口径に対して底径の比率は66％前後で、器高は1.7cm前後の小皿であり、８・９に比較すると器高が高い。中でも15・17・21・22は器高が２cm前後で、小坏の形態を呈する。底部は糸切り底であるが、11・14・17・19・24には板目の圧痕が残る。また、内底面は、強い押さえで整形するためか、10・13・18・21・22のように、らせん状の回転痕のあるロクロ目が観察できるものが多い。さらに、16は口縁部にススが付着しており、灯明皿として、利用されている。

雑釉陶器
朝鮮王朝産

第11図25～27は土師質土器の坏であるが、口径に対し底部の径は70％前後で、底部径が大きく、古い様相を持ち、８・９の皿とセットになる可能性が強い。これに対し、第12・14・15図の土師質土器の坏の器形は、底部から口縁部にかけて、逆ハの字状に開き、図示した46点の平均は口径12cm、底径6.6cm、器高３cmで、底径は口径に対し、55％前後である。口縁部の断面形態は、底部近くの器壁が厚く、口縁端部にかけて、尖るように延びる。しかし、第12図４・９・14・17、第14図３・６・８、第15図１・４・９・12は口縁端部が厚味を持つ。

灯明皿
土師質土器



第16図　Ｂ地区Ｉ　３区SD03出土遺物実測図(5)

器面調整は、底部が糸切り底で、他の面はロクロ回転による撫で仕上げである。特に内面の撫でについては、第15図７～13に図示しているように、口縁部との境を強く押して、凹線状になっている。さらに、第12図12・16、第14図７・８・11・13、第15図１・８・10のように底部に明確な板目の圧痕が付くものが多く、製作時の状況を知ることができる。

金属滓　第16図12の土師質土器は、二次焼成を受けており、内面に金属滓が付着していることから、鋳造作業を行った際に、再利用されたものと考える。

坩堝　第16図Ⅰは手捏ねの坩堝で、小型であるが、片口が付く。２は糸切り底の土師質土器の坏である。

土錘　るが、内面に金属滓が融着しており、鋳造具として再利用されている。３・４は土錘である。３

赤問石の硯　は完形で、3.4ｇあり、４は一部を欠くが、同程度であろう。５は赤問石の硯の破片である。池の

銅銭　部分が確認できる。６～８は銅銭であるが、６は1086年初鋳の北宋銭で、篆書体で書かれた「天祐通寶」の銘がある。７は1056年初鋳の北宋銭で「嘉祐元寶」である。８はすくなとも４枚の銅銭が融着している。判読できる両側の銭貨名は、北宋の1009年初鋳の「祥符元寶」と同じく北宋の1111年初鋳の「政和通寶」である。

龍泉窯系　２区出土のSD03の遺物は第17～23図に図示した。第17図１は口径16.4cmの龍泉窯系の青磁碗

青磁碗　である。２も龍泉窯系の青磁碗の底部である。施釉は高台まで付けられており、底部内面は露胎で

白磁皿　ある。３は口唇部が露胎の口禿げの白磁皿である。４・５は焼締陶器の徳利である。器壁は薄く、

船徳利　器面は回転を利用した撫で仕上げである。底径は13.5cmで、朝鮮王朝産の船徳利である。

備前焼　６～８は備前焼の擂鉢である。口縁部の立ち上がりが、６の突起状から８の帯状になり、時間

焼締陶器壺　的な推移を見せる。９は無頸の焼締陶器の壺で、外面に緑色の自然釉が付着する。

菊花文　10～14は瓦質土器である。10は口縁部が肥厚し、上面に平坦部を造り出し、大きく内湾する大型の鉢である。外面には二条の平行沈線が廻り、その間に菊花文のスタンプを連続して施文している。11も同じ手法による同じ文様が口縁部に廻る鉢である。口縁部の形態は、口唇部の内外端がヘラ磨きで稜を生じており、装飾的に波を打つ。12は内外面ともヘラ磨きで仕上げられている。鉢の底部近くの破片である。13は鉢の底部に付く脚の破片である。形態は接地部から二段になり、段の境目から蒙手状に文様が施文されている。14も鉢の脚であるが。猫足状に先端が肥厚し、外側に丸くふくらむ。器面は丁寧にヘラ磨きされており、鉢との接合部に横方向の穿孔がある。

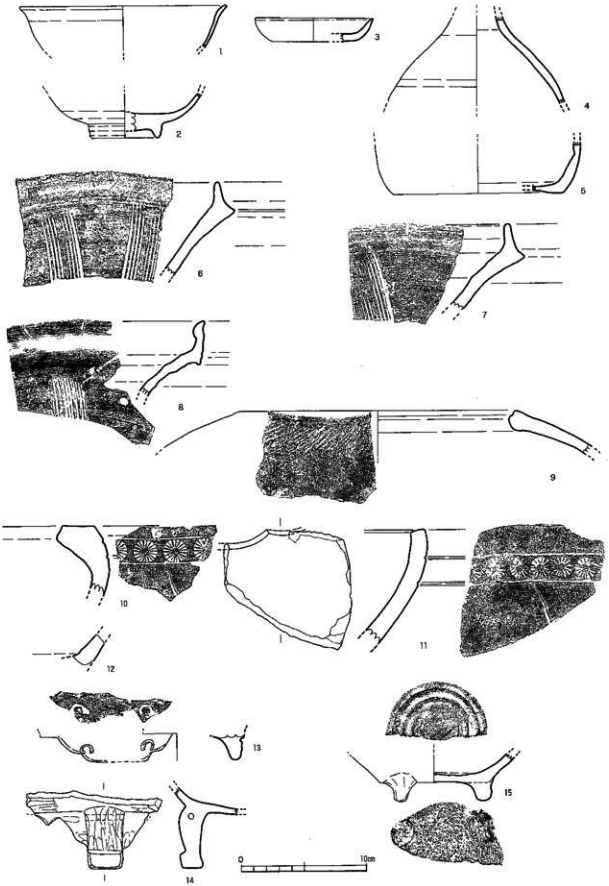
15は糸切り底の土師質土器に粘土塊を付けた脚付の坏である。内面は回転を利用した強い押さえのロクロ目が残る。脚は位置から３ヶ所と想定できる。

土師質土器　SD03から最も多く出土した遺物が、第18～23図の土師質土器である。これらは、製作時に底部は糸切りで粘土塊から切り離され、その痕跡が残る。また、底部には、第18図10・12・14・16、第19図３、第20図３～６、第21図２～５、９・11・14、第22図４、第23図１～３、６～10などのように明確な板目状の圧痕が付いているものも多く、糸切りされた直後、スノコ状の台に置き、乾燥過程に移ったと想定できる。

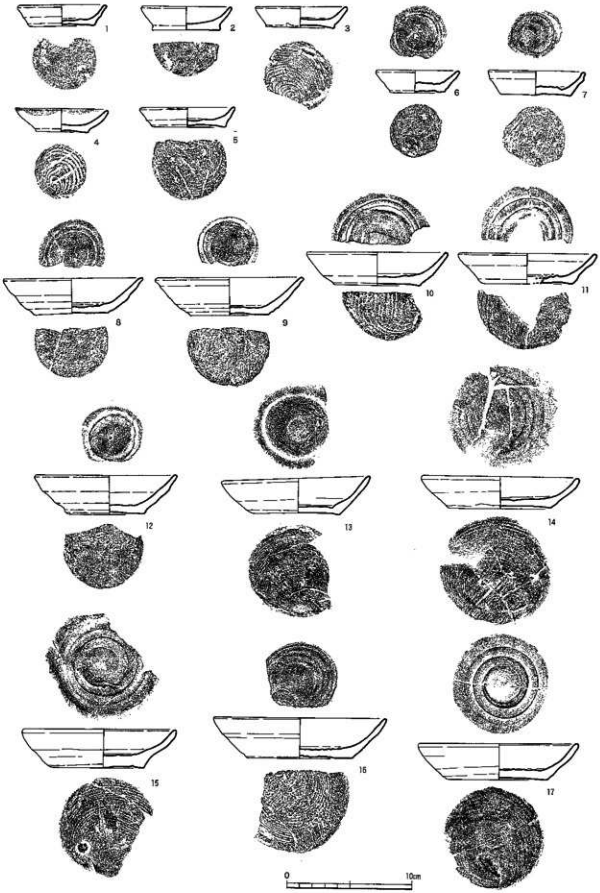
底部以外の器面は、ロクロ回転を利用した撫でで仕上げられている。特に内面は、第18図14～17、第20図４・５、第21図１、第22図３・７のように、幅広の強い指押さえのようなものや、第18図11、第19図１・３・11、第20図１～３、第21図３、第22図２・６のように、器面調整具による細い沈線状の螺旋状の成形痕跡を残している。

色調は、多くが明橙褐色・明褐色・白褐色の明るい色をしており、胎土には多寡の差はあるものの、砂粒や赤色粒を含むものが多い。

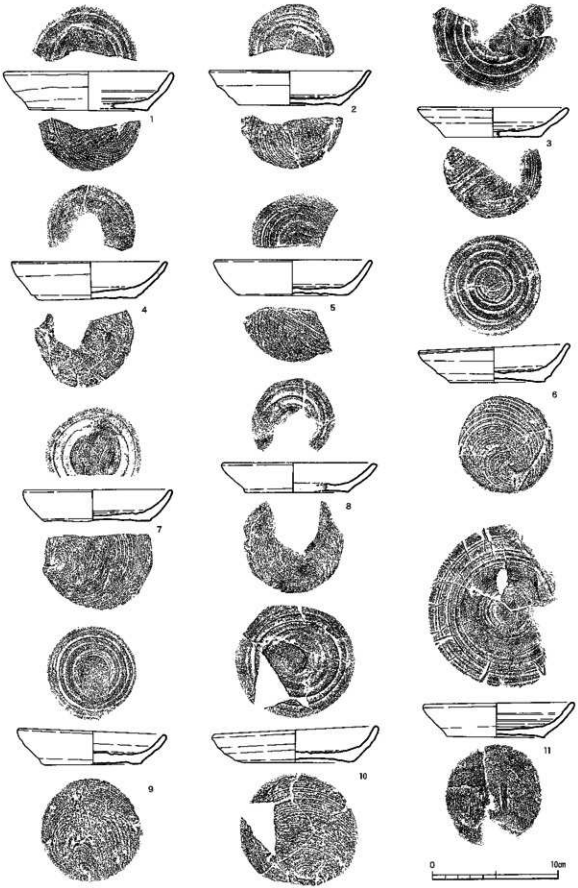
器形は大きく、第18図１～７と第22図１の口径が6.5～7.4cmの皿又は小坏と、それ以外の口径約11cm以上の坏がある。前者の口縁部に対する底部の比率は、多くが70%台であるが、４と６は55%と65%で、底部が小さく、口縁部が逆ハの字状に延びる。特に、４はその特徴が顕著である。



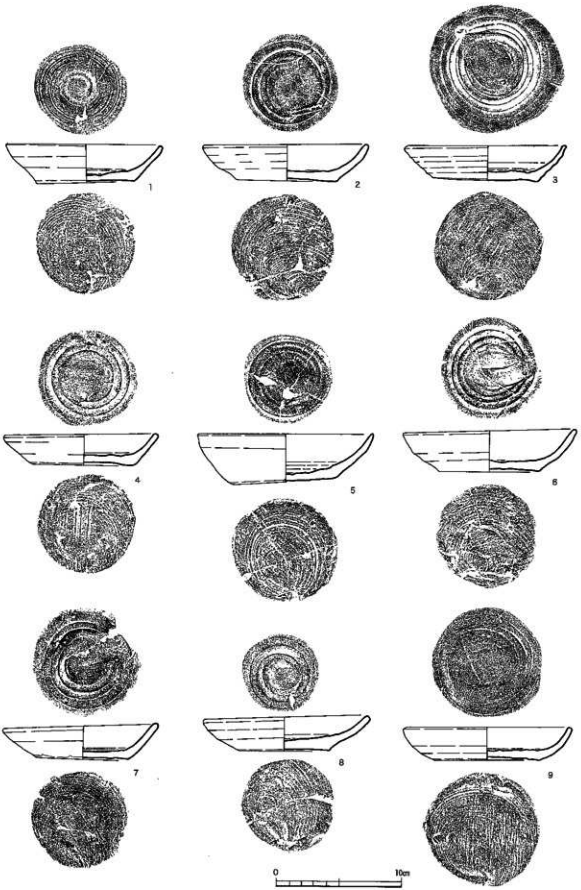
第17図　Ｂ地区Ｉ　SD03 出土遺物実測図(1)



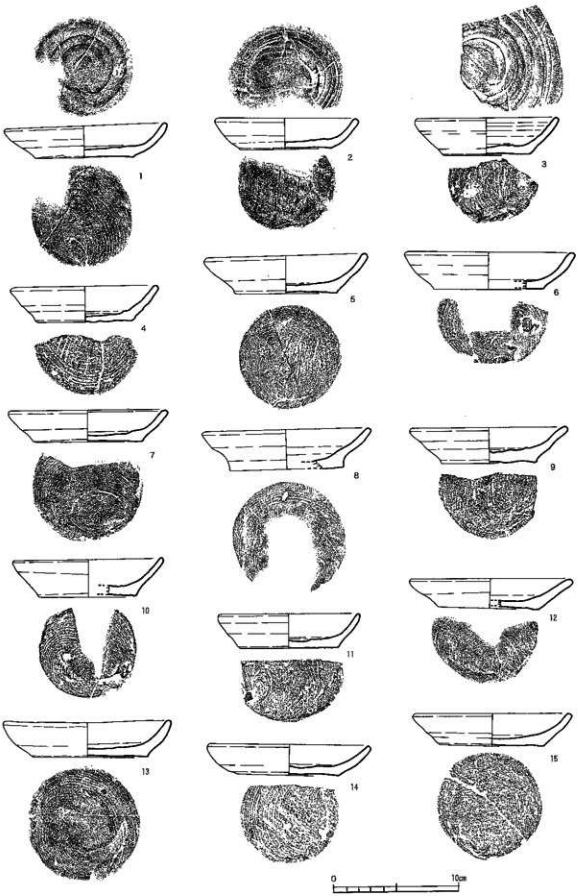
第18図　Ｂ地区Ｉ　SD03 出土土器実測図(2)



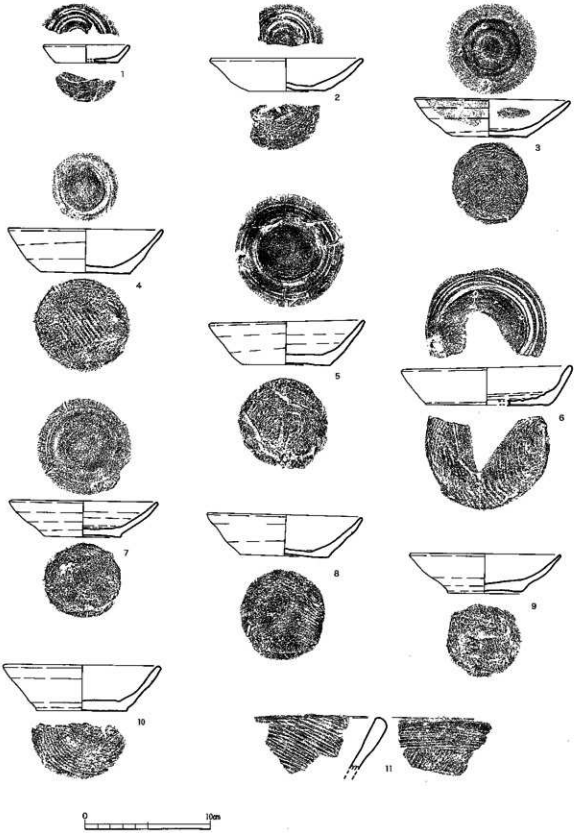
第19図　Ｂ地区Ⅰ　SD03 出土遺物実測図(3)



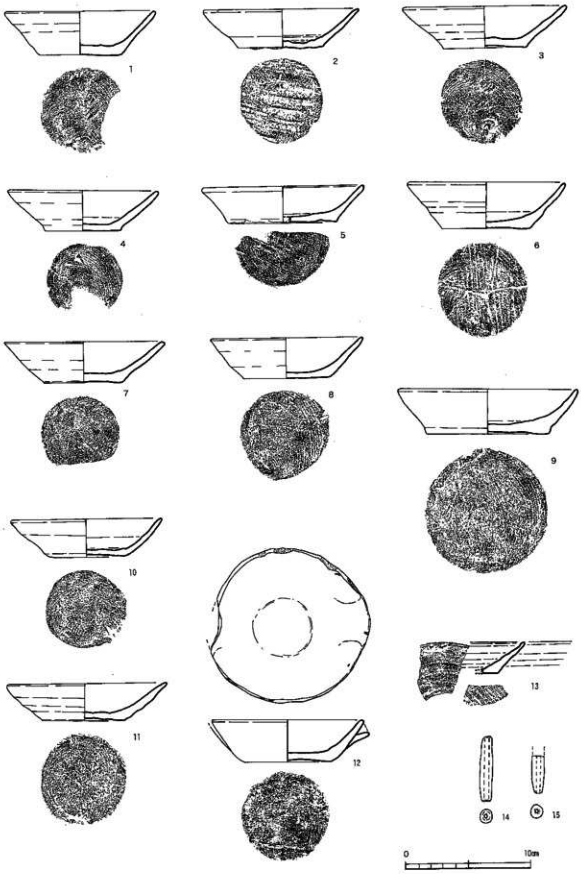
第20図　Ｂ地区Ｉ　SD03 出土遺物実測図(4)



第21図　B地区Ⅰ　SD03出土遺物実測図(5)



第22図　Ｂ地区Ｉ　SD03 出土遺物実測図(6)



第23図　Ｂ地区Ｉ　SD03 出土遺物実測図(7)

灯明皿

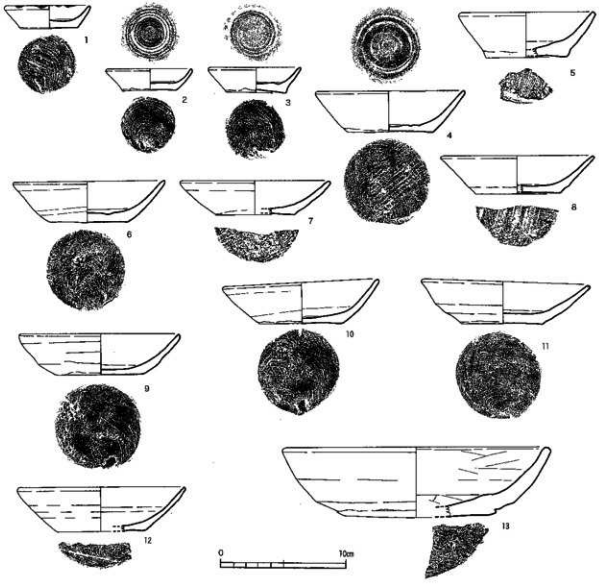
第18図４・７はススが付着しており、灯明皿として再利用されている。

図化した後者の器形の法量は、口径が10.9cmから13.7mで2.9cmの幅に収まるが、底径は3.9cmと幅が広い、また器高も2.3cmから3.7cmの1.5cmの幅がある。このため、明らかに口径に対し、器高が低い皿形と、高い坏形の２種類に分類できる。それを数値で示すと、中間数値があるものの、皿形は口径に対し器高が20%前後、坏形は25%以上になると器形が明確化する。

皿は、器高が低いため、当然口縁部の立ち上がりが短い。このため、底径と口径の差が比較的少なく、口径に対する底径の比率は、60%以上となっている。また、成形にあたっては、口縁部をやや肥厚させ、端部は丸みを持って仕上げているものが目立つ。第18図11・14・17、第19図２・３・６・７～11、第20図２～４、６～９、第21図１・２・７・12～15がこれらに該当する。

坏は、器高を高く仕上げているため、口縁部の立ち上がりが長く、外傾して仕上げている。口径は、底径に対して大きくなっている。数値的に、多くは口径に対して底径の比率は、50%台を示している。さらに、成形にあたっては、口縁部を長く引き延ばして仕上げるためか、口縁端部が尖るような形態となっているものが目立つ。第18図８・９・12、第20図５、第21図３・４・10、第22図３～５・７～10、第23図１～11が該当する。

第22図11は内外面斜目方向の刷毛目状の道具で、器面調整をしており、さらに口縁部外面は横



第24図　Ｂ地区Ｉ　SD04 出土遺物実測図

方向に撫でられている鉢である。第23図12は口径11.8cm、底径７cm、器高3.2cmの土師質土器の坏であるが、対称となる２ヶ所を下方に押さえ、片口状に成形している。13は内面に金属滓が付着しており、鋳造具として再利用している。14・15は、土錘である。14は完形品で、6.2ｇあり、15は3.2ｇであるが、一部を欠いており、本来は14と同じ程度の大きさであったと考える。

片口
鋳造具
土錘

SD03の時期は、最も多く出土した在地系の土師質土器で決めることは困難である。しかし、龍泉窯系の青磁や備前焼については、編年が整備されている。それによると、龍泉窯系青磁は14世紀代であるが、伝世の可能性が強い。日用雑器である備前焼の擂鉢は15世紀代であり、遺構はこの時期に埋没したと考える。

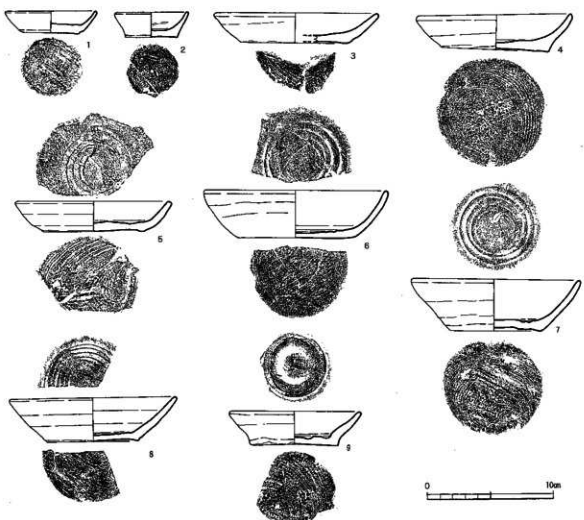
龍泉窯系青磁
備前焼

SD04

SD04は区画性の強い溝であるSD03の東側に延びる幅30cm、深さ約20cmの細く浅い溝である。長さは約10m確認され、東側の調査区外に続いているが、１区では削平のためか、検出されていない。第24図に図示した遺物は、この溝の中から出土したものである。

遺物は全て、土師質土器の小坏と坏である。１～３は口径が6.5cmから7.1cm、底径が4.3cmから4.9cmで、器高が1.7cmから1.9cmで、口径に対する器高の比率が27%を測り、比較的深めで、小坏的である。また、内底面には強い押さえのため、螺旋状のロクロ目が残る。１の口縁部にはススが着き、灯明具としても利用されていつ。

４～12は口径が10.4cmから13.2cm、底径が６cmから７cm、器高は2.7cmから3.6cmの坏である。



第25図　Ｂ地区Ｉ　SD04・05出土遺物実測図（１・５・６のみSD05）

しかし、SD03と同じように、口径に比較すると器高が低い皿的な形態と、４・５・６・８・９・12のように器高が高い坏がある。また、口径に対する底径の比率は50％台で、底径が小さい。糸切り底の底部には４・８・11のように板目の圧痕が明確に残るものもある。

大型の坏　13は破片であるが、大型の坏に復元できる。口径は20.7cm、底径は11.4cm、器高は6.5cmで、内面は板状の道具で撫でられている。

時期は、15世紀代と想定し、SD03と同じと考える。

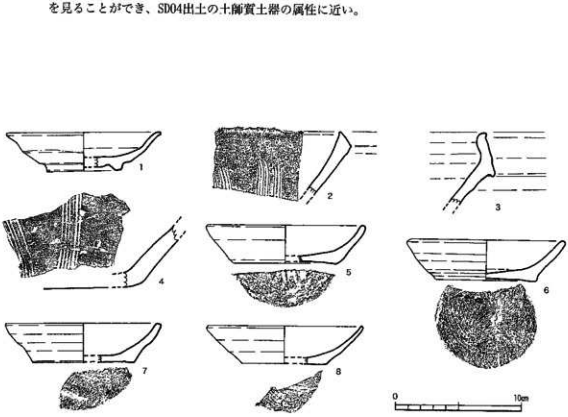
SD05

SD05は、SD04の北側に平行して掘り込まれた幅広の浅い溝である。遺構の規模は、幅約１ｍであるが、壁面の形状は不定形で、蛇行している。深さは約15cmで、床面はほぼ平坦である。SD04と同様に１区で検出されておらず、削平を受けたと考える。

第25図に図示した９点の遺物の内、１・５・６はSD05からの出土である。それ以外は、隣接するSD04から多量の土師質土器が出土したため、最初の頃、遺構の区別と遺物取り上げが混乱し、区分することができなかった。１は口径７cm、器高1.6cmの皿状に近い形態で、底径も63％で大きい。５・６の坏は、５が皿状で、６は器高が高く坏である。２点とも口縁部が内湾気味で、底径も大きく、１の皿とセットになる可能性が強い。いずれも糸切り底の底部に板目圧痕が付く。

以上の３点以外はSD04・05として報告する。２は１よりも器高が高く、底径も小さい小坏の形態である。３・４は、口径に対し、器高が低く、その比率は20％前後の皿形である。また、７～９は、口径が10.1cmから13.7cmで、底径は7.1cmから7.7cmと小さくいが、器高は2.6cmから４cmと差があり、器形の大小がある。しかし、口径に対する器高の比率は26％から29％で、坏の形態である。４・７の底部には明瞭な板目圧痕が付いている。

遺構の時期は、SD05の１・５・６を見ると、底径と口径の差が小さく、古い様相を見せる。しかし、それ以外のSD04・05は、底部が小さく口縁部が大きく開き、端部が尖る形態は新出の傾向を見ることができ、SD04出土の土師質土器の属性に近い。



第26図　Ｂ地区Ｉ　SD06出土遺物実測図

SD06

SD06はSD05にほぼ平行して東西に延びる、同じ状況の溝である。規模は、幅約１m、長さは10m、深さは15cm～20cmで、底面はほぼ平坦である。第26図に図示した遺物は、この溝の埋没時に混入した状況で出土した。

白磁皿　蛇口釉剥　備前焼擂鉢

１は口縁部が外反する太い高台付の白磁皿である。外面は口縁部のみ施釉され、中位以下は露胎である。内面の見込み部は蛇の目釉剥ぎになっている。２～４は備前焼の擂鉢である。２は口縁部が肥厚する14世紀初頭の形態である。３は口縁部が帯状に立ち上がる形態で、15世紀末から16世紀前葉に編年されている。４は底部近くの資料で、内面は摩滅している。

５～８は土師質土器である。いずれも破片であるが、口径が11.8cmから12.1cm、底径が6.6cmから８cm、器高が３cmから3.2cmで、数値的には近いが、口縁部断面には差異が見られる。特に８は、口径に対し底径が小さく、口縁部も器壁が薄く、端部にかけて尖るように延びており、他の３点が厚い器壁で、口縁端部が丸く仕上げているのとは異なる。

備前焼

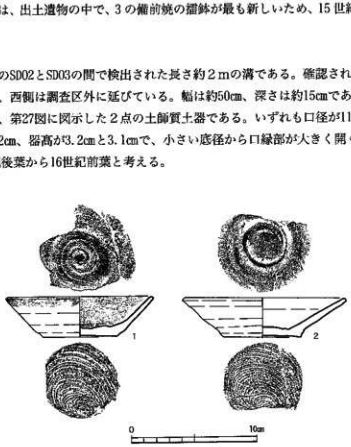
遺構の時期は、出土遺物の中で、３の備前焼の擂鉢が最も新しいため、15世紀末から16世紀前葉と考える。

SD07

SD07は３区のSD02とSD03の間で検出された長さ約２mの溝である。確認された遺構の規模は、長さ約２mで、西側は調査区外に延びている。幅は約50cm、深さは約15cmである。

土師質土器

出土遺物は、第27図に図示した２点の土師質土器である。いずれも口径が11.3cmと12.7cm、底径が６cmと8.2cm、器高が3.2cmと3.1cmで、小さい底径から口縁部が大きく開く形態をしている。時期は15世紀後葉から16世紀前葉と考える。



第27図　Ｂ地区Ⅰ　SD07出土遺物実測図

３．　整地層

慈眼山遺跡では、表土を除去後、遺構検出面まで、黒褐色土が堆積しており、古い遺構を埋め立てている。このため、遺物の出土状況は包含層状態であるが、古い遺構を埋め立て、平坦部を造成しながら、次々に遺構を掘削したと考え、整地層とした。特に２区・３区は約１ｍの段差を埋めており、厚く堆積していた。

龍泉窯系青磁碗　整地層から出土した遺物は、第28～34図に図示した。第28図１の口縁部は、鎬蓮弁の龍泉窯系の青磁碗である。２～４も龍泉窯系の青磁碗の底部である。２は畳付きから内側が露胎であるが、３・４は畳付きまで施釉されており、露胎は高台の内側にのみわずかに残されている。５も龍泉窯系の青磁の小壺である。釉は全面に施されており、外面には縦方向の連続的な凹線が施文されている。６は口縁部が露胎で、内外面ともそれ以下に施釉されている。口縁部が玉縁状に肥厚しており、磁竜窯系の鉢と考える。

磁竜窯

備前焼の壺　７～13は備前焼の壺と捕鉢である。７は、口縁部が直立し、端部は外側に肥厚して玉縁状になる。胴部は球状に張り、肩部には３ヶ所耳が付く三耳壺である。８～13は擂鉢の口縁部である。８は断面形が三角形になり、９は三角形の口唇部が立ち上がる。また、10は口縁部の立ち上がりが内傾し、内面には斜め擂り目も観察される。11・12・13は帯状の口縁部が立ち上がり、11は口縁端部が丸くなり、12から13にかけて、口唇部内側に稜が生じる。

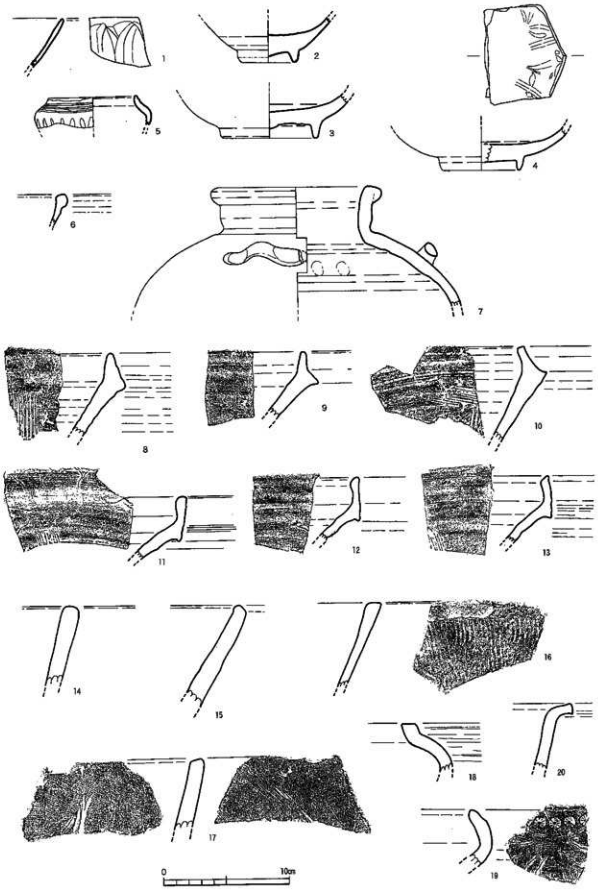
瓦質土器　14～20は瓦質土器である。いずれも小破片であるが、14～17は口縁部が外傾する鉢で、内外面とも入念な篦磨きで器面調整されているが、16の外面と17の内面には扇毛目調整で仕上げられている。18・19は口縁部が内湾する鉢で、19の外面には菊花文のスタンプが連続して押されている。20は口縁端部が外反する鉢である。

土師質土器　第29～32図は出土した遺物の中で主体を占める土師質土器である。大型の破片や完形品も多く、使用直後に廃棄したと想定できる。これらの器形は、小皿とそれ以外の坏に大きく２分類される。数量的には坏が圧倒的に多く、小皿は少数で、その代表的な例は、第29図１～５に図示した。小皿の中でも形態的は１～３は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部が尖る。３は他に比べ器高が高く坏状で、内面にはロクロ目が残る。これに対し、４・５は口縁部の立ち上がりが短い。口径と底径の差が小さく、口径に対し底径は80％の大きさである。

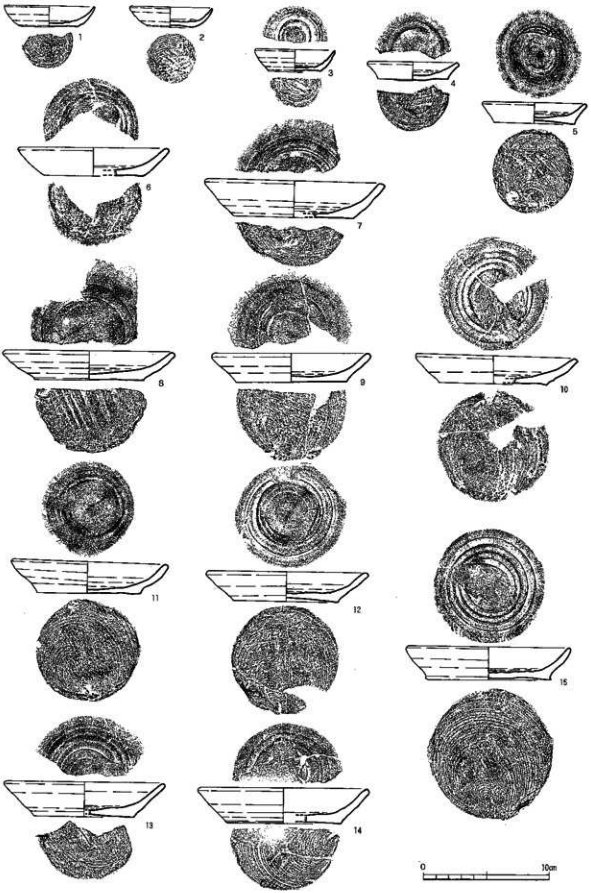
第29図６～14、第30～32図、第33図１～３に図示したのが坏である。これらは、口縁部が逆ハの字状に外に開く器形で、底部は糸切り底で、板やスダレ状の圧痕が残るものが多い。底部以外の部位は回転を利用した横撫で仕上げており、内底面には、強い押さえによる螺旋状のロクロ目が残るものや、指撫での痕跡が残るものもある。

こうした坏も小皿同様、形態差が認められる。第29図６～14、第30図１～６、第32図１～８・13、第32図１・２は、口径に対し、器高が23％以下で、皿状をしている。また、この器形のうち、第29図６～14、第30図１～６第32図１～４・６・13など大部分は、底部から口縁部の立ち上がりが短く、口縁端部は肥厚または、丸く仕上げている。このため、口径に対し、底径の比率が60％台後半から70％台で、底径が大きいものが主体を占める。しかし、第31図５は小さい底径から、口縁部が大きく広がる形態である。

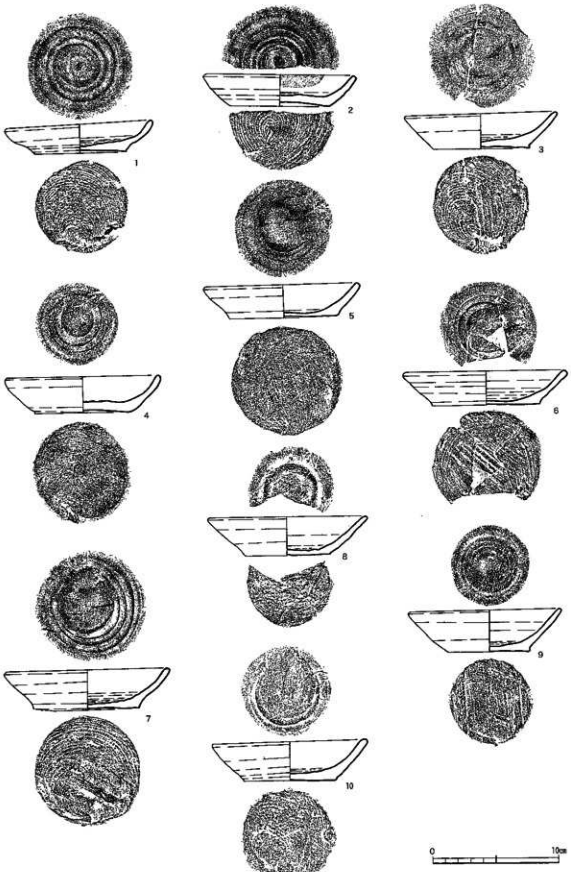
一方、第30図７～10、第31図１～10、第32図９・11・14～16・18、第33図３は口径に対して、器高が26％以上で、器形は深みのある坏状をしている。また、口径に対し、底径の比率が50％台から60％台前半で、口縁部は小さい底部から高く引き上げ、成形している。このため、口縁部の断面は、底部近くが厚く、口縁端部にかけて、薄く尖るようになっている。特に、第30図８・９、第31図４・５、第32図18、第33図３は口径に対し底径の比率が50％台で、口縁部の器壁も薄く、後出的な形態である。



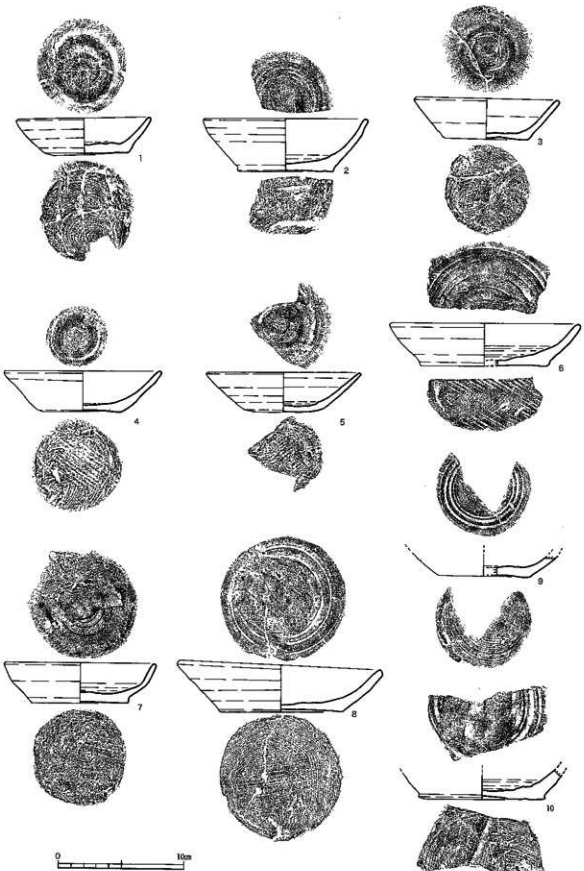
第28図　B地区Ⅰ　整地層出土遺物実測図(1)



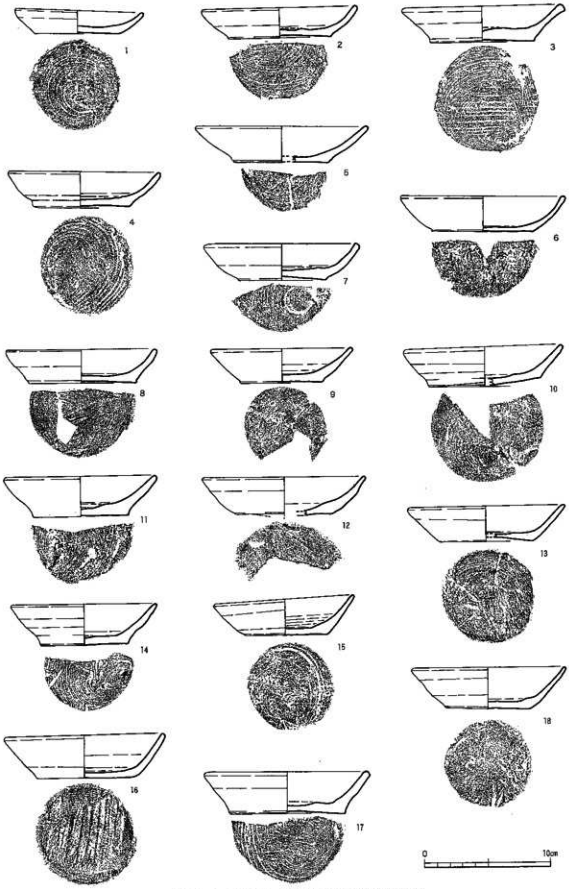
第29図　B地区Ⅰ　整地層出土遺物実測図(2)



第30図　Ｂ地区Ｉ　整地層出土遺物実測図(3)



第31図　Ｂ地区Ⅰ　整地層出土遺物実測図(4)



第32図　B地区Ⅰ　整地層出土遺物実測図(5)

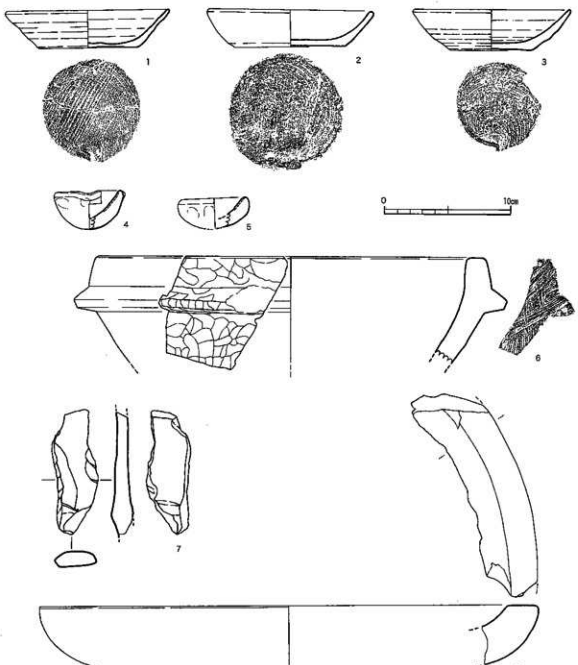
坩堝
滑石製石鍋
温石・硯
砂岩製挽臼
瓦

第33図４・５は坩堝である。４はＢ区ⅡのSK10出土の坩堝と接合した口径5.2㎝の、片口である。５は口径５㎝で、内面に銅滓が付着する。６は滑石製の石鍋であるが、損壊後に断面を研磨あるいは切断し、温石として再利用している。７は頁岩製の硯で、砥石として再利用されている。８は砂岩製の挽臼の受け部である。復元径は39.6㎝である。

第34図は瓦を図示した。１は直径15㎝の軒丸瓦で、中に巴文が施文されている。２は平瓦で、中央部に焼成前の釘穴が認められる。３は平瓦の完形品で、幅21.2㎝、長さ27.6㎝、厚さ２㎝である。断面は軒に近い方の幅がわずかに広く、屋根に近い方の表面は、篦で薄く仕上げられている。

備前焼

整地層の形成時期を決めるためには、最も多く出土した土師質土器では、根拠を持たない。編年的な研究が進行しているのは、第28図に図示した、貿易陶磁器と備前焼である。これらを見る限りは、Ｉの鎬連弁の青磁碗は14世紀前半であり、７の備前焼の壺は15世紀前半に編年されてい



第33図　Ｂ地区Ⅰ　整地層出土遺物実測図(6)

備前焼

る。また、８～13の口縁部は備前焼の擂鉢が15世紀中葉から16世紀前葉にかけての形態変化を示している。

以上のことから、最終的な整地層は16世紀前葉に形成されたと考えられる。

４．表土及び遺構混入遺物

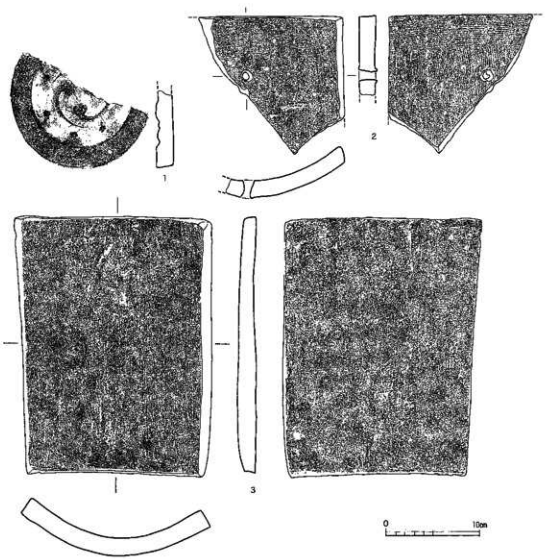
轟Ｂ式土器
東播系こね鉢
白磁合子

第35・36図は表土及び、遺構に混入した、明らかに時期の異なる遺物を図示した。第35図１～３はSD03から出土した縄文時代前期の轟Ｂ式土器である。４は口縁部外面が肥厚する東播系のこね鉢である。５～７は龍泉窯系の青磁椀である。５の外面には鎬蓮弁がある。８は白磁椀の高台で、畳付きから内側は露胎である。９は白磁の合子で、受け部と底部は露胎となっている。

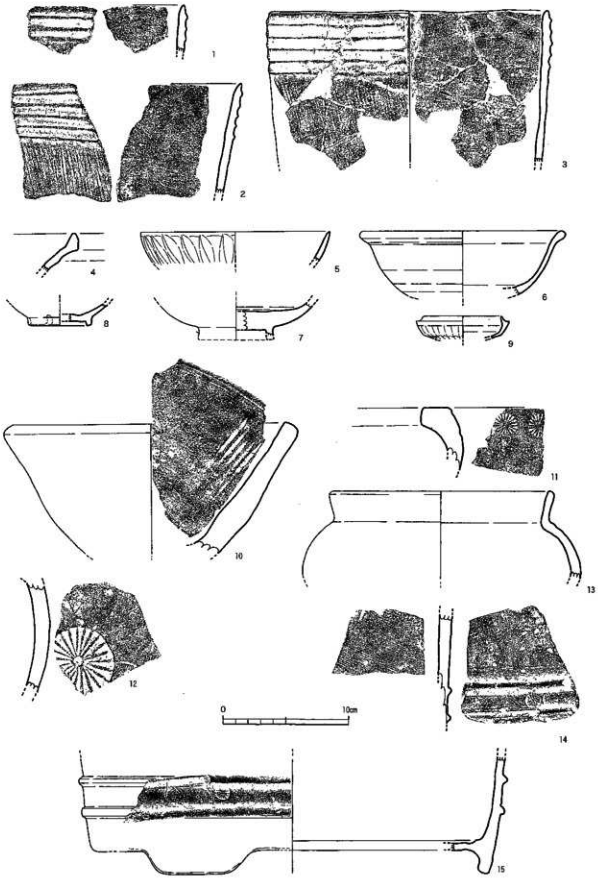
10～15は瓦質土器である。10は器壁が厚い擂鉢で、11は口縁部が肥厚し、内湾する鉢で菊花文の連続スタンプがある。12・13も鉢と考える。14・15は同じ形態の火鉢である。12・14・15には菊花文のスタンプが押されている。

赤間石砥石
石鍋

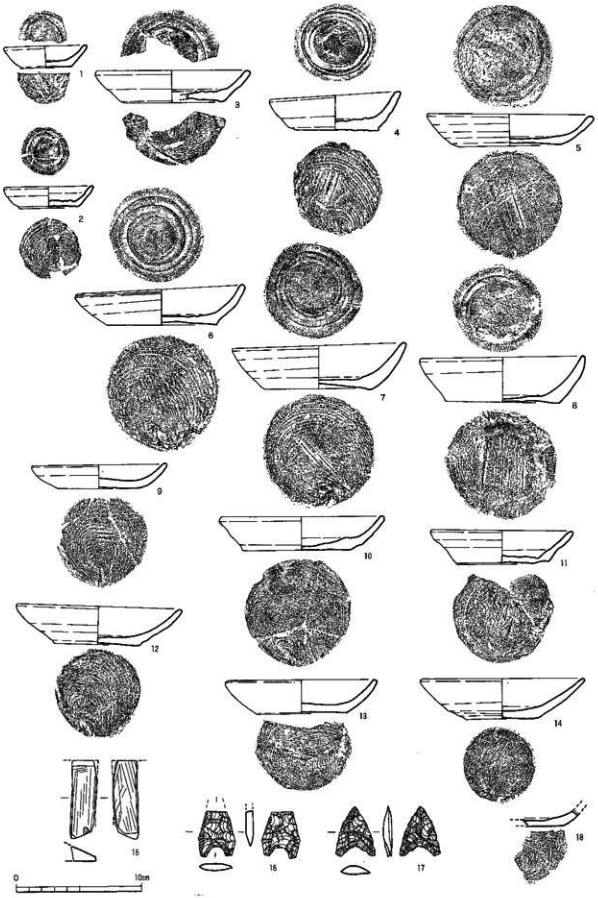
第36図１～14は土師質土器で、１・２は小皿、他は坏である。15は赤間石の砥石の破片で、16・17は姫島産黒曜石の石鏃である。18は内面に金属滓の付着し、鋳造具として再利用されている。



第34図　Ｂ地区Ⅰ　整地層出土遺物実測図(7)



第35図　Ｂ地区Ｉ　表土及び遺構混入遺物実測図(1)



第36図　B地区Ⅰ　表土及び遺構混入遺物実測図(2)

第３節　平成３年度調査－３次調査－（Ｂ地区Ⅱ）

１．平成２年度調査区との関連と検出された遺構

区画性の強い溝

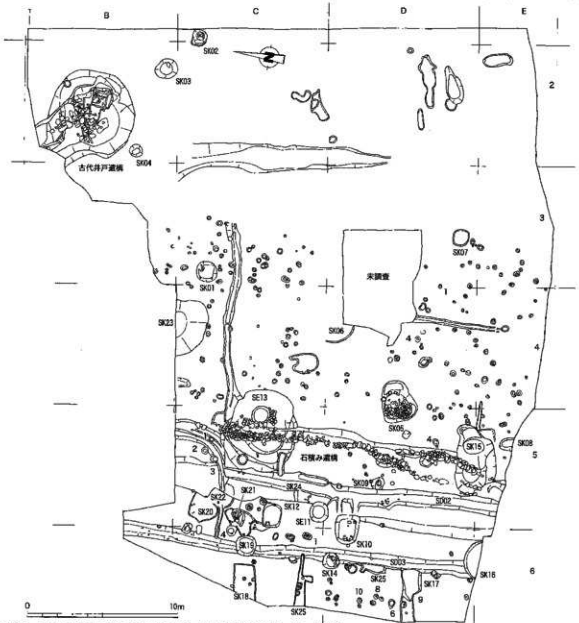
平成２年度の慈眼山遺跡の国家公務員合同宿舎（日田住宅）建設に伴う発掘調査での最大の成果は、東西に延び、東端が北に曲がる幅約５m、深さ約1.2mの区画性の強い溝が検出され、中世の居館を囲む施設の可能性が想定された。平成３年度の発掘調査は、前年度の東西に長い調査区に隣接する北側に建設予定された２号棟部分と、その周辺の公開部分について、B地区Ⅱ(３次調査)として実施した。このため、区画性の強い溝の北側での展開状況が明らかにされることが期待された。

発掘調査の結果、平成２年度に検出された東西方向に延びる溝の北側への展開は、同じ規模の溝ではなく、扇状地状に東から延びる緩斜面を掘削し、約１mの段差を削り出し、平坦部分を造成していることが判った。すなわち、Ｂ地区Ⅰの北側の施設は、南側は大規模な溝で区画し、東側は段差で区切る区画であった。

この区画内からは、15世紀代を中心とした、遺物や礫を多く包蔵する土坑、排水等に機能のしたと考えられる浅い溝、井戸、段差を補強するための石積みなど生活に関連する遺構が多数検出され、居住空間であったことを裏付けている。

８世紀代

また、この調査区（Ｂ地区Ⅱ）では、Ｂ地区Ⅰで確認できなかった、８世紀代を中心とした古



第37図　平成３年度調査（Ｂ地区Ⅱ）主要遺構分布図（１／250）

墨書土器　代の遺構も検出された。その代表的な遺構は井桁組の井戸で、墨書土器も出土していることから、や官人クラスの人物の居住地も想定できる。

2．古代

古代の遺構は、この時期の遺跡で検出される掘立柱建物などは検出されず、調査区の北端で土坑と井戸を検出した。Ｂ地区Ⅰ やＢ地区Ⅱの南側で、古代の遺構が検出されていないことから、この時期の遺構は、北側の丘陵裾沿いに展開する可能性が強い。

(1)土坑

SK23

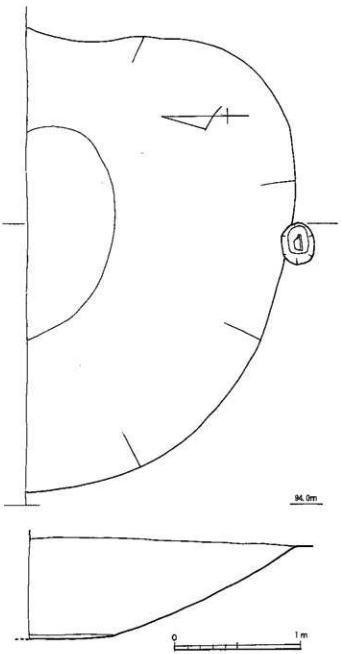
SK23は、調査区の北端の中央部で検出された土坑で、遺構の北側の一部は調査区外となっている。このため、発掘調査は、土坑の南半分について実施した。確認した遺構の規模は、東西約3.7m、南北は2.1m以上、検出面から約80cmの深さで、平坦な底面が確認され、その規模は、東西約1.6m、南北は0.7以上である。このため、断面形は深い皿状になる。

遺構内からは、廃棄された状態で、多量の遺物が出土した。その代表的な遺物は、第39図１～９に図示した。１～５は須恵器である。１は扁平な宝珠摘みのある蓋で、２～５は坏身である。口縁部は外傾して立ち上がり、先端は尖る。底部は回転ヘラ切りで切り離され、高台後で付けられている。口径は２の12.6cmから４の15.8cmであるが、４は異なる器形の可能性が強い。また３は完形品で、口径は12.8～13.8cmと口縁部は歪んでいる。

６・７は土師器の甕である。６は、口縁部の器壁が厚く、口縁部は横撫でであるが、胴部外面は粗い縦方向の刷毛目、内面は横方向の削りで成形されている。７は頸部に低い突帯が付き、内外全面撫でで仕上げられている。

８・９は須恵器の甕と壺である。８は口径22cmで、口縁部は横撫で、胴部外面は格子目叩き、内面は同心円叩きで、器面調整されている。９は長頸壺の頸部で、胴部との接合部の径は9.1cmである。器面は横撫でで、自然釉がかかっている。

８世紀後半　遺構の時期は、８世紀後半である。



第38図　Ｂ地区Ⅱ　SK23 実測図

(2)井戸

古代の井戸は、調査区の北端部のＢ－２区で検出された。調査時はこの周辺から古代の須恵器が多数出土し、他の調査区と異なる状況であった。掘り下げた結果、古代の井戸遺構が検出された。検出された井戸遺構全体の状況は、第40図、井戸枠は第41図に図示した。

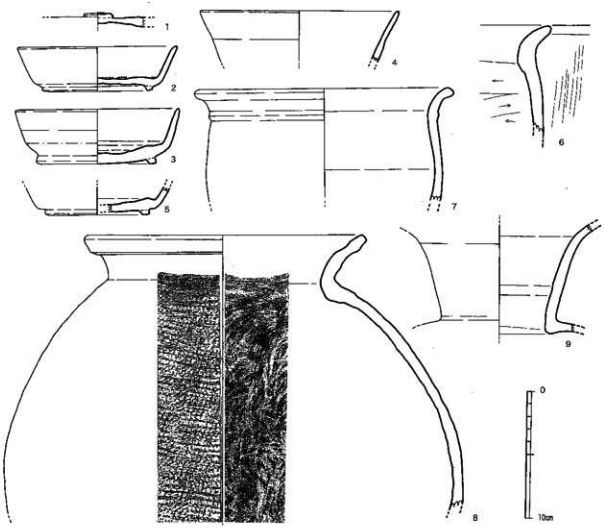
井戸枠

井戸遺構全体から、構築状況を順を追って見ると、まず東西約５m、南北約６mの楕円形の掘り込みを行い、段掘り上にしながら、水源を求め、検出面から約1.2mの位置で平坦面を形成する。この面の深さを保ちながら、北西方向に、溝状掘り込みを行い、調査区外に延びている。その規模と形状は、検出面の幅約２m、底面の幅約0.4mで、断面形は緩いＶ字をしている。水源は、この溝の東南方向の延長線上で検出されたようで、この部分に井戸枠を設置するために、さらに、60㎝の掘り下げを行っている。その結果、検出面から、最深部までの深さは、約1.8mに達し、標高は92.5mである。この位置は、東から西にかけて扇状地状の地理的景観をしている慈眼山遺跡の中で、砂層にあたり、湧水期であった調査時でも豊富な湧水を認めることが出来た。

扇状地
砂層湧水

井戸枠は第41図に図示したが、ほぼ東西南北に面して板材を積み上げており、確認された最上段は動いているが、それぞれの面で、４段から５段が当時のままの状態で遺存していた。内法は東西約90㎝、南北約90㎝の正方形に仕上げられている。三尺の寸法が採用されている可能性が強い。井戸枠の底面には曲物などによる集水装置は設置されていなかった。

三尺



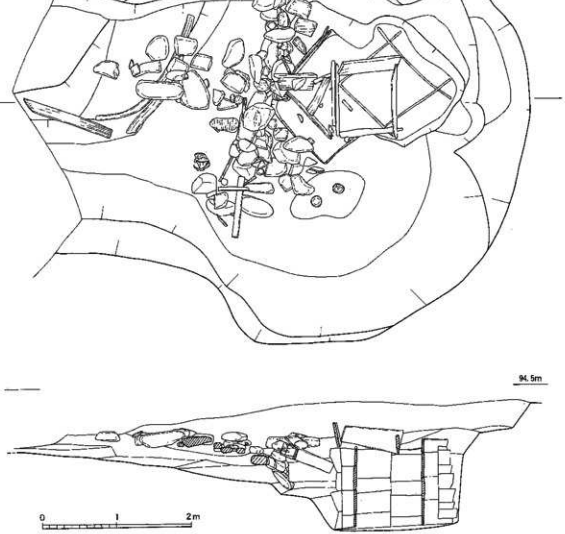
第39図　Ｂ地区Ⅱ　SK23 出土遺物実測図

槍鉋　使用している板材の表面は、槍鉋で削られたような痕跡が残り、中央部が厚くなり、中には稜を生じているものも認められた。この板材は約90cmの間隔をあけて、二ヵ所に両側から切り込みを入れ、上下に積み重ねて組み合わせる板材の受け部としている。板材の両端は直角には仕上げられず、斜めに切断されている。このため、全体としは、細長い台形、あるいは長方形をしている。また、板材に組み合わせの切りこみを入れる際や組み合わせ作業の際に、切り込み部から外側が欠損する場合もあったようで、北側の井桁の外側には、その部分を埋めるように、別の小さい板材を埋め込み、補強している。

井桁

井戸枠を設置した後、北西部から続く溝状遺構の東南端を遮断するように、楕円形の掘り込みの中央西寄りの位置に、石積みを設置している。この石積みは、人頭大の河原石を南北方向に約３m、高さ80cmの規模で乱雑に積み上げており、木製の井戸枠を埋めた後、北西方向からかかる土圧を防御するような状況である。

井戸枠



第40図　Ｂ地区Ⅱ　井戸遺構実測図

このように、楕円形と西北方向に延びる溝が組み合わさった状況の土坑に、井桁組の井戸枠と石積みを設置した後、この掘り込みは埋め立てられているが、その際、丸太や板状の木材も一緒に投入されている。埋め立て終了後の施設としては、検出面と同じ位置で石列が検出された。この石列は、人頭大から拳大の河原石を用い、その平坦面を上面として約１ｍの幅で、東端を石積みの位置から西北方向に約２ｍの長さで認められる。その方向は、井戸に向けて延びている。水

石敷施設

汲み等、井戸利用の際に、足場を確保するための石敷施設と想定する。

井戸遺構の掘り込み土坑内からは、井戸を構築するにあたり、埋め立てを行った際に、埋め込まれた状態で多量の土器や木器や木片が出土した。中には、完形品が並んで出土し、祭祀行為の存在が想定される状態であった。また、井戸枠の中からは、土器の小片の他、板片が底面近くで

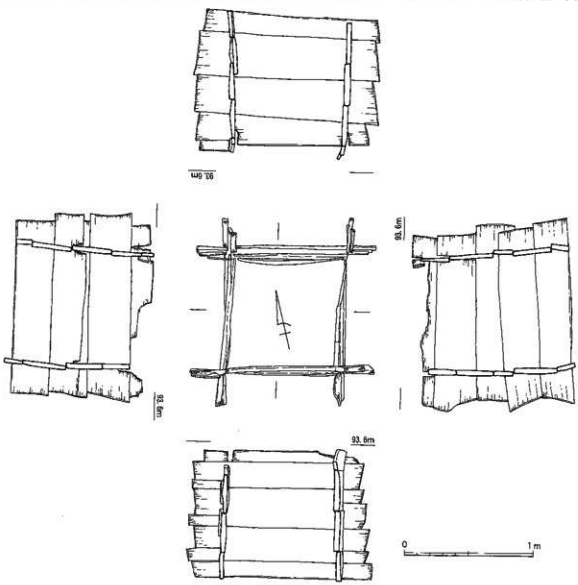
斎串

出土した他、祭祀行為の証と思われる斎串（いくし）が出土した。

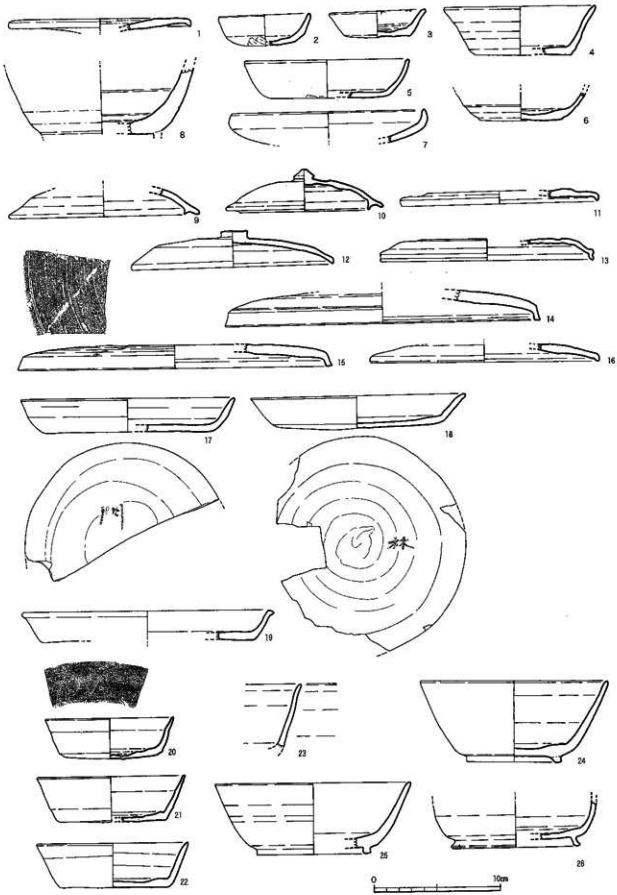
こうした出土遺物は、第42～46図に図示した。出土遺物の内、井戸枠内から出土した遺物主要は、第42図１～８と第45図Ｉに図示した。１は口縁端部が嘴状に曲がる須恵器の坏蓋である。２～７は土師器である。２～６は口径が7.2cm～12.8cm、器高も2.4cm～3.8cmと規格差が大きいが坏である。底部の処理は、２と５は手持ちヘラ削りであるが、３・４・６は回転ヘラ切りである。

須恵器長頸壺

７は口径15.8cmで、回転利用の横撫でで仕上げられている。８は脚又は高台が付く須恵器の長頸



第41図　Ｂ地区Ⅱ　井戸遺構井戸枠実測図



第42図　Ｂ地区Ⅱ　井戸遺構出土遺物実測図(1)

斎串
人形
須恵器の蓋
須恵器の皿
「門」「林」
硯
ヘラ書き
高坏
長頸壺
墨書
手持ちヘラ削り
土師器の坏
甕形土器

蓋と想定する。第45図１は斎串で、長さ15cm、幅1.5cmで、頂部を山状に、中位にくびれを作り、人形にし、先端を尖らしている。遺構の時期は、８世紀後半と考える。

第42図９～26、第43～46図は井戸枠や石積みを埋め立てた埋土から出土したものである。第42図９～16は須恵器の蓋である。特に９～13・16は口径から坏蓋と考える。９・10には身受け部があり、頂部には宝珠形の摘みが付く。12も頂部に摘みが付くが、身受け部はなく、断面三角形に仕上げている。11・13・16は頂部を欠く蓋であるが、口縁部断面に形態差が認められる。14・15も蓋と考えるが、口径は２点とも25cmで、明らかに坏蓋より大型で、口縁部形態も異なる。

17～19は須恵器の皿であるが、蓋の可能性も残す。口径は16cm～19cmで、口径16.9cmの17には回転ヘラ切りされた底部に「門」、口径16.8cmの18には同じく「林」の文字が墨書されている。内面中央部は摩耗しており硯として使用された可能性が強い。

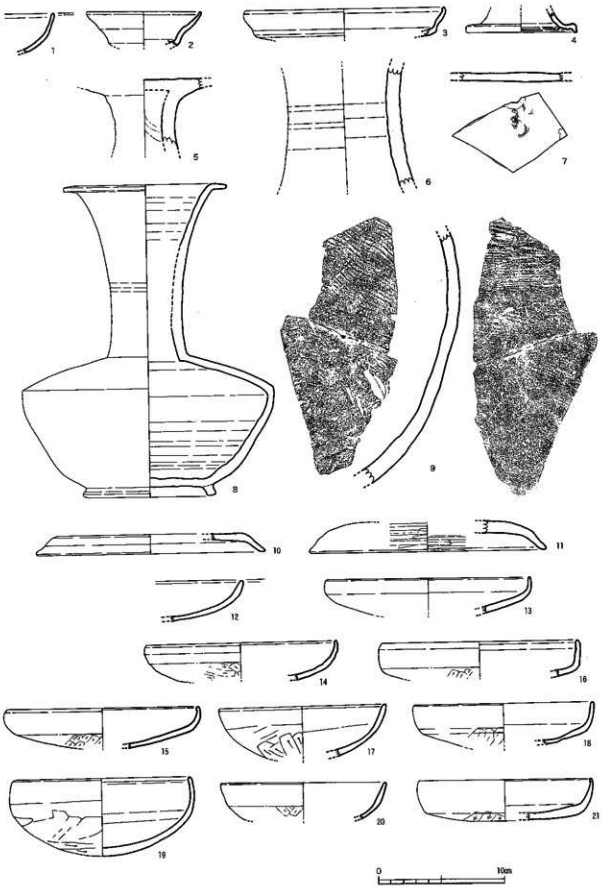
20～26は須恵器の坏身である。20～22は口径が10cm～12cmと小さい小型の坏である。底部は、回転ヘラ切りで切り離されている。特に20の外面には、頂部が３ヶ所の山形の線がヘラ書きで記されている。これに対し23～26は口径が14.7cm～15.4cmと大型で、器高も5.6cmと6.4cmと高い。底部は、回転ヘラ切りの後、高台が付けられている。

第43図１・３～９は須恵器の各器種で、１は体部が丸くなる椀形になると想定する。２は土師器である。３は口径15.8cmの皿と考える。４は小型の高坏の脚で、径は8.7cmである。５は大型の高坏の脚の一部で、一番細い部分でも、直径５cmである。６は長頸壺の頸部と考える。表面には製作時の凹線が廻る。７は扁平な土器片で、大型土器の底部であろう。判読不能であるが、墨書が残されている。８は長頸壺である。胴部は中位で稜を生じて張り、底部は回転ヘラ切りの後、高台が付く。外面には自然釉がかかる。９は甕形土器の胴部で、内面は敲きの後撫で出、外面は粗い刷毛目で仕上げられている。

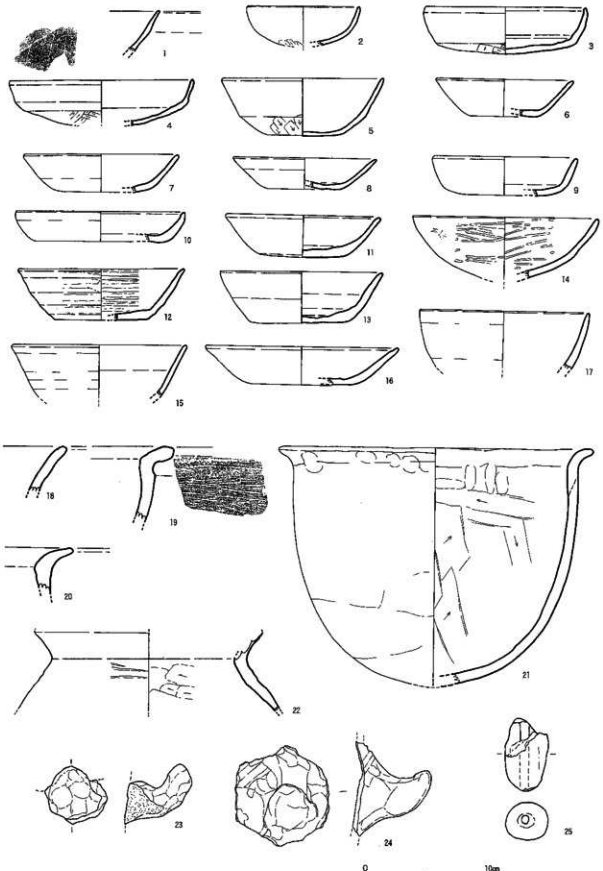
10～21は土師器である。10・11は蓋と考える。10は口径18.2cm、11は口径18.8cmで、器面は横方向のヘラ磨きで仕上げられている。12～21は皿又は坏である。12～15は口径が15cm～16cmで、口縁部が内湾しながら立ち上がる。器面は横方向の撫で又はヘラ磨きで、14・15の胴部から底部にかけては手持ちヘラ削りの後が残る。口径15.5cmの16と口径14cmの18、口径13.6cmの21は口縁部が直立気味に立ち上がり、胴部は角度を持って屈曲する。底部は手持ちヘラ削りである。盤状の形態である。17・19・20は口径が13cmから14cmであるが、器高が高く、17は４cm以上、19は6.4cmある。このため、形状は椀のような形態になる。口縁部周辺は横撫であるが、底部から胴部中位まで、手持ちヘラ削りで器面調整されている。

第44図１～17も同様な土師器の坏である。１は比較的大型の坏の口縁部である。２～５は底部が手持ちヘラ削りの坏で、５は器高が4.5cmと高く椀状の形態である。また４の口縁部周辺にはヘラ描きの細い直線的な文様が刻まれている。６～13・16は回転ヘラ削りの底部の坏である。口径は約11cmから15cmまであり、差は大きい。また、器面調整は、多くが回転を利用した横方向の撫でであるが、12は横方向のヘラ磨きで、丁寧に調整されている。14・15・17は底部を欠くが、14は口縁部を復元すると径14.5cmで、底部の形状は不明である。器面はこの上器も横方向のヘラ磨きで丁寧に仕上げられている。15・17は口径が13cm台で、器高が高いが、底部の状況は不明である。

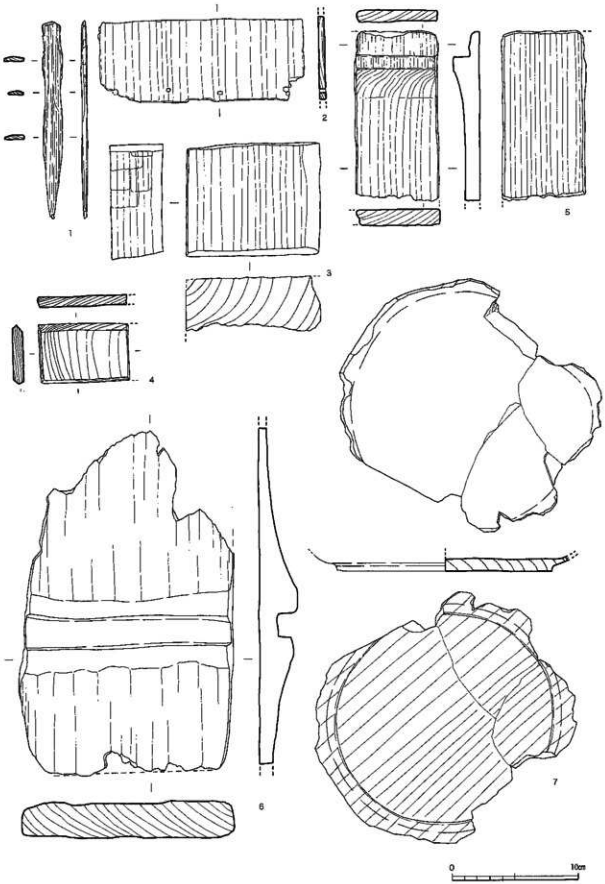
18～22は甕形土器の資料である。18は横方向の撫でで仕上げられた口縁部である。19は短く屈曲した口縁部を持つ甕形土器である。器面は口縁部周辺が横撫であるが、胴部外面は横方向の粗い刷毛目調整である。20の口縁部は頸部の器壁が厚く、口縁端部が尖るように成形された甕である。胴部内面はヘラ削りで器面を整えている。21は口径24cm、器高19cmの甕形土器である。器面調整は、口縁部内外面が横方向の撫でであるが、胴部は外面が撫で、内面は上位が横方向、下位から底部は縦方向のヘラ削りで形を整えている。22は口縁端部を欠く甕形土器の資料である。器面調



第43図　Ｂ地区Ⅱ　井戸遺構出土遺物実測図(2)



第44図　Ｂ地区Ⅱ　井戸遺構出土遺物実測図(3)



第45図　B地区Ⅱ　井戸遺構出土遺物実測図(4)

整は、21と同じで、口縁部は内外面、胴部は外面撫で、内面は横方向のヘラ削りで成形されている。

甑　23・24は甑の取っ手である。粘土塊を牛角状に成形しており、表面には指圧痕が残る。25は大

土錘　型の土錘である。大部分を欠くが、最大径3.3cmで、焼成前に穿孔された穴の径は6.5mm、重さは45ｇである。本来は100ｇ以上であったと想定できる。

井戸遺構内は、地形的な状況から調査時でも、湧水があり、低湿地状況であった。このため、埋め土からは、腐食を免れた多くの植物質の遺物が出土した。こうした遺物には、木の葉や小枝、小さい丸太状の木材をはじめ、明らかに加工された板状の遺物や、加工痕の不明瞭な遺物が含まれる。

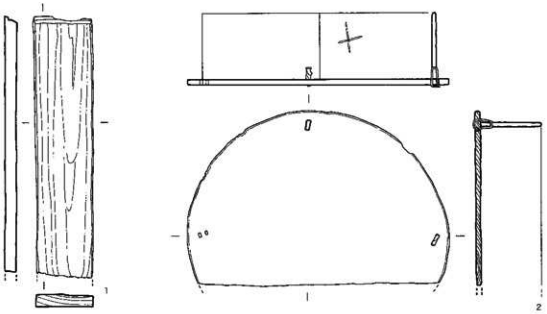
第45図２～７、46図に図示した遺物はそうした出土遺物の中で、井戸枠以外からの出土で、木製品として認められる加工の痕跡を持つものである。第45図２は厚さ５mmの板目の板材で、８cm－６cm－６cmの間隔で直径５mmの穴が４ヶ所認められる。３は板目の角材で、幅10cm以上、厚さ４cm以上あり、側面には金属工具で削られた後が残る。４も板目の小板材であるが、表面は平滑に仕上げられている。厚さは８mmで、幅4.5cm、長さは７cm以上あり、状況が明らかな３側面の断面は算盤状に仕上げている。５と６も板目の板材を加工した遺物である。２点とも幅や長さは不明であるが、６は中央部の厚さが３cmあり、その部分に溝を横方向に彫り、両端になるほど薄く仕上げている。５も2.1cmの最大の厚味を持つ部分に溝を横方向に刻んだ、６と同じ形態の木製品

木製容器　の可能性がある。７は木製容器の底部の資料である。底径は17cmで、厚さは９mmである。底部から胴部にかけての立ち上がりの角度や、器壁の薄さから、皿状の容器と推定する。

第46図１は板目の板材である。長さは不明であるが、幅は4.5cm、厚さは９mmである。欠損して

曲物　いない方の先端部は、切り込みを加えられている。２は曲物の資料である。上部は、厚さ３mm、幅5.3cmの薄板を曲げ、口径18.5cmの筒状にしているが、筒の結合部分は不明である。この筒は直径20.6cm、厚さ４mmの薄い円盤状の板材に、４ヶ所、桜の皮紐で結合させている。このため、底部は、約１cmの幅で外側にはみ出ている。

以上が、井戸遺構出土の主要遺物であるが、井戸の掘削時期から使用停止時期を想定すると、土師器の坏の底部の処理には、手持ちヘラ削りと回転ヘラ削りが見られる。また、須恵器の坏蓋の口縁部がくちばし状である。このことから井戸の構築と使用の時期は８世紀後半から９世紀初頭の短期間と考える。



第46図　Ｂ地区Ⅱ　井戸遺構出土遺物実測図(5)

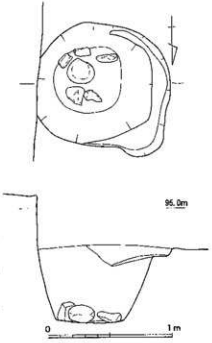
３．中世

(1)土坑

SK01

SK01 は、調査区の北寄り中央、Ｃ－３区で検出された土坑である。遺構の規模と形態は、上面が直径約 1.4 mの円形を呈し、深さは約 30 cmで、平坦な床面に達する。床面の形態は、東西約 1 m、南北約 1 mの緩い方形をし、東北隅に直径約 30 cm、深さ約 20 cmの柱穴状の掘り込みがある。

遺構内からの出土遺物は、土師質土器の小破片が出土している。時期は、他の遺構と同様、15 世紀代と考える。



第47図　Ｂ地区Ⅱ　SK02 実測図

SK02

SK02 は、調査区の東壁沿い、Ｃ－２区で検出された土坑で第47図に図示した。遺構の規模は、上面が直径約 1 mの円形に近い形状で、検出面から床面までの深さは約 65 cmである。床面は南北約 50 cm、東西約 55 cmで、平坦である。この遺構の、上面には、深さ約 10 cmの浅い別の土坑が掘り込まれていたと考えられ、西側が二段掘りの形状になっている。

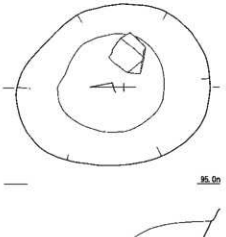
遺構内からは、床面で拳大の礫を６個検出した他、土師質土器の小破片が出土した。遺構の時期は、土師質土器の形態から、15 世紀代と考える。

SK03

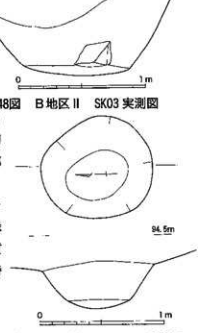
SK03 は、SK02 の北西約４mの位置、Ｂ－２区で検出された土坑で第48図に図示した。遺構の規模は、上面が東西約 1.3 m、南北約 1.5 mの楕円形をしている。東側は攪乱のため大きく削られている。検出面から床面までの深さは約 70 cmである。床面の大きさは、東西 80 cm、南北 85 cmで、中央部がやや窪む形状である。

遺構内からは、床面で人頭大の角礫が一個検出された。遺物としては、土師質土器の小破片が多数出土したが、第51図１・２はその中でも大型の破片である。１は約３分の１の残存する土師質土器の皿である。復元口径は 9.7 cmで、糸切り底の底部の径は７cmである。口縁部は、底部から短く立ち上がり、器高は 1.8 cmである。２は底部が完形であるが、口縁部は３分の１の残存する土師質土器の坏である。口縁部の復元径は口径が 12.6 cm、糸切り底で板目圧痕の残る底部径は 8.3 cmで、この底部から口縁部は外傾して立ち上がる。

遺構の時期は、１は口径に対し底径が大きい特徴を持つ。その比率は約 72 %である。また、２の底径も比較的大きく、口縁部に対する比率は約 66 %である。こうした底径の大きい土師質土器は古い様相であり、遺構の掘削時期は 15 世紀代でも古い時期と考える。



第48図　Ｂ地区Ⅱ　SK03 実測図



第49図　Ｂ地区Ⅱ　SK04 実測図

SK04

第49図に図示したSK04は、SK03の西北約６ｍの位置、Ｂ－２区で検出された土坑で、古代の井戸遺構の南西部に近接する。遺構の規模は、上面が東西約80㎝、南北約90㎝の南北に長い楕円形で、検出面からの深さは、約40㎝である。確認された床面は東西約40㎝、東西約50㎝で、中央部が窪む形状となっている。

遺構内からは、流れ込んだ状態で、土師質土器の小破片が少量出土した。この土師質土器の形態から、遺構の時期は、15世紀代と考える。

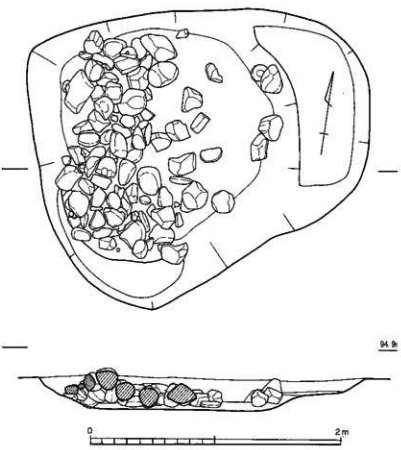
SK05

SK05は、調査区のほぼ中央、Ｄ－４区で検出された土坑で、第50図に図示した。遺構の規模は東西約2.7ｍ、南北約2.3ｍで、遺構内は南と東側で検出面から約10㎝の深さで段が付き、中央の深さは25㎝である。検出された最深部の床面は平坦で、東西1.7ｍ、南北も約1.7ｍである。

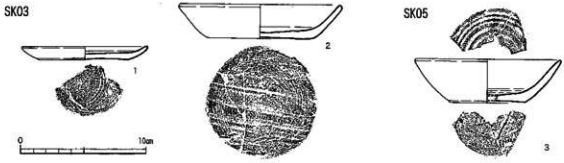
遺構内からは、人頭大から拳大の礫が敷き詰められたような状況で、多量に検出された。この礫群に混入して、土師質土器の小破片が出土している。第51図３に図示した資料はその代表であるが、口径は11.4㎝で、糸切り底で、板目圧痕が付く底部径は６㎝である。口縁部はハの字状に開き、器高は3.4㎝である。内面にはロクロ目が残る。口径に比較して底径は52％と小さく、15世紀後半から16世紀前葉と考える。

板目圧痕

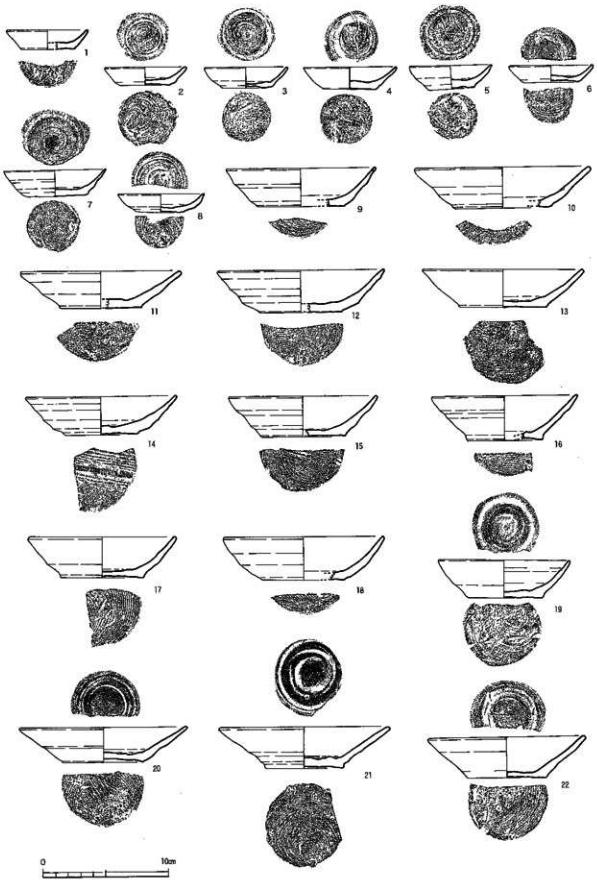
ロクロ目



第50図　Ｂ地区Ⅱ　SK05実測図



第51図　Ｂ地区Ⅱ　SK03・05出土遺物実測図



第52図　Ｂ地区Ⅱ　SK10出土遺物実測図

SK06

SK06は調査区のほぼ中央、Ｄ－４区で検出された土坑で、東側半分は削平されている。遺構の規模と形状は、直径約３ｍの円形が想定される。遺構の遺存状況は、西半分が残り、西端の壁の深さは約５㎝である。遺構内からの遺物は出土しなかったが、15世紀代と想定する。

SK07

SK07は調査区の中央南寄り、Ｄ－３区で検出された土坑である。確認された遺構の規模は、東西・南北とも約１ｍで、隅丸方形状である。遺構の深さは、約10㎝で、床面は平坦である。床面の規模は、東西・南北とも約80㎝で、隅丸の方形ある。

遺構内からは、流れ込んだ状態で、土師質土器の小破片が出土している。これらの遺物は、周辺の遺構と同様、15世紀代と考える。

SK08

SK08は調査区南側の、壁沿いのＥ－５区で検出された小型の土坑である。確認された遺構の規模は、東西約0.9ｍ、南北約１ｍ以上の楕円形で、南側は調査区外に延びている。検出面から深さ約15㎝で、平坦な床面が検出された。

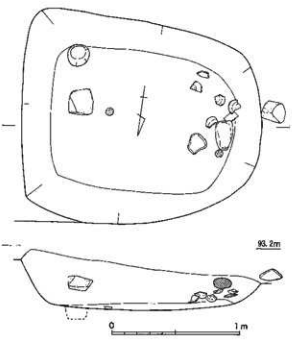
遺構内からは、流れ込んだ状態で、土師質土器の小破片が出土した。これらの遺物は、周辺の遺構と同様、15世紀代と考える。

SK09

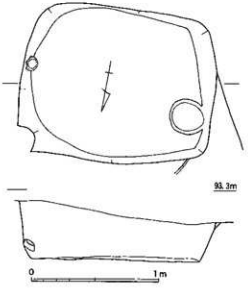
SK09は、調査区西寄りのＤ－５区でSD02に接して検出された。遺構の規模は、東西約１ｍ、南北約0.8ｍの楕円形で、検出面からの深さは約20㎝、平坦な床面の規模は、東西約0.5ｍ、南北約0.4ｍである。遺構内からは、15世紀代と考えられる、土師質土器の小破片が出土している。

SK10

第53図に図示したSK10は、Ｄ－５・６区で検出された。SD02とSD03の間である。遺構の規模は、東西約1.9ｍ、南北約1.6ｍで、東西に長い隅丸長方形をしている。検出面は西側が削平されているため、平坦ではないが、そこからの深さは、約20～35㎝で、床面は標高約92.7ｍにあたり、その形状は東西約1.5ｍ、南北約1.1ｍの隅丸長方形をしている。



第53図　Ｂ地区Ⅱ　SK10実測図



第54図　Ｂ地区Ⅱ　SK12実測図

遺構内からは、拳大の礫をはじめ、第52図に図示した土師質土器が廃棄された状況で多量に出土した。土師質土器は概ね、口径６㎝台の小皿と口径10㎝以上の坏の２形態があるが、７は口径８㎝で、中間形態である。底部は糸切り底で、坏の11・14・15・17・19・20などには、板目やスダレ状の圧痕が付く。口径に対する器高、底径の比率は、小皿は底部から口縁部の立ち上がりが短いため、器高は22～25％が主体を占め、底部も60％台である。

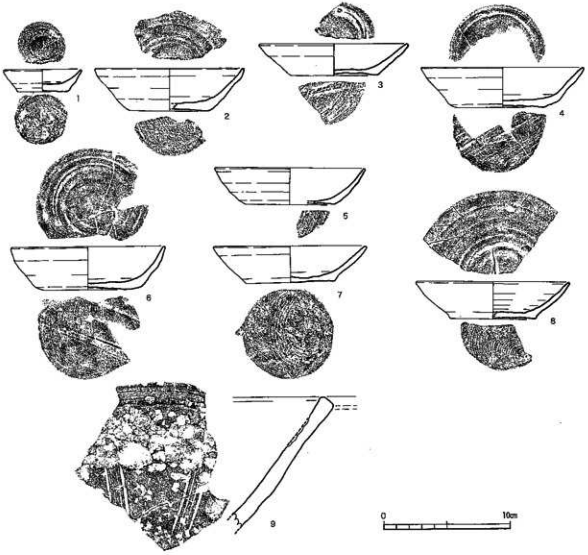
これに対し、坏は、底部から口縁部がハの字状に開くため、口径に対し底径が小さく、40～50％台である。さらに器高の比率を見ると、皿状になる20％前半のグループと器高が高い20％後半以上のグループに分かれる。一括性の強い良好な資料で、15世紀末葉から16世紀前葉と考える。

SK12

第54図に図示したSK12は、C－５区で検出された土坑で、SK10から北に約５m離れている。遺構の規模は、東西約1.1m、南北約0.8mの隅丸方形をしており、検出面から約25㎝で平坦な床面が確認された。

遺構内からは、第55図に図示した、土師質土器を中心とした遺物が、廃棄された状態で出土した。土師質土器には１の小皿と２～８の坏があり、５は鋳造具として再利用されている。９は瓦質土器の擂鉢である。遺構の時期は、15世紀後葉と考える。

鋳造具
擂鉢



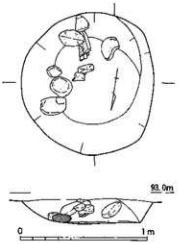
第55図　B地区Ⅱ　SK12出土遺物実測図

SK14

第56図に図示したSK14は、Ｄ－６区のSD03と切り合って検出された土坑で、溝より新しい。遺構の規模は、東西約１m、南北約1.1ｍで、検出面からの深さは約20㎝で、直径65㎝の円形の底面を確認した。遺構内からは、拳大の礫と土師質土器の坏の破片が出土した。15世紀代の遺構であろう。

SK15

SK15は、調査区南西部のＤ・Ｅ－５の段差部分で検出された大型の土坑である。土坑廃絶後の上面に南北方向の石積みが構築されている。遺構の規模は、東西約4.5ｍ、南北約2.5ｍで、検出面から床面最深部は約1.8ｍ掘り下げた位置で、湧水のため中断した。形状は直径約90㎝の円形をしており、井戸の可能性もある。また、周辺の床面は起伏があることから、複数の遺構が切り合っていることも考えられる。

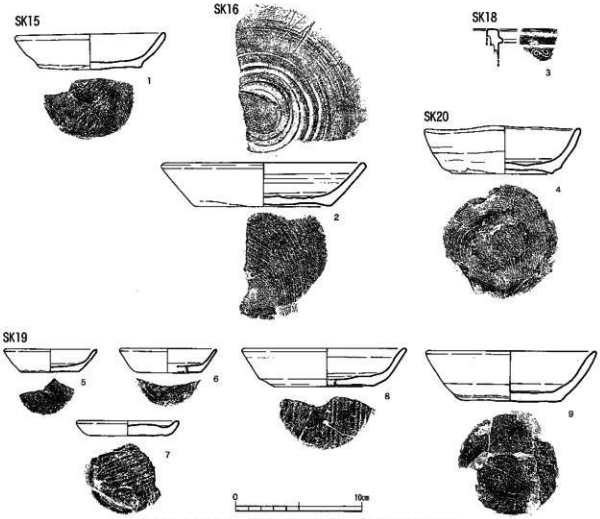


第56図　Ｂ地区Ⅱ　SK14実測図

遺構内からの出土遺物は少なく、第57図１に図示した土師質土器の坏があり、その形態や、石積み遺構に先行することから、15世紀中葉以前と考える。

SK16

調査区の南西隅のＤ・Ｅ－６区で検出された土坑で、SD03より古く、南側の大部分は調査区外である。確認できた遺構の規模は直径3.5ｍの円形で、深さは約１m掘り下げたが、危険防止の



第57図　Ｂ地区Ⅱ　SK15・16・18・19・20出土遺物実測図

ため、中断した。井戸の可能性が強い。

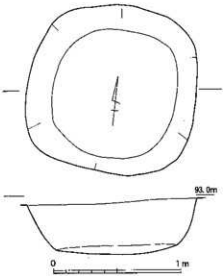
遺構内掘削中に57図２に図示した口径15.6㎝の大型の坏が出土した。掘削時期は15世紀代と考える。

SK17

SK17は、調査区の西壁近く、D－６区で検出された浅い不定形な掘り込みで、東側はSD03に切られている。遺構の規模は、東西約２m、南北約1.3mの長方形で、深さは約20㎝で、西側にさらに幅約90mの浅い溝状遺構につながっている。遺構は検出状況から、15世紀後葉と考える。

SK18

SK18はC－６区の調査区西壁沿いで検出された土坑で、遺構の規模は東西2.3m以上、南北約1.5mの長方形の土坑である。検出面からの深さは、約５㎝である。床面で３ヶ所、柱穴状遺構を検出しているが、別遺構と考える。

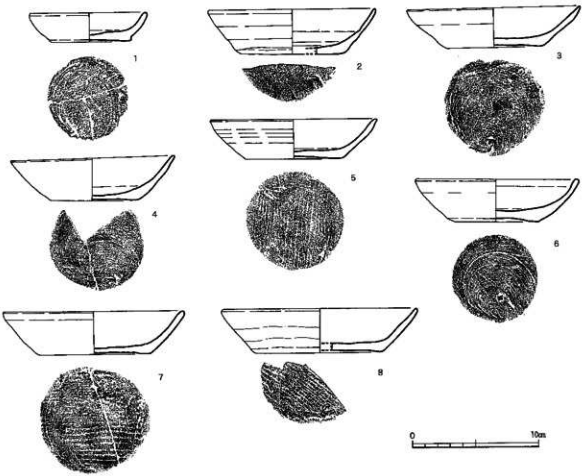


第58図　B地区Ⅱ　SK19実測図

出土遺物は、極めて少ないが、第57図３に図示した外面にワラビ手文スタンプのある瓦質土器の火鉢が出土している。遺構の時期は検出状況から、15世紀代と考える。

SK19

第58図に図示したSK19はC－６区で検出された土坑で、SD03と重なるが、それより新しい。遺構の規模は、東西約1.3m、南北も約1.3mの角張った円形をしている。検出面からの深さは約



第59図　B地区Ⅱ　SK21出土遺物実測図

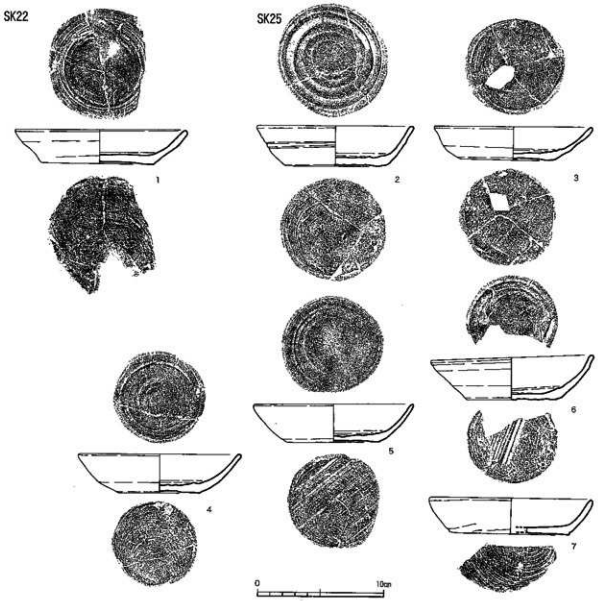
40㎝で、底面は直径約１ｍの円形で、中央部が最深部となっている。

遺構内からは、土師質土器が廃棄した状態で出土した。その代表的な遺物は、第57図５～９に図示した。５～７は小皿であるが、５・６の口縁部は、７に比較すると、底部からの立ち上がりが長く、器高が1.8㎝と1.9㎝である。これに対して７の口縁部の立ち上がりは短く、器高は1.1㎝で、底部には板目圧痕が付く古い属性を持つ。８・９は口径が12.3㎝と13.3㎝、器高３㎝と3.9㎝で、２点とも、底部は糸切りの後、板目が付いている。15世紀中頃と考える。

SK20

SK20は調査区の北西部、Ｃ－５区で検出された浅い土坑である。確認された土坑の規模は、東西約1.9ｍ、南北約２ｍの不整円形で、東側は削平のためか不明確である。遺構の深さは、５～10㎝で、床面はうねるように凹凸がある。

遺構内からは小さな礫や土師質土器が出土した、第57図４に図示した土師質土器の坏は代表的な遺物である。口径は12.2㎝、底径は8.1㎝、器高は3.7㎝で、底径は口縁部に比較して66％と大きく、古い様相を持つ。15世紀前半と考える。



第60図　Ｂ地区Ⅱ　SK22・25出土遺物実測図

SK21

SK21は、SK20の南に隣接して検出された土坑である。検出時は、東西約１m、南北約２mの楕円形の形状で、遺構が確認され、SK21とした。しかし調査が進行すると、床面までの深さが一定せず、また平面形も不定形になり、複数の小さな土坑が切り合うことが判明した。

遺構内からの出土遺物も、土坑内の北寄りや南側、南西部などで、まとまって出土したもので、厳密には同一遺構内の同時期廃棄資料とは言えない。その代表的な遺物は第59図に図示した。

１は口径9.3㎝で、他が口径13㎝前後以上であるため、小型の坏である。２～８は口縁部がハの字状に開き、端部が尖る。口径に対する底径の比率は、３・４・６が50％台で、底部が小さいが、２・５・７・８は60％台で、比較的大きい。底面は糸切り底で、スダレや板状の圧痕が残る。複数の遺構の可能性があるが、遺構の検出状況から15世紀代と考える。

SK22

SK22は、SD20の南側に隣接して検出された。SK22との間には、SD04が東側から分断するように掘り込まれている。確認できる遺構の規模は、東西約1.6ｍであるが、北側は削平されており、不明である。遺構の深さは、南端で約10㎝である。

遺構内からは、土師質土器の破片が出土しているが、代表的な遺物として第60図１に図示した。口縁部はやや肥厚し、口径13.6㎝、器高2.7㎝、底径8.9㎝のやや大型の皿状の坏である。15世紀代でも古い様相を持つ。

SK24

C・D・E－５区で検出したSD02の西側で小規模な土坑を検出した。これをSK24として調査を行った。遺構はSD02に切られており、北側に遺構の壁を検出したが、他の部分は削平のためか、不明確であり、遺構ではない可能性もあると判断した。

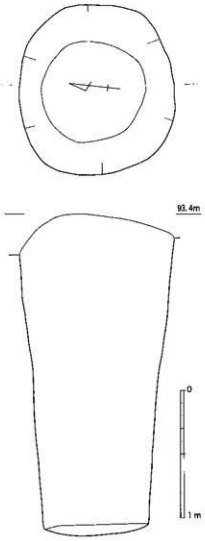
時期はわずかな遺物と検出状況から15世紀代と考える。

SK25

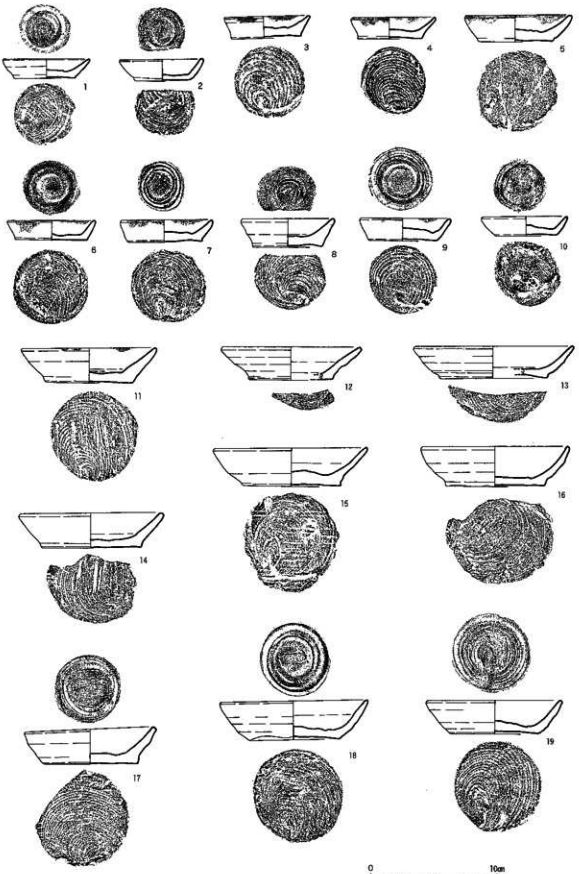
調査区の西壁沿いのC－６区で検出されたSK25は、SD03を切り、西に延びる細長い溝状の土坑である。その規模と形状は、東から西にかけて約3.5ｍ検出され、西端で幅広になり約80㎝になる。遺構の深さは10～20㎝で、床面で柱穴状遺構が３ヶ所検出されたが、別遺構と考える。

遺物は、遺構内から比較的大型の破片が出土した。第60図２～７に図示したが、いづれも、口径が12㎝台であるが、底径は最小が４の6.6㎝で最大が７の9.6㎝と差がある。また、器高は３が2.6㎝であるが、他は３㎝前後である。底部は、糸切り底であるが、２・４以外にはスダレや板状の圧痕が付いている。

遺構の時期は、SD03より新しいが、15世紀代と考える。



第61図　B地区Ⅱ　SE11実測図



第62図　B地区Ⅱ　SE11 出土遺物実測図(1)

(2)井戸

SE11

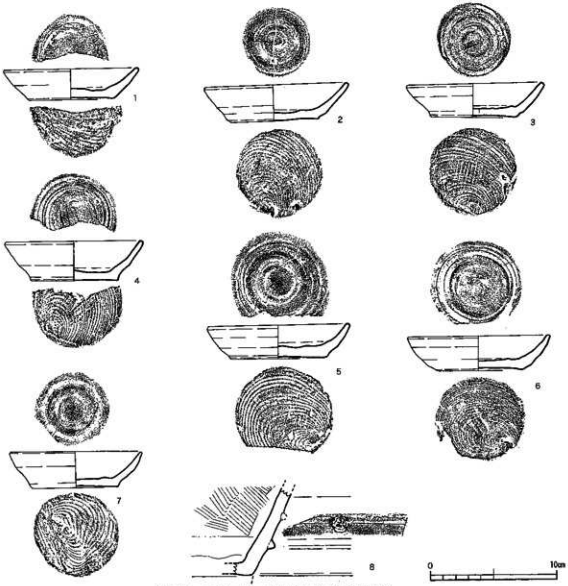
第61図に図示したSE11は、C・D－５で検出された深い土坑で、その形状から素掘の井戸と判断した。遺構の規模は、上面が東西約1.4ｍ、南北約1.3ｍの円形に近い形状で、検出面からの深さは約2.5ｍである。底面の規模は東西約80㎝、南北約80㎝の円形で、砂層に達しているが、調査時に湧水は確認されなかった。

井戸を掘削中に、第62・63図に図示した遺物が出土しているが、狭小であったため、出土状態の図化は困難であった。しかし、遺物には完形品や大型の破片が多く、単純な廃棄後ではなく、井戸祭祀の可能性も考えられる、一括性の強い良好な資料である。

第62図１～10は小皿又は小坏であるが、１・２・６は器壁が薄い造りであるが、他は底部の器壁が厚く、口縁部の立ち上がりが短い。特に、３・７・６は口縁部断面が三角形をしている。この小皿には３～９のように、口縁部にススが付着する灯明皿として使用されている例が多い。

灯明皿

第62図11～19と第63図１～７は坏であるが、口径に対する底径の比率は60～70％台が主体を占める。また、底部から立ち上がる口縁部の形態は、第62図11～15・17・19、第63図１～４・７は口縁部がハの字状に立ち上がるが、第62図16・18、第63図５・６は内湾気味に立ち上がる。



第63図　Ｂ地区Ⅱ　SE11出土遺物実測図(2)

瓦質土器

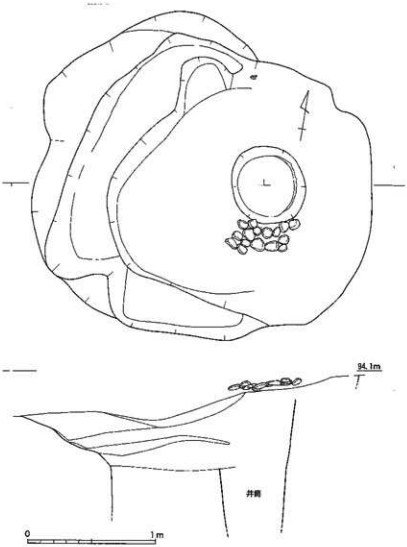
第63図８は瓦質土器の脚が付く鉢で、外面にはスタンプ文が押されている。

遺構の時期は、15世紀前葉と考える。

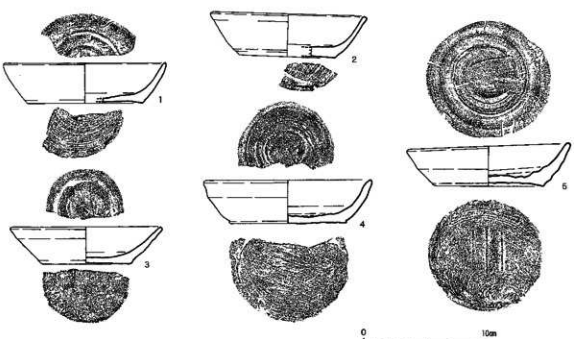
SE13

第64図に図示したSE13はＣ－４・５で検出された井戸である。上面に後述する石積み遺構があり、その下部で検出された。この井戸は、直径約５ｍの大型の土坑を掘り、水源を検出した後に、桶を積み上げ井筒とするタイプである。発掘調査は、遺構を半裁し、掘り下げを行ったが、約 1.8 m掘り下げた位置で湧水が生じ、崩落が発生したため、発掘調査は断念した。しかし、図化は出来なかったが、三段以上積み上げられた結桶とそのスタンプを確認した。

結桶



第64図　Ｂ地区Ⅱ　SE13 実測図



第65図　Ｂ地区Ⅱ　SE13 出土遺物実測図

確認された井戸の井筒は直径約 1.2 m で、結桶が重ねられていた（写真図版５下段参照）。井戸の検出面では、井筒の南側に扁平な掌大の石を平坦に敷き詰めており、足場として整備している。

足場

遺構内からの出土遺物は、中断したため少量であるが、第65図に図示した土師質土器の坏が出土している。これらの土器の口径に対する底径の比率は、１が 72 %、２・３が 59 %、４が 62 %、５は 68 %で、比較的底径の大きい坏が目立つ。口縁部の形態は、２・３が逆への字状に開くが、１・４・５は内湾気味に立ち上がる。底面は糸切り底で、３～５には板目圧痕が認められ、内底面にはロクロ目が目立つ。

遺構の時期は、井戸上面で 15 世紀後半から 16 世紀前半の遺物を出土する堆積上と石積み遺構が構築されており、それ以前と言える。第65図に図示した出土遺物も、底径の大きい古い様相を持つ土師質土器の坏が出土していることから、14世紀後葉から15世紀初頭と考える。

(3)溝

Ｂ地区Ⅱの調査で、最も関心がもたれたのが、Ｂ地区Ⅰで検出された大規模な溝の展開であった。表土を除去し、遺構を検出した段階では、この溝の北側への展開と想定される南北方向に延びる、遺物を多く含む黒色土層を確認し、これを SD01（１号溝）とした。しかし、調査が進行すると、この南北方向の黒色土層は、溝ではないことが判明した。この状況については次に報告する。

以下の報告は、この黒色土を除去した後に検出された溝である。

SD02

SD02 は、Ｃ・Ｄ・Ｅ－５区で検出した南北方向の溝である。その方位は、磁北を示す。検出された遺構の規模は、長さ約 18 m、幅約 1 m で、検出面からの深さは約 20 cm である。底面の高さは検出部分で北端と南端の比高差が約 10 cm で、南に傾斜し、Ｂ地区Ⅰの溝に流れ込む。溝は検出部分の中央部で西側に３ヶ所開いている。

遺構内からは、第66図に図示した遺物が出土している。１は口縁部が肥厚する濃緑色の釉のかかる磁竈窯系の陶器片で、タライ状の鉢である。２は、口縁部が肥厚する東播系の鉢である。３・４は上師質土器の小皿である。口径は７cm代、底径は 5.6 cm で、口縁部にはススが付き、灯明皿として使用されている。５～12 は坏である口径に対する底径の比率は、６以外は 60 %以上で底部が大きい。また、器高も６以外低く、皿状をしている。器高が高く、底部の小さい６は口縁部にススが付着し、灯明皿として使用されている。

磁竈窯系

灯明皿

13 の小型壺は素焼きの土師質土器であるが、口径 4.3 cm、底径径５cm、器高 6.8 cm で、胎土は坏に比較すると精選されている。14 は瓦質土器の鉢で、口縁部の外面に突帯が巡り、その上に菊花文のスタンプが付けられている。

小型壺

SD02 の時期は、SE13 と同様石積み遺構と、それを埋立てた上層より古い。出土遺物も、底径の大きい古い様相を持つ坏が主体を占め、15 世紀前葉と考える。

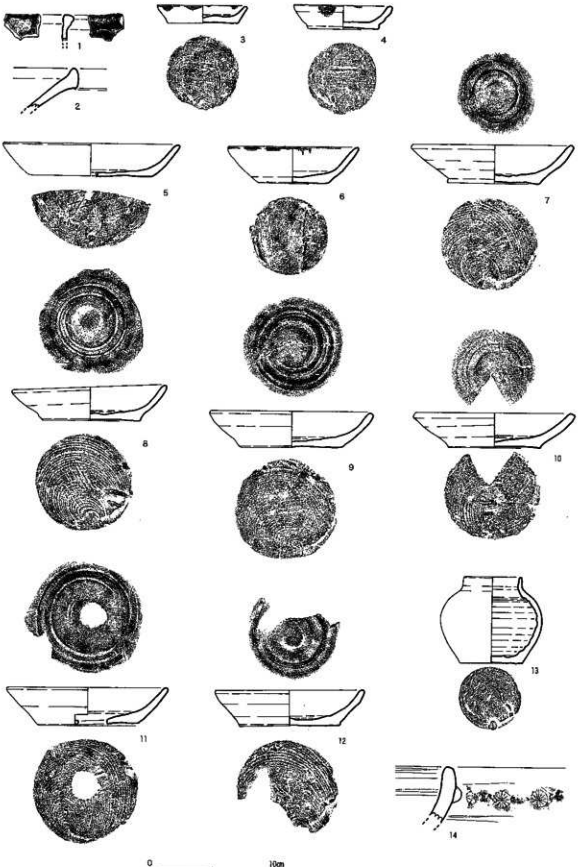
SD03

SD03 は、SD02 と約 3.5 m 西側に離れて、ほぼ並行する南北方向に延びる溝で、方位も同じである。確認された遺構の規模は、長さ約 23 m で、幅約 1 m で、検出面からの深さは約 30 ～ 20 cm である。検出された溝の北隅と南隅の比高差は約 10 cm で、南に緩く傾斜し、Ｂ地区Ⅰで検出された区画性の強い溝に SD02 と供に直角に交わる。

SD03 から出土した遺物は第67図に図示した。１は備前焼の擂鉢の底部である。２～５は少数であるが、土師質土器の小皿と坏である。いずれも口径が大きく、口縁部に対する底部の比率も 60 %以上で、古い様相を持つ。６は瓦質土器の鉢である。内外面横方向の刷毛目調整であるが、口縁部外面は横撫でである。７も瓦質土器であるが、外面はスタンプ文で埋められており、内面は斜め方向の刷毛目である。遺構の検出状況から 15 世紀前半と考える。

備前焼

瓦質土器



第66図　B地区Ⅱ　SD02 出土遺物実測図

(4)柱穴状遺構

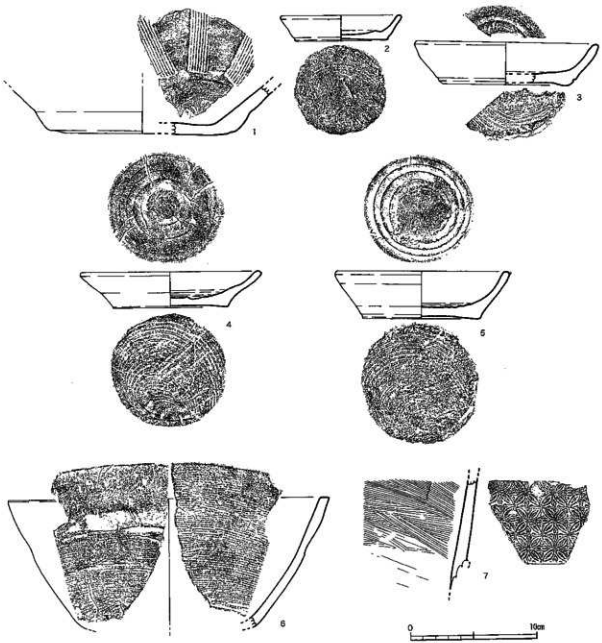
Ｂ地区Ⅱの調査区内からは、柱穴状の小さい土坑が多数検出された。これらから、掘立柱建物を復元することはできなかったが、いくつかの遺構の中から遺物が出土し、第68・69図に図示した。こうした柱穴状遺構の調査は、調査区ごとに遺構番号を付け、遺物の取り上げを行った。報告もそれに従い行う。

Ｄ－４区

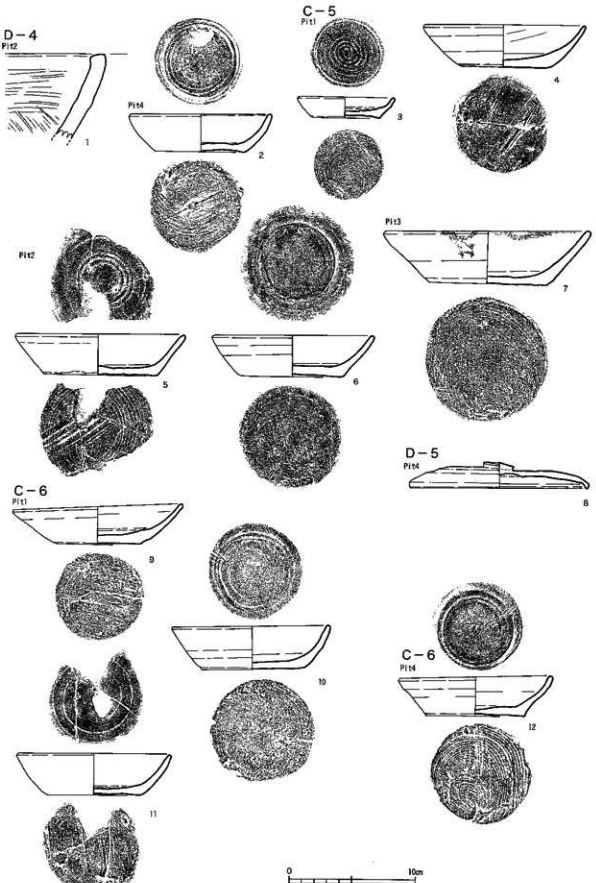
瓦質土器　Ｄ－４区からはPit1出土の第68図１、Pit4出土の２を報告する。１は瓦質土器の鉢で、内外面ヘラで磨かれている。２は口径に対し底径は63％で、口縁部が内湾気味に立ち上がる坏である。

Ｃ－５区

Ｃ－５区からは、Pit1から第68図３の土師質土器の小皿と、４の底径の小さい坏が出土している。３は完形品で内面にロクロ目が残る。４は底径が小さく、口縁部が内湾気味に立ち上がり椀形をしている。底面には板目圧痕が残る。



第67図　Ｂ地区Ⅱ　SD03出土遺物実測図



第68図　Ｂ地区Ⅱ　各地区柱穴状遺構出土遺物

Pit2からは、第68図５・６の土師質土器の坏が出土している。いずれも口径に対する底径の比率は67％と大きい特徴を持つ。２点とも底部に板目圧痕が残され、６は完形品である。また、内面にはロクロ痕を残す。

Pit3からは第68図７の完形品の土師質土器の坏が出土している。口径は16.1㎝ある大型で、板目圧痕のある底部から逆ハの字状に口縁部が立ち上がる。口縁部周辺にはタール状の付着物がある。

Ｄ－５区

須恵器　Ｄ－５区では、Pit4から第68図８の須恵器の坏蓋が出土している。古代の遺構は概ね調査区の北端で検出されているが、この遺構はそこから離れている。遺物は宝珠の摘みが付く須恵器の坏蓋で、口縁端部は折曲がり断面三角形になる。

Ｃ－６区

Ｃ－６区のPit1出土の第68図９～11の３点は、まとまって出土した土師質土器の坏である。９は口径に対し底径の比率が小さく50％で、器高も低い皿状をしているが、10･11は口径に対し底径の比率が60％以上あり、器高も口径に対し28％と高い。口縁部の形態も、内湾する。

第68図12はPit4から出土した土師質土器の完形品の坏である。口径12㎝に対し、底径は８㎝で、67％と大きく、器高も26％と高い。口縁部は内湾気味に立ち上がり、底部にはスダレ状の圧痕が残る。Pit1の10・11と法量的には近似するが、底部外側の処理が異なる。

Ｄ－６区

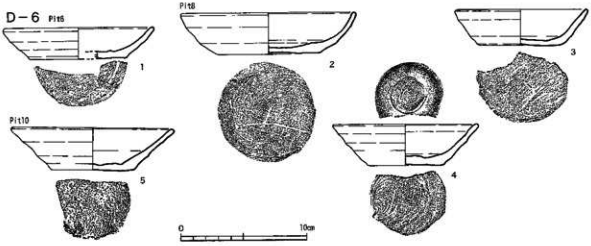
Ｄ－６区の柱穴状遺構から出土した遺物は第69図に図示した。１はPit6、２～４はPit8、５はPit10からの出土である。

Pit6出土の１の口縁部は逆ハの字状に開く。口径に対し、底径の比率が66％であるが、器高は22％と低く、皿状をしている。底部は板目状の圧痕がある。

Pit8出土の２～４は折り重なった状況で検出され、一括廃棄された可能性の強い遺物である。２は口径に対し、58％の小さい底部から口縁部が内湾気味に立ち上がり、口径は13.8㎝と大きい。器高も3.3㎝と高いが、口径が大きいため、全体として皿状に見える。３は口径に対し底径が63％と大きく、器高は2.8㎝であるが口径が10㎝であるため、深くなっている。４は皿状の形態である１の口縁部を高くした形態で、器高の比率は28％である。底径の比率は51％である。

Pit10出土の５は４と形態的には類似する。口径は12.7㎝であるが、底径は6.4㎝で、半分の大きさである。器高は3.3㎝で、比率は26％である。

Ｂ地区Ⅱで検出された柱穴状遺構の時期は、Ｄ－５区のPit4が８世紀である以外は、15世紀中頃から16世紀前葉であり、他の大型遺構の時期と同じと考える。



第69図　Ｂ地区Ⅱ　Ｄ－６検出柱穴状遺構出土遺物実測図

(5)石積み遺構

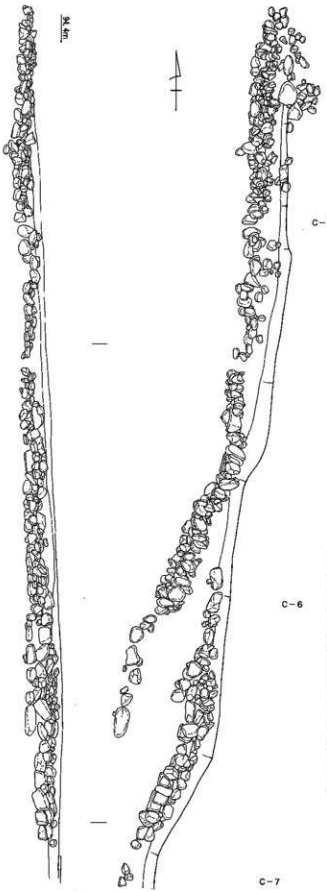
前述したが、Ｂ地区Ⅱの調査で、最も関心がもたれたのが、Ｂ地区Ⅰで検出された大規模な区画性の強い溝の北側への展開であった。調査は、表土を除去し、整地層を掘り下げ、遺構検出を行った段階で、この溝の北側への展開と想定される南北方向に延びる、遺物を多く含む黒色土層を確認し、これをSD01（１号溝）と理解した。

しかし、調査が進行すると、この南北方向の黒色土層は、溝ではないことが判明した。すなわち、この黒色土層は、東から西に緩く傾斜する斜面を中世の段階で、平坦面を造り出すため、造成を行った際に生じた南北方向の約１ｍの段差を埋め立てた土砂であった。さらに、段差部分には崩落を防止するためと、下段から上段に移動するための登り道のために、第70図に図示した掌大から人頭大の礫を積み上げた石積みが検出された。

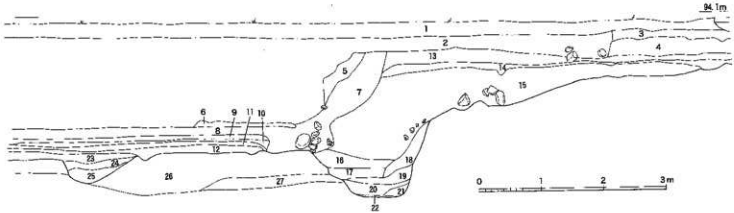
段差

登り道

第71図の土層図は、Ｂ地区Ⅰ（１次調査）の北壁面の一部で、石積み部分にあたる位置である。図示したように、中世の造成により生じた段差と石積みを覆い、段差を解消する状態で、上段から下段にかけて観察される



第70図　Ｂ地区Ⅱ　石積遺構実測図



1．黒茶色（表土）
2．灰褐色土（近代の埋土）

近世・近代水田層
3．黒茶褐色土
4．灰褐色土＋黒茶褐色土
5．黒灰茶色土
6．暗茶色土
7．灰褐色土
8．暗灰褐色土
9．灰茶色土
10．燈色土
11．暗灰燈色土

整地層
12．黒褐色土
13．茶色土
14．暗茶色土

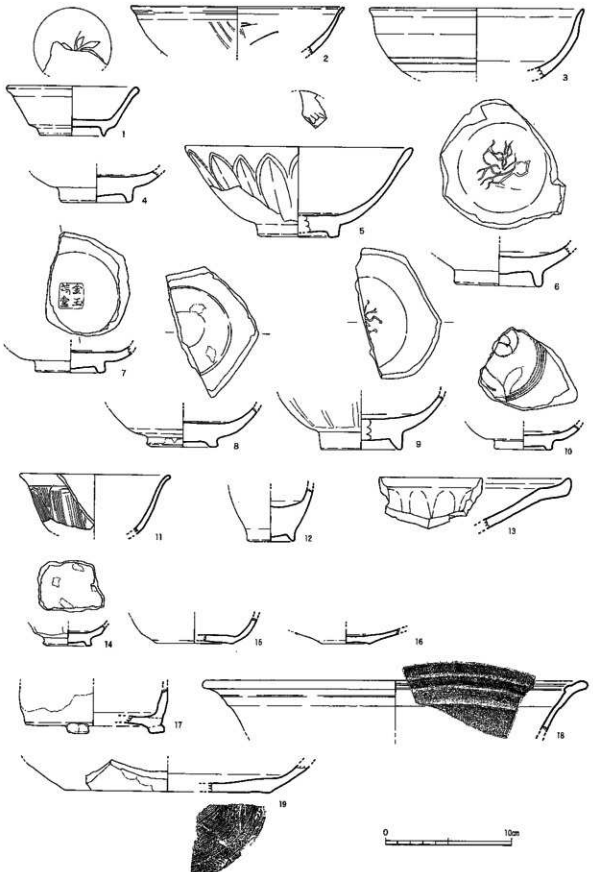
15．黒茶色土（3次 石積遺構）

SD02（3次調査）
16．灰黒色土
17．白茶色土
18．暗白茶色土
19．灰黒色土
20．明灰黒色土
21．暗灰茶色土
22．暗灰色砂層

SD03（3次調査）
23．暗灰褐色土層
24．暗灰色粘土質土層
25．暗灰色砂層

地山
26．暗茶色土
27．薄暗茶色土

第71図　B地区Ⅰ（1次調査）北壁土層図



第72図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(1)

が、下段は近世の水田開発のため、一部が削られている。この黒色土層には、遺物も多量に含まれていた。調査は、当初溝遺構を想定して掘り下げを行ったため、遺物は1号溝（SD01）として取上げた。また、溝ではないことが判明した段階から、遺物包含層としてとらえ、黒色土層が確認された範囲が、C－5区・D－5区であったため、調査地区ごとに遺物を取上げた。

そこで本報告は、溝として調査していた段階の遺物を、その後明らかになった石積み遺構の上部を覆う土砂に包含されていたことから、「石積み遺構」周辺出土として行う。また、溝ではないと判断した段階からC－5区から出土する遺物は、遺物包含層としてとらえ、遺物の取上げを行った。報告では出土位置を可能な限り限定するため、「C－5区石積遺構」として行う。しかし、両者は同じ起因で包含された遺物である。

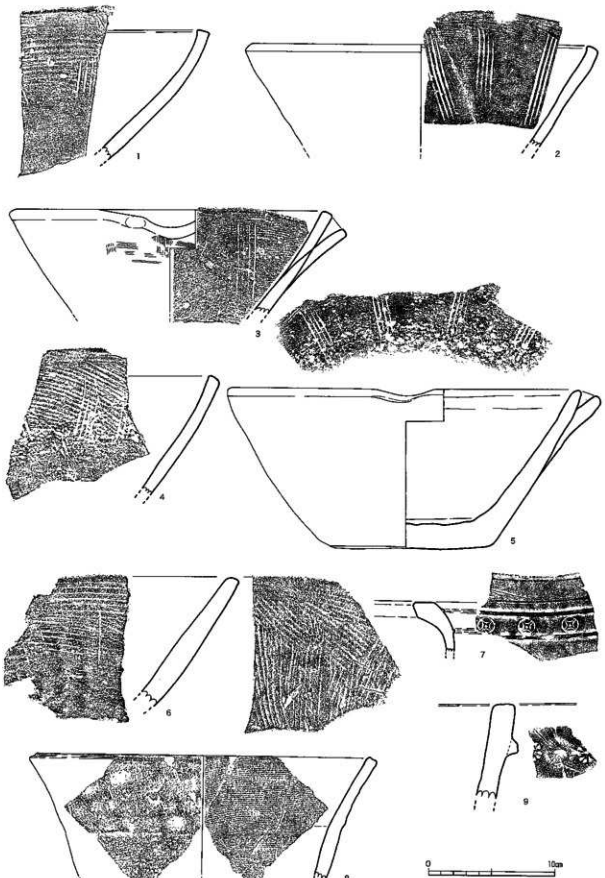
以上のことから石積み遺構出土の遺物として、第72～98図を報告する。第72図1は口径10㎝の龍泉窯系の青磁碗である。全面施釉で、畳付きのみが露胎になっている。2はオリーブ色をした龍泉窯系の口径16.8㎝の青磁碗で、口縁部は器壁を薄く仕上げている。3は口径17㎝で、口縁部の器壁を薄くし、底部近くに平行沈線文が巡る龍泉窯系青磁碗である。4は底部であるが、畳付きから内面は露胎で、見込みも蛇の目釉剥ぎである。龍泉窯系青磁碗であるが、釉には貫入が目立つ。5は口径18㎝の外面に鎬蓮弁が巡る龍泉窯系青磁碗である。見込みにも文様があり、ほぼ全面施釉であるが、畳付きから内側が露胎である。6はオリーブ色をした龍泉窯系青磁碗の底部である。施釉はほぼ全面で、高台の内側の中心部は施釉で、その周辺が露胎である。釉は貫入している。7は見込みに「金玉満堂」のスタンプ文がある龍泉窯系青磁碗の底部である。オリーブ色の施釉は全面であるが、畳付きから内面が露胎である。8は、見込みに胎土目のある龍泉窯系青磁碗である。全面にオリーブ色の施釉があるが、畳付きから内面が露胎である。9は外面に蓮弁がある龍泉窯系の青磁碗である。高台内面は露胎である以外はオリーブ色の貫入した施釉で覆われている。10は、見込みに花文のある龍泉窯系青磁碗の底部である。ほぼ全面オリーブ色に発色した釉で覆われているが、畳付きから内面は露胎である。11は外面に蓮弁状の文がある龍泉窯系の青磁碗である。発色はオリーブ色をしており、貫入が見られる。12は底部の器壁の厚い龍泉窯系の青磁で花瓶の可能性も考えられる。畳付き以外は全面施釉である。13は口縁部が屈曲し、端部が肥厚する龍泉窯系の大皿である。内面に放射状に連続した凹線がある。

14は見込みに目跡がある白磁の坏である。体部は、六角形に成形されており、高台周辺以外は施釉されている。15の白磁は底部の資料であるが、口禿げの口縁部を持つと考えられる。16は白磁の皿の底部で、底面周辺は露胎である。17は3ヶ所に小さい脚が付く焼締陶器で、外面に自然釉が付着する。18は大型の焼締め陶器で、内面には擂り目状の縦方向の沈線があり、擂鉢の可能性が強い。19は底面は灰色の露胎であるが、薄緑の透明感のある釉がかかっている。

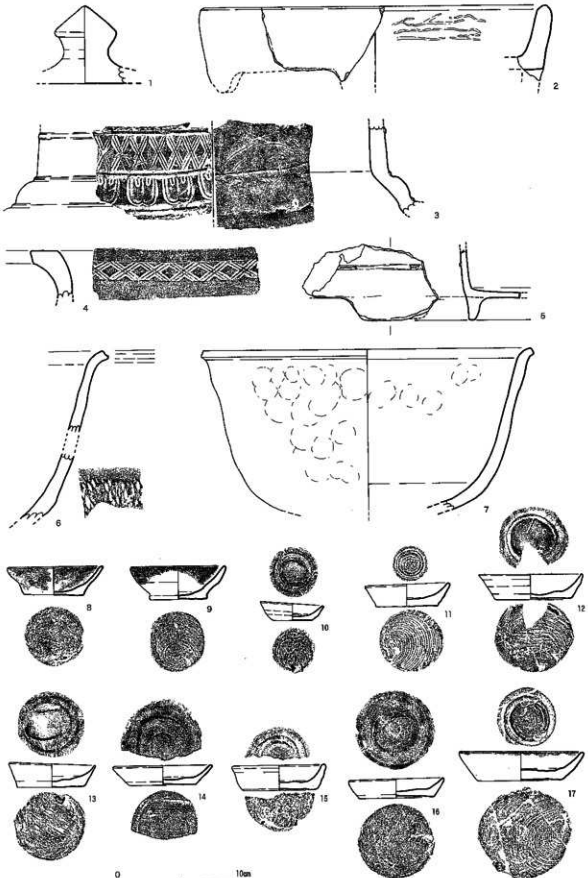
第73図は瓦質土器である。1～5は内面に擂目が加えられており、擂鉢と考える。1の外面は横撫で、内面は刷毛目で調整されているが、使用のため下位は磨滅している。2は口径25.8㎝で、器面は外面が撫で、内面は刷毛目で調整されている。3は片口になっており、内面は横方向の刷毛目で、擂り目が加えられているが、使用のため磨滅している。4の内面は斜め方向の粗い刷毛目で、あるが磨滅のため消えている。5は図上復元できる片口の擂鉢で、口径は28㎝である。内面は使用のため磨滅している。7の口縁部は内湾し上面に平坦部を作り肥厚する。外面に細い突帯とスタンプ文が付く。8は口縁部外面は撫であるが、内面は横方向の刷毛目で調整されている。9は外面に縦状の突起とスタンプの菊花文が付く鉢である。

第74図1～7も瓦質土器である。1は宝珠の摘みである。2は口径27.1㎝の火鉢で、脚が3ヶ所につく。内面は横方向のヘラ磨きである。3は瓦質土器で、外面に蓮弁と×印のスタンプ文が施文されている。精製粘土を使用し、丁寧な造りである。4は内湾する口縁部の上面が平坦にな

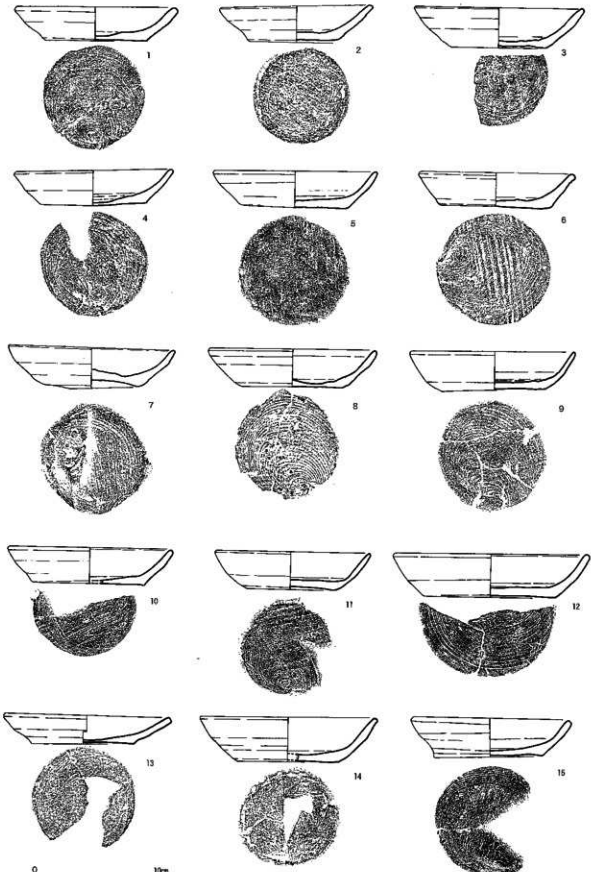
龍泉窯青磁碗
蛇の目釉剥
鎬蓮弁
「金玉満堂」
畳付き
露胎
花瓶
龍泉窯系大皿
目跡・白磁
体部、六角形
口禿げ
焼締陶器
瓦質土器
擂鉢
片口
菊花文
蓮弁



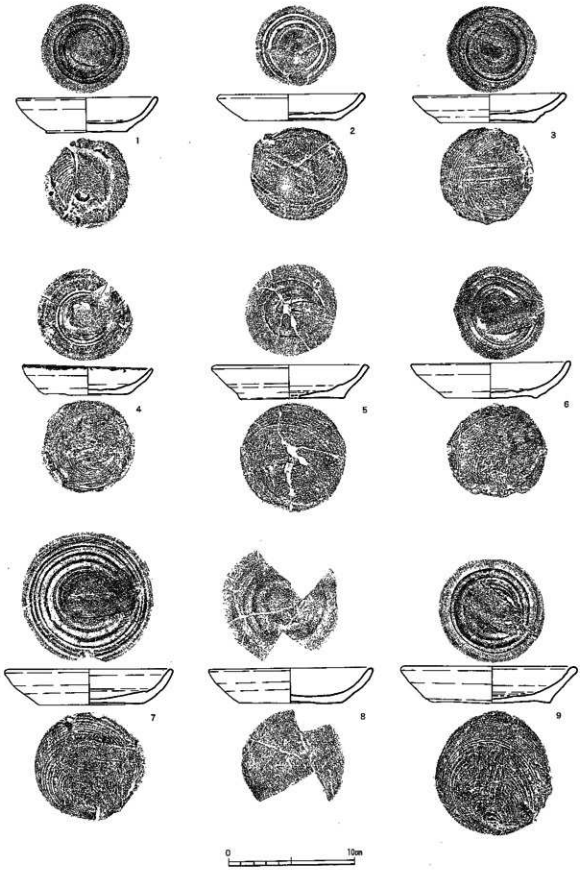
第73図　Ｂ地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(2)



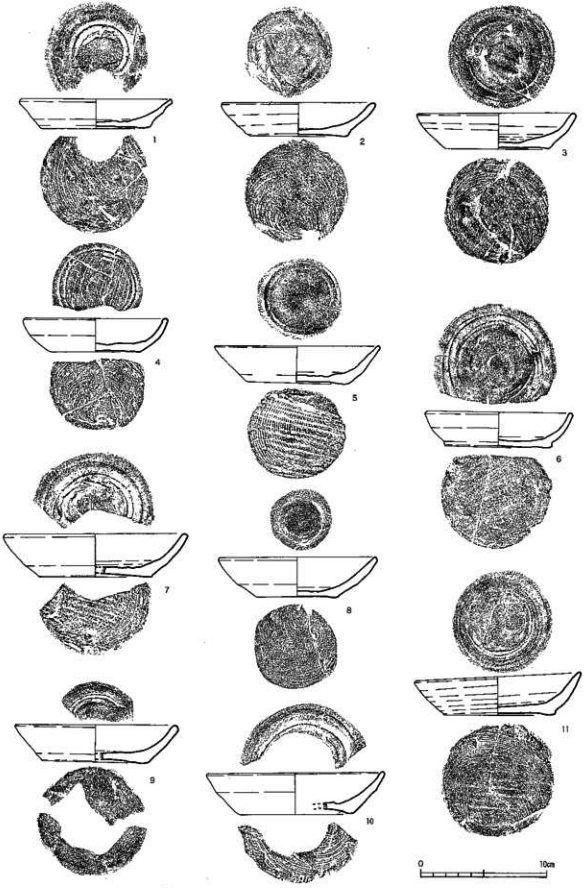
第74図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(3)



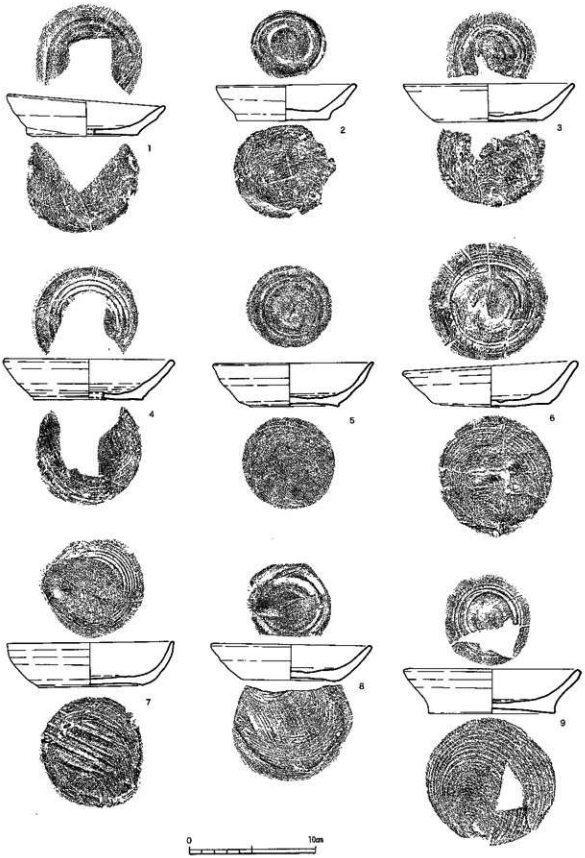
第75図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(4)



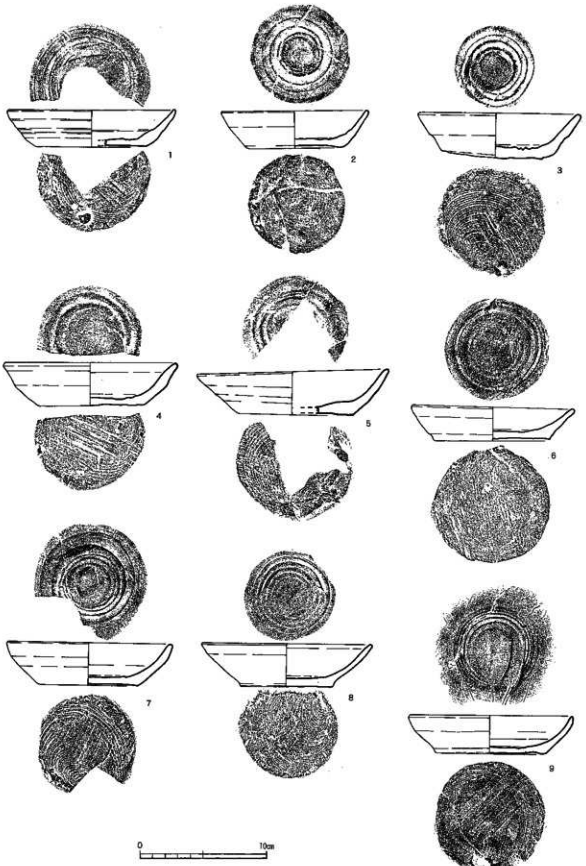
第76図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(5)



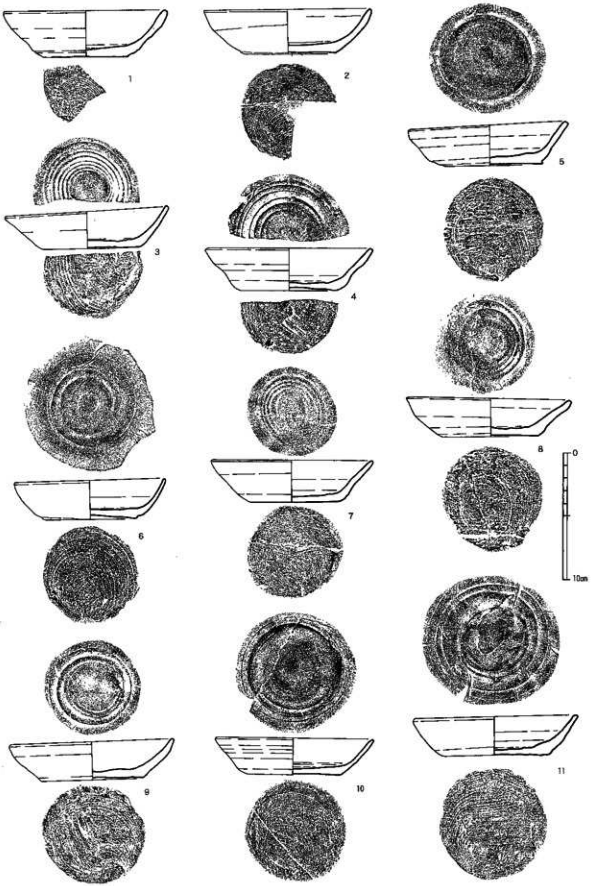
第77図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(6)



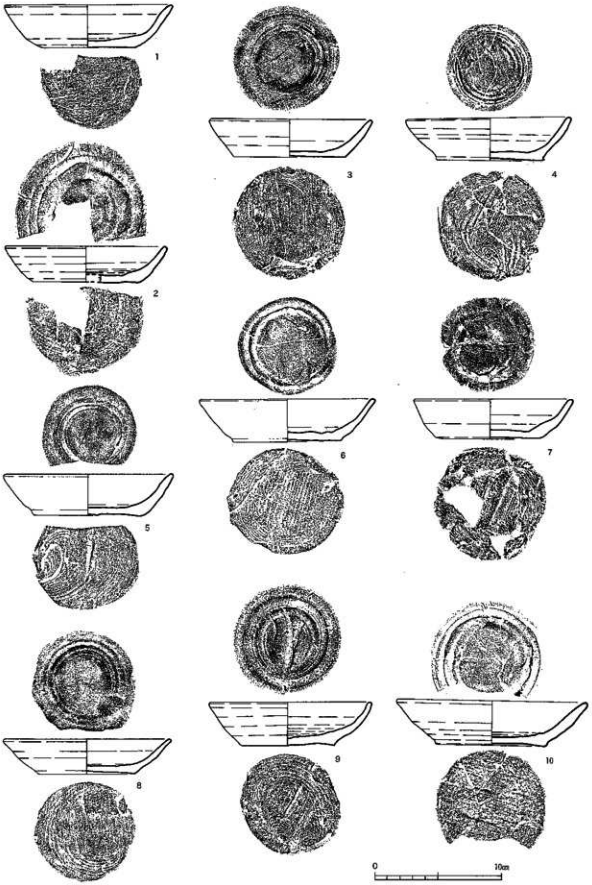
第78図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(7)



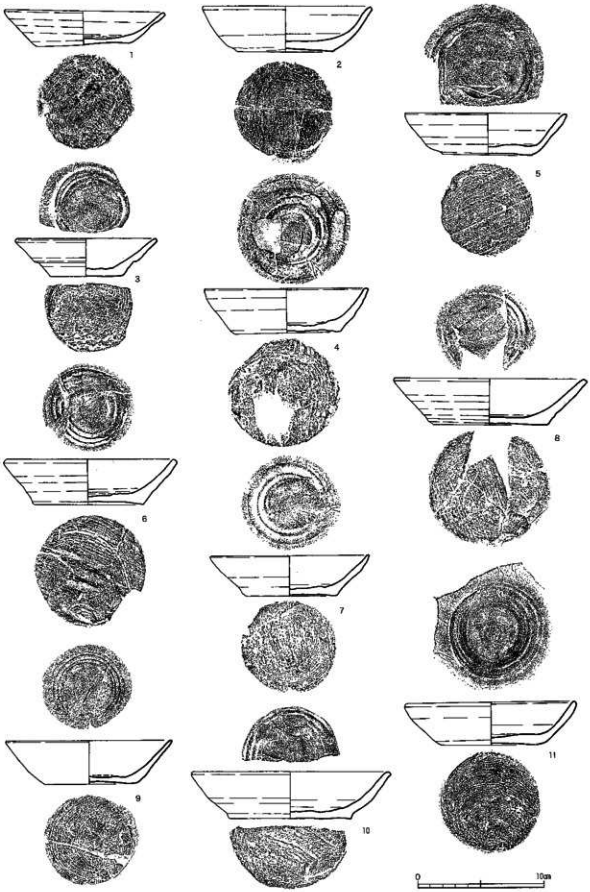
第79図　Ｂ地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(8)



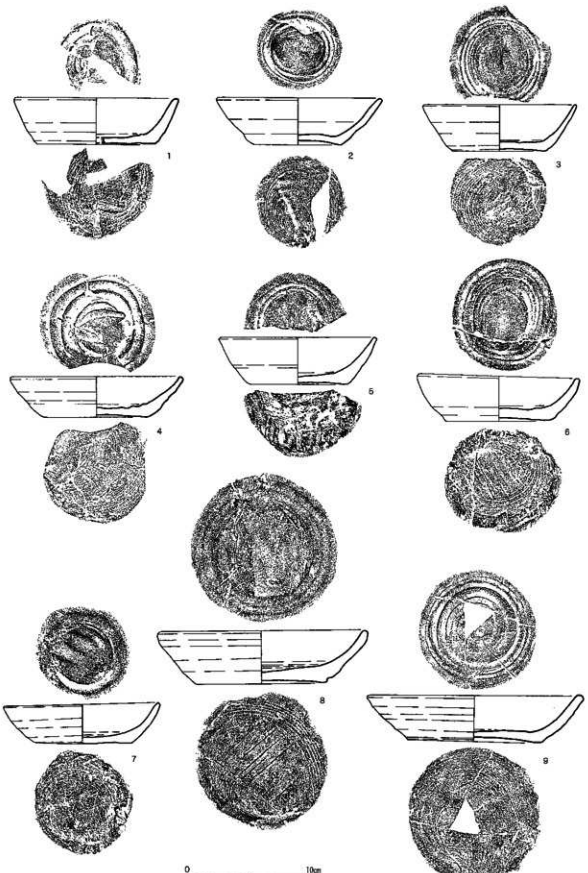
第80図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図9)



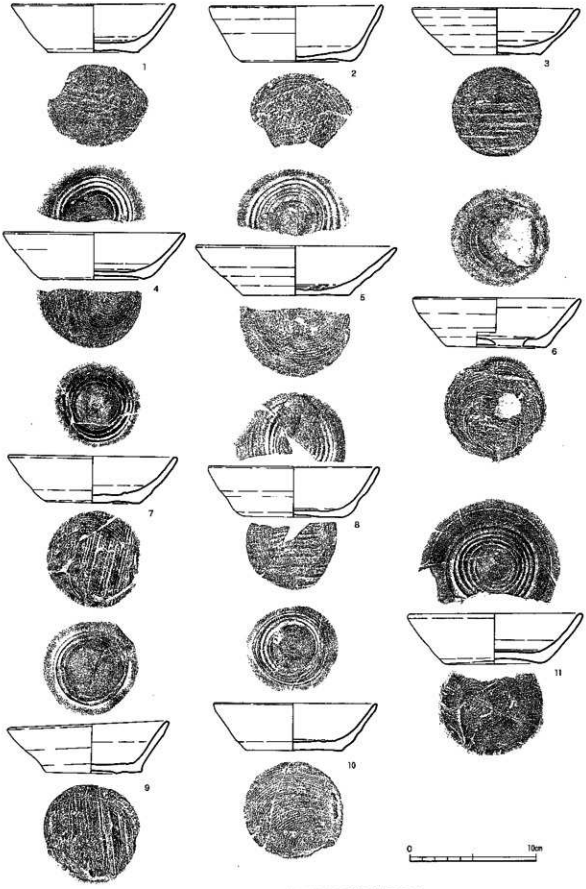
第81図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(1)



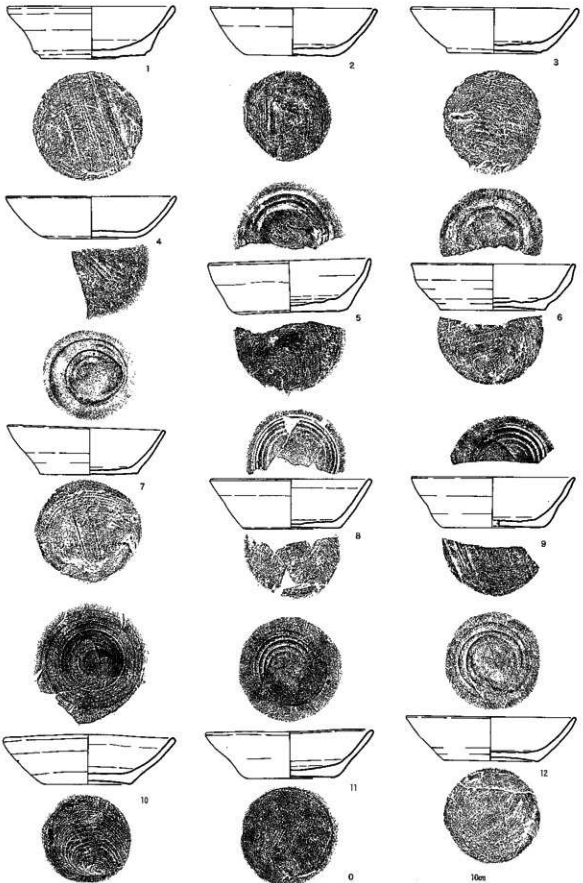
第82図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(1)



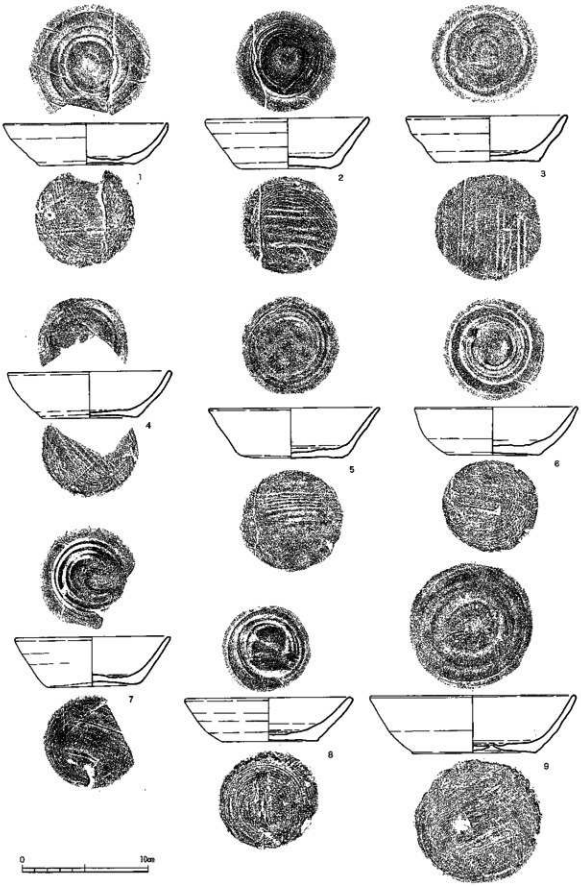
第83図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(1)2



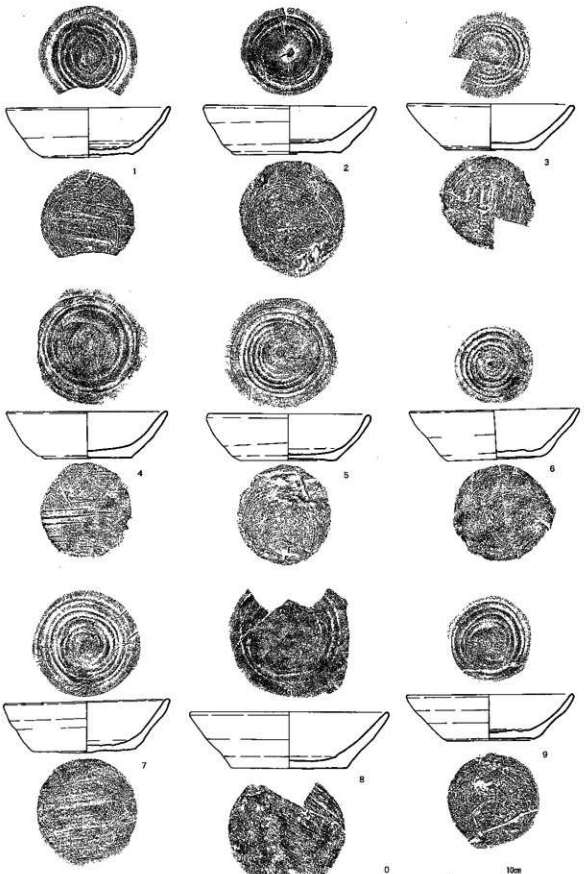
第84図　Ｂ地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(3)



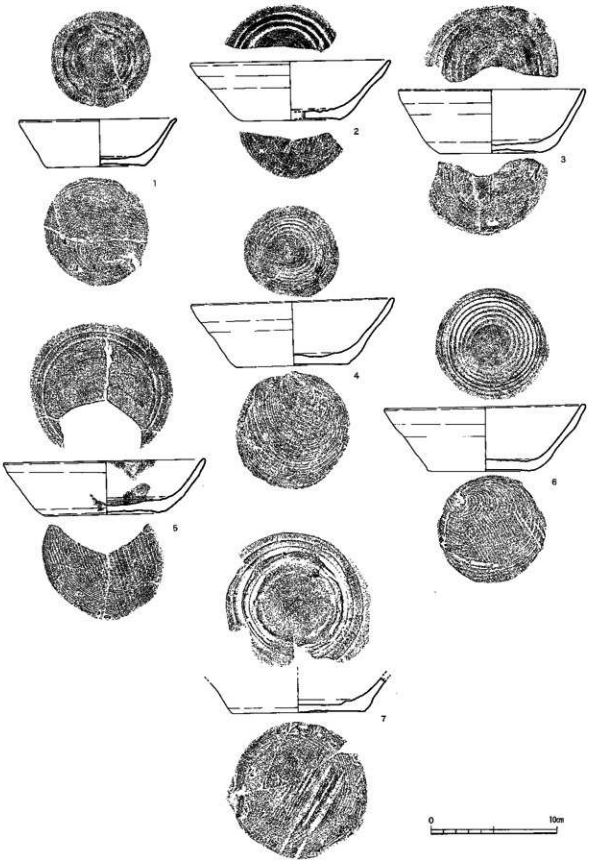
第85図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(4)



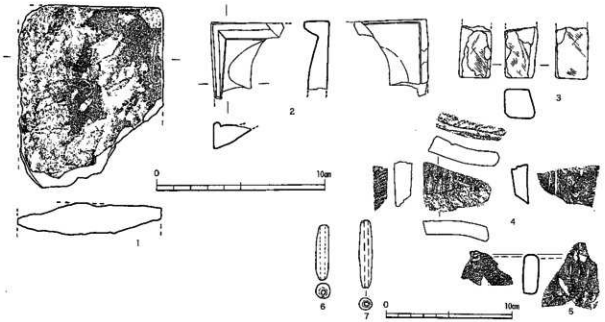
第86図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(1/5)



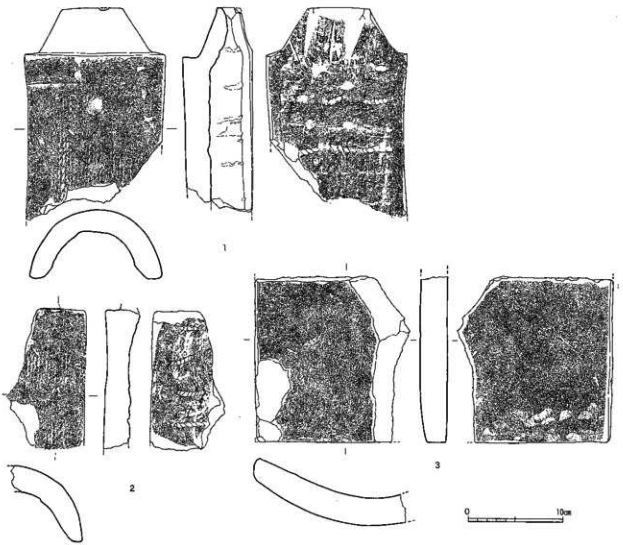
第87図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(6)



第88図　Ｂ地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(17)



第89図　Ｂ地区Ⅱ　石横道構出土遺物実測図(1)



第90図　Ｂ地区Ⅱ　石横道構出土遺物実測図(1)

瓦質土器火鉢　る瓦質土器である。外面にはスタンプ文が施文されている。5は脚付の円筒形の火鉢である。器面はヘラ磨きされている。6は外面にススが付着しており、鍋と考える。底部近くは叩き痕が残る。7は口径26㎝の鍋で、器面は内外とも指圧痕が全面に残る。外面にはススが付着している。

土師質土器　第74～88図は土師質土器の小皿と坏である。土師質土器は多量に出土したが、中でも完形品や大型の破片を図化した。第74図8～17は、口径10㎝以下の小皿・小坏である。器形は、口縁部の立ち上りが短いため、口径と底径の差が小さく、全て60％以上である。しかし、器高は21～34％で、口径が大きく器高の低い21・22％の14・16・17は特に小皿状をしている。17はススが

灯明皿　付着しており、灯明皿として使用されている。また、器高が高い30％以上の8～11は小坏状で、8・9の器面にはタール状の付着物が付き、灯明皿として使用されている。

第75～88図は、坏である。口径は11～13㎝が主体を占めるが、第76図1・4、第92図3のように、10㎝台も少数存在する。また、口径15㎝以上も、第81図19、第82図8、第83図8・9、第84図5、第86図9、第87図8、第88図2・4～6のように、一定量出土している。さらに、器高も2㎝台から5㎝台まであるため、形態が皿状になるものと、坏状になるものがある。

皿状の形態のものは、口径に対する器高の比率が24％以下になり、口径は11㎝台から第86図9の16㎝台まで、大きさに差が認められる。また、口径に対する底径の比率の違いで、器形も異なる印象を受ける。その主要遺物は第76図2・3・11、第79図8、第80図2・8・10などであるが、小さい底部から大きく口縁部が開く形態になるが、器高が低いために、数量は少ない。

器高の比率で見ると、25～26％の中間的な形態もあるが、それ以上の数値になると、明らかに形態が異なる。口径は第83図3の10㎝台から第86図9の16㎝台まである。口縁部を延ばし、器高を高く成形しているため、口径に対する底径の比率が、50％台になるものが、皿状のものに対

大型の坏　して多い。特に、口径が大きく器高も高い第88図2～4・6は大型の印象を受ける。

赤間石の硯　第89図は石製品と土製品を図化した。1・2は赤間石の硯と考える。1は図の下位以外の側縁三面は、研磨されているが、全体的に人為的な剥落が激しい。2は破片であるが、一部は過使用、

砥石　天草石　又は砥石として再利用したためか、不自然に薄くなっている。3は四面に使用痕がある小型の砥

石鍋　石である。天草石と考えられる。4・5は滑石製の石鍋の破片である。これらは、石鍋が破損後、

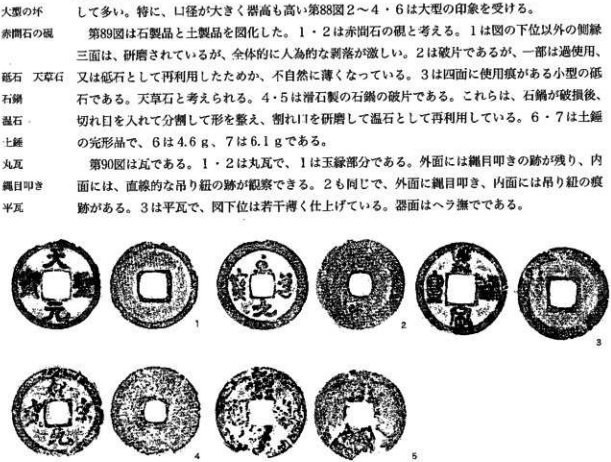
温石　切れ目を入れて分割して形を整え、割れ口を研磨して温石として再利用している。6・7は土錘

土錘　の完形品で、6は4.6ｇ、7は6.1ｇである。

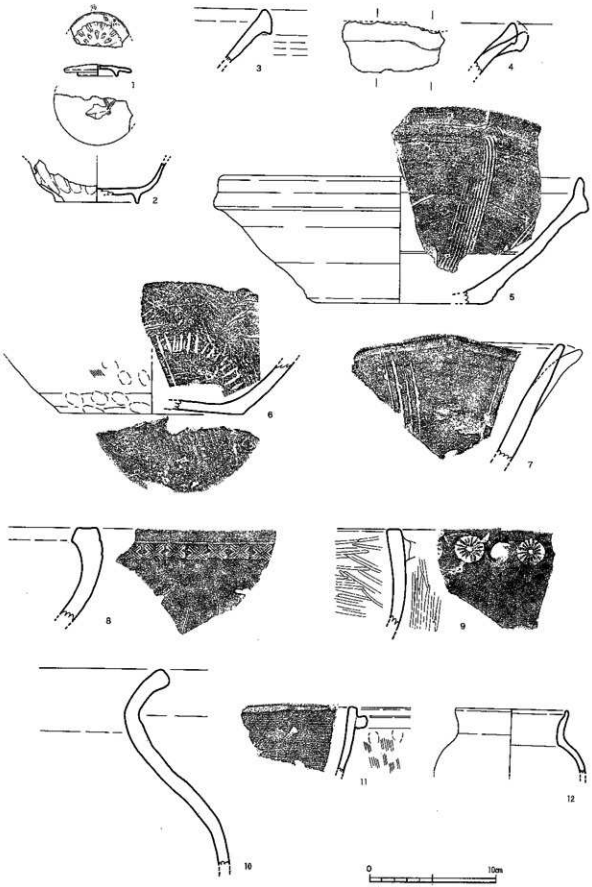
丸瓦　第90図は瓦である。1・2は丸瓦で、1は玉縁部分である。外面には縄目叩きの跡が残り、内

縄目叩き　面には、直線的な吊り紐の跡が観察できる。2も同じで、外面に縄目叩き、内面には吊り紐の痕

平瓦　跡がある。3は平瓦で、図下位は若干薄く仕上げている。器面はヘラ撫でである。



第91図　B地区Ⅱ　石積遺構出土遺物実測図(2)



第92図　Ｂ地区Ⅱ　Ｃ－５石積遺構出土遺物実測図(1)

銅銭　第91図は出土した銅銭である。１は1023年初鋳の真書で書かれた「天聖元寶」である。２は草書で書かれた、995年初鋳の北宋銭で、「至道元寶」である。３は篆書体で書かれ北宋1038年初鋳の「皇宋通寶」である。４は行書体で書かれた「聖宋元寶」で、北宋の1101年の初鋳である。５は腐食のため銭貨名が不明である。

Ｃ－５区石積み遺構

石積み遺構　Ｃ－５区出土の遺物は、先述したように、石積み遺構と同じ成因で堆積された土層から出土したもので、SE13の井戸の上面に形成されている。第92～98図に図示した遺物がその代表的である。

磁器の蓋　第92図１は磁器の蓋で、身受けが形成されている。上面は中心から放射状に刺突文が施文され、その端部は撫でで仕上げられている。青味がかった白色の釉は上面から端部にかけられ、内面は露胎である。法量は、上面径が5.5㎝、身受け部は3.2㎝である。

双魚文　２は龍泉窯系の晩区オリーブ色の青磁碗で、見込み部に双魚文が浮彫りされている。外面は縦方向の連続した縦みが施文され、釉は厚く全面にかけられているため、露胎は畳みつき部のみである。高台径は6.6㎝である。

東播系の鉢　３・４は東播系の須恵質土器の鉢である。口縁部は肥厚し、断面は三角形になり、３は片口部分である。色調は灰白色である。

備前焼　５は備前焼の擂鉢である。法量は口径28.4㎝、底径13.2㎝、器高10㎝で、口縁部は肥厚して端部が立ち上がる。内面の擂り目は９本で、口縁部から底部にかけて放射状に刻まれており、使用のため磨滅している。色調は、赤褐色で、胎土に砂粒が多い。

瓦質土器擂鉢　６・７は瓦質土器の擂鉢である。６は、底径14.8㎝で、胴部外面には指圧痕があり、底面には板状圧痕が残る。内面は擂目が放射状に刻まれていたと考えられるが、磨滅のため底部近くに残るのみとなっている。７は、口縁部の片口部分の破片である。外面は撫で、内面には４条の鋭い擂り目が放射状に加えられている。

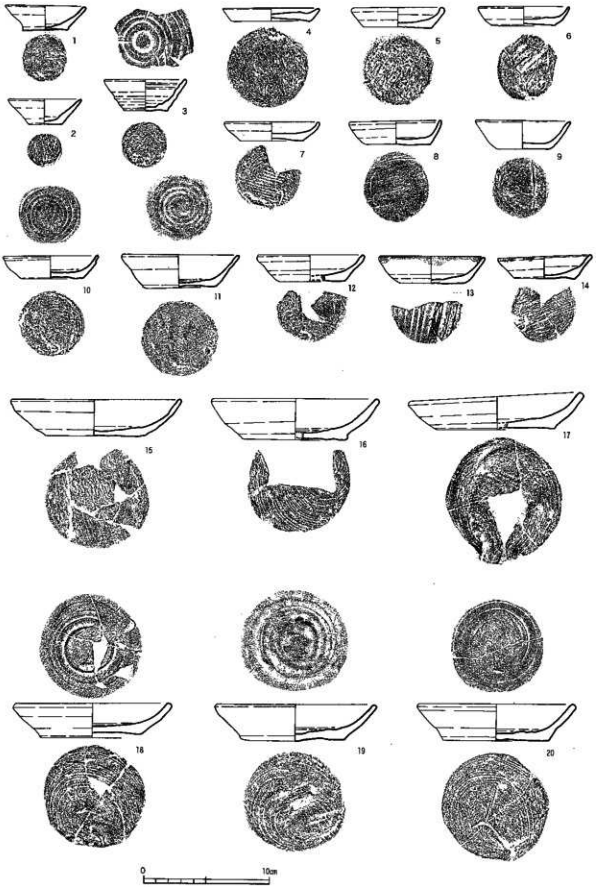
８は、内湾する口縁部の資料で、端部上面と内面は平坦部を生じ肥厚している。外面には３本の線で構成した×印三個を一単位としたスタンプ文が連続して押されている。９は、口縁部が直口する形態の鉢と考える。器面は内面が横方向、外面は縦方向のヘラ磨きで、口縁部近くには粘土瘤の突起と菊花文のスタンプ文が連続的に押されている。

瓦質土器の甕　10は、瓦質土器の甕である。器面は外面が横撫でで、胴部内面は刷毛目である。色調は灰色で、胎土に黒色粒を多く含む。11は色調が淡黄色の瓦質土器で、口縁部外面に断面四角形の突帯が巡る。器面調整は、突帯の下位が指圧痕と刷毛目があり、内面は横方向の刷毛目で仕上げている。12は土師質土器の壺で、口径は8.9㎝である。口縁部は端部内面が窪むように成形している。器面調整は全面撫で仕上げである。

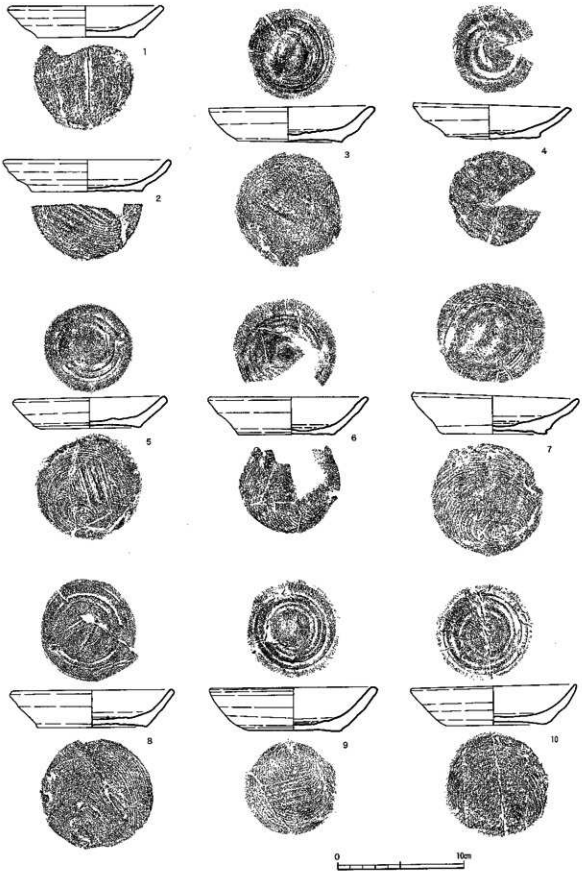
土師質土器　第93～98図は土師質土器の皿と坏である。石積み遺構と同じ状況で堆積した土層から出土しているため、その内容に異なるところはない。第93図１～14は口径10㎝以下の、小皿または小坏といえる小型の器種である。１～３・９・11は多に比較すると、口径に対し器高が高く、その比率は29％を超える。さらに、11以外は底径の比率も50％台で、小さい。これに対し、４～７は器高が低く、23％以下である。これらは、口縁部の立ち上りが短いため、底径の比率が大きく、70％以上になる。８・10・12～14は中間的な数値を示す形態で、口径に対する器高の比率は24～26％、底径は60％台を示す。13・14は口縁部にススが付着しており、灯明皿として使用されている。

灯明皿

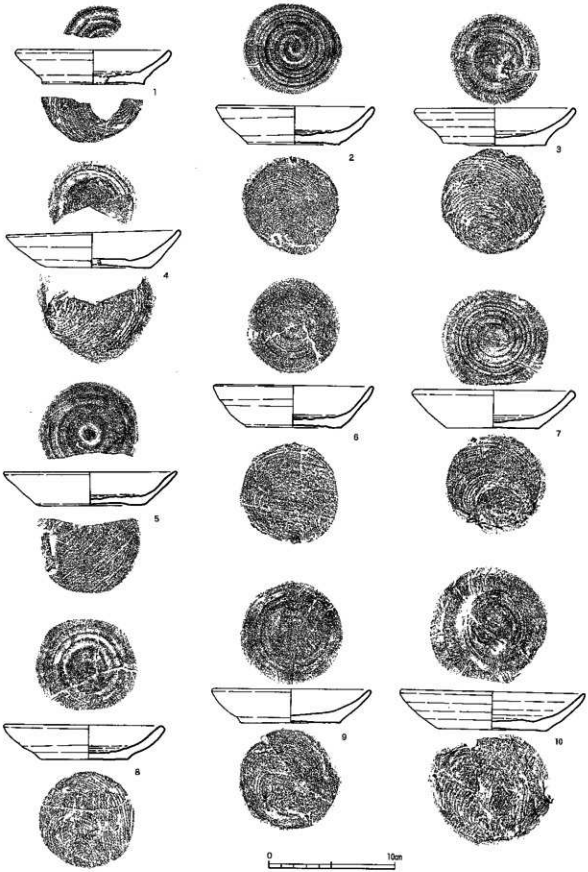
第93図15～30・第94～97図・第98図１～６はわずかに例外もあるが、口径が12～13㎝台の皿と坏である。小型の器種と同様、口径に対し、器高が低い、皿状の形態を示すものと、器高が高い坏状の形態を示すものがある。前者の代表は、口径に対する器高の比率が23％以下を示す第93



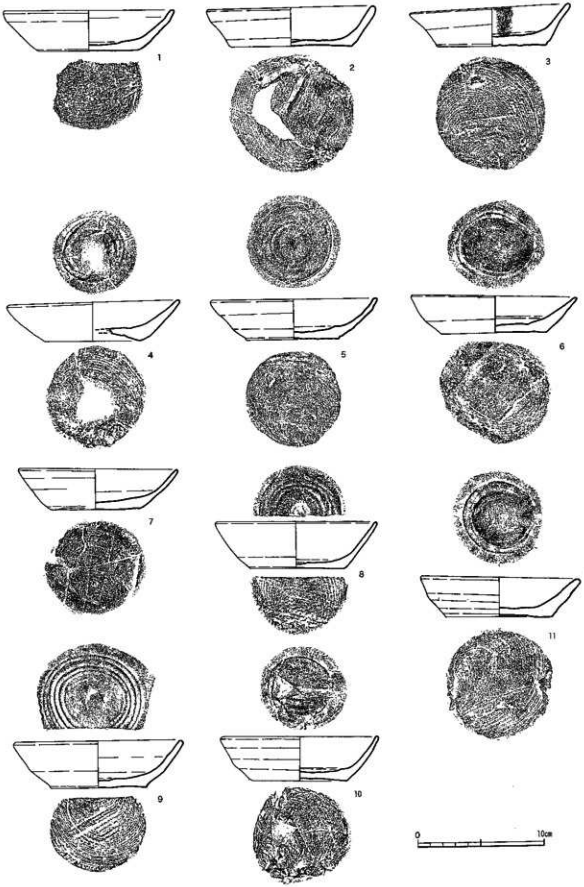
第93図　Ｂ地区Ⅱ　Ｃ－５石積遺構出土遺物実測図(2)



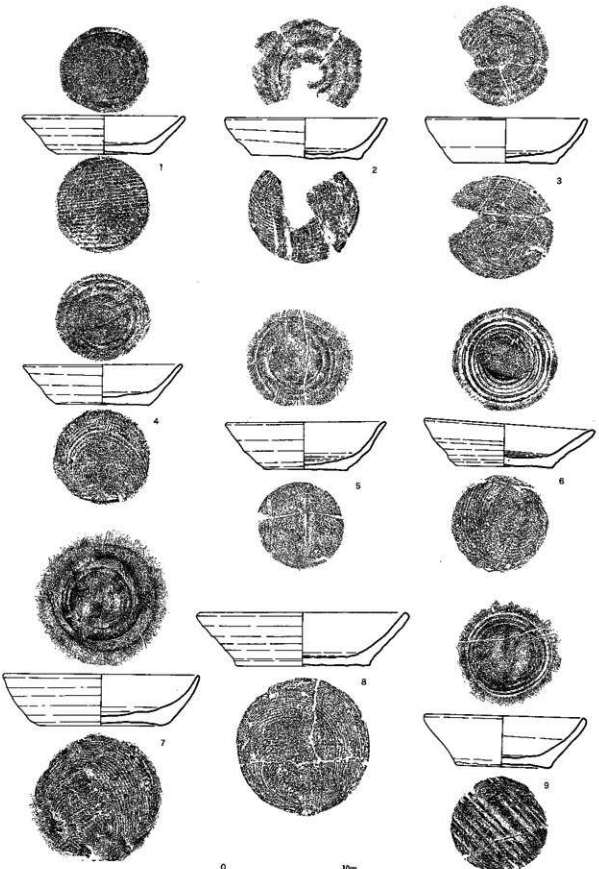
第94図　Ｂ地区Ⅱ　Ｃ－５石積遺構出土遺物実測図(3)



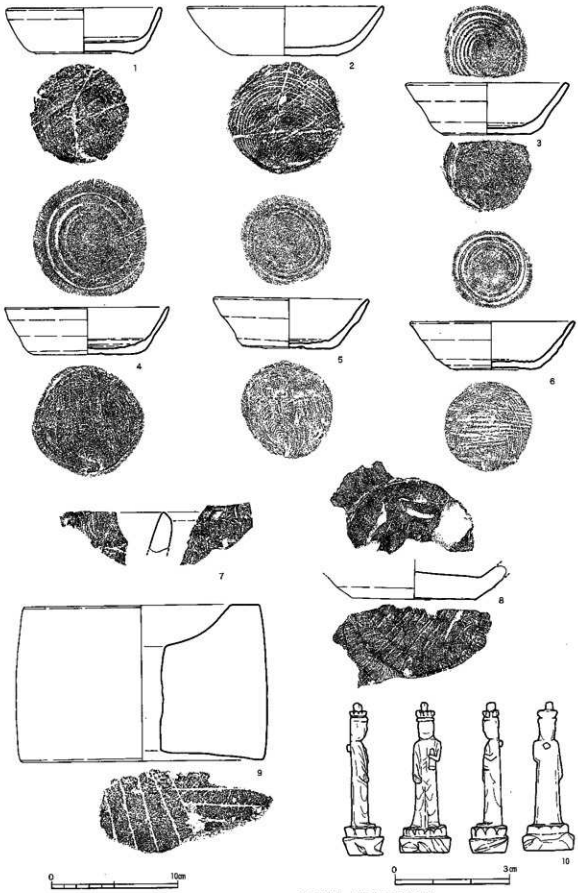
第95図　B地区Ⅱ　C－5石積遺構出土遺物実測図(4)



第96図　B地区Ⅱ　C－5石積遺構出土遺物実測図(5)



第97図　Ｂ地区Ⅱ　Ｃ－５石積遺構出土遺物実測図(6)



第98図　Ｂ地区Ⅱ　Ｃ－５石積遺構出土遺物実測図(7)

図15・17～19、第94図１～５・７・８、第95図１・４・５・８～10である。これらの底径の比率は60％台が多く、器種が大型のためか、口縁部を外側に引き出している。大きさは、第95図10が最大で、14.4㎝である。

後者で目立つものは、口径12～13㎝台に対して器高3.6～4.1㎝で、その比率が29％以上のものである。その代表は、第96図８、第97図５・９、第98図１・３・４で、これらは、口縁部を外側に開くため、底径の比率は、50％台が多い。

最も多く出土したのが、以上の両者以外の坏である。口径に対する器高の比率は、24～28％であるが、底径の比率は60％台が主体を占めるが、中には第97図５のように50％台もある。底部の形態は、外端部の口縁部との転換部を角張って仕上げるものと、丸みをおびるものがある。また、口縁部は直線的に外側に開くものと、内湾気味に立ち上がるものなど、器形に微妙な差異がある。

以上、土師質土器の大小の坏や皿の底部は、糸切り底であるが、さらに板状やスダレ状の圧痕が付いている例が目立つ。

滑石製石鍋　第98図７・８は滑石製の石鍋である。７は端部を尖るように成形した口縁部で、内外面に縦方向のノミによる加工痕が残る。８は底径9.9㎝の底部である。底面と胴部の境は稜を生じており、外面はノミによる短い単位の削りの跡が残るが、内面は平滑に仕上げられている。

凝灰岩製挽臼　９は硬質の凝灰岩製の挽臼で、上臼の破片である。法量は上面径が18.8㎝、底面径は19.4㎝で、除面が大きく縁み、直径3.8㎝の落し孔が穿かれている。

念持仏　10は青銅製の念持仏である。磐座の上に蓮華座があり、その上に花瓶を持つ十一面観音が立つ。

光背　背面は平坦で、突起があり、光背が付いていた可能性が強い。全高3.9㎝で、仏像部分は3.3㎝で一寸にあたる。重さは10.3ｇである。

貿易陶磁器　備前焼擂鉢　以上、石積み遺構・Ｃ－５区出土の遺物の時期は、第92図の貿易陶磁器に14世紀代が含まれるものの、第92図５の備前焼擂鉢は15世紀後半である。石積み遺構を覆う黒色土は、この時期以降、16世紀前葉に形成されたと考えられる。

(6)整地層

慈願山遺跡の発掘調査では、表土層下に、遺物を含む土層が形成されていた（第71図参照）。この層は、江戸時代以降の近世・近代の水田層下に形成されたもので、遺構検出面の上面にあたる。遺物包含層と同じ状況であるが、中世に建物建設や敷地の整備などの普請を行う際に形成されたと考え、この名称を用いた。

普請

出土遺物は、第99～107図に図示しているように、弥生時代から中世までの様々な遺物がある。

弥生土器

第99図1～5は弥生土器で、1・2は「く」の字に屈曲する甕形土器の口縁部である。屈曲部下位に断面三角形の突帯が巡る。3は器壁の厚い底部である。4・5は鉢又は坏の脚と考える。5は高坏の脚である。弥生土器の時期は、中期から後期前葉と考える。

立岩産石包丁

6～8は石包丁である。6は緑色片岩、7は輝緑凝灰岩の立岩産石包丁、8は頁岩製である。6・7には2ヶ所穿孔が認められる。9はサヌカイト製の石鏃で、重量は29.3ｇである。10～13は扁平打製石斧である。10・11・13は安山岩、完形品の12は緑色片岩を素材としている。

須恵器

第100図と第101図1～19は須恵器の資料である。第100図1～12は坏蓋で、1は宝珠形の摘み、2・3は口縁部に身受けが付く。他の口縁部は、端部が折れ、断面が三角形になっている。13～16は器高が低く、皿又は蓋であろうが、判断は困難である。

17～41は坏であるが、17・18の口縁部は蓋受けが付くが、他は直口、外傾する。また、底部は回転ヘラ削りで仕上げられ、30～41の底部には、断面四角形の高台が付く。

第101図1～11は口縁部が外反する甕である。口縁部外端部は肥厚、又は下方に突出し、横撫で仕上げられている。胴部は叩きで成形されており、9は内外面に格子目、11の胴部内面は同心円の叩き具が使用されている。

土師器

12～18は長頸壺の資料である。器面は撫で仕上げで、13～15は横方向の凹線文が巡る。19は上部の器種は不明であるが、脚である。脚端部の径は10.5㎝である。

第101図20～30、第102図は上師器の各器種である。第101図20は宝珠の摘みが付く蓋である。21～27は底部を手持ちヘラ削りされた坏である。28は口径23㎝、器高3.8㎝の盤状の形態で、外面に平行叩きの痕跡が認められる。29は胴部が屈曲し、口縁部が直立する坏である。30の高坏の脚は、脚中位で屈曲して広がる。外面には縦方向のヘラ削りで成形している。

第102図1～4は回転ヘラ切りで、切り離された底部の坏である。外面は横方向のヘラ磨きや撫でで成形している。1～3は坏状であるが、4は口径が大きく、器高が低いため、皿状の形態である。5～7は高台が付く坏である。これらも、器面をヘラ磨きや撫でで成形している。

8～19は甕形土器である。外面は縦方向の刷毛目、内面はヘラ削りで成形されている。断面を見ると、頸部から口縁部の器壁が厚く、胴部が薄い8・9・13・16～19と器壁の厚さがほぼ一定の10～12・14・15の2タイプがある。また、10・14は器高が低く、鉢形土器に近いが、11・12・15は長胴である。20・21は製塩土器である。20は内面、21は外面に布目が付着する。

製塩土器

第103図1は口径6㎝の白磁の坏である。全面に釉がかかるが、高台外面は露胎となっている。2は龍泉窯系の緑灰色の青磁椀である。畳付きから内側以外は施釉されている。3は口縁部が肥厚する焼締陶器の鉢であるが、内面は薄く施釉されている。4は花文の貼付がある陶器である。

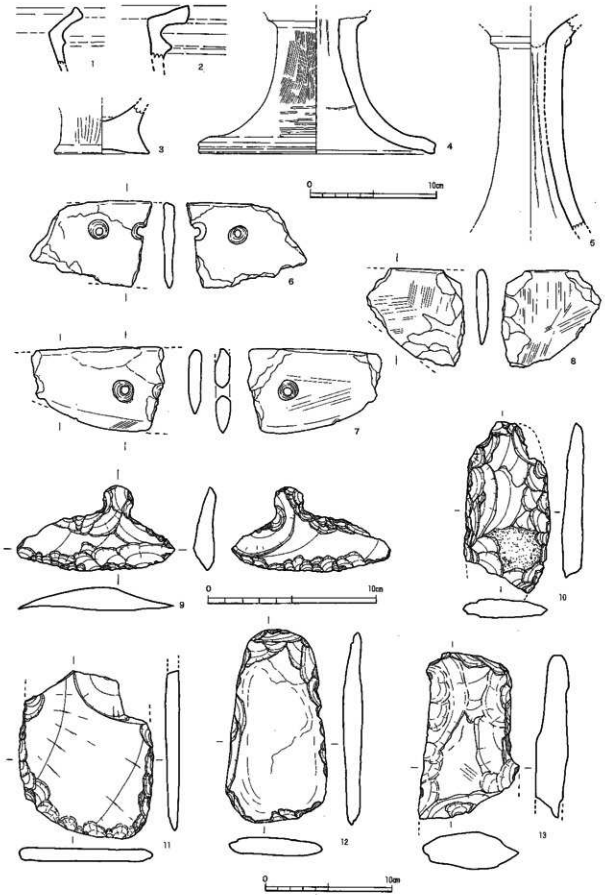
龍泉窯系青磁

5～8は瓦質土器である。5の内面は剥落しているが、外面には菊花文のスタンプが連続して押捺されている。口縁部は花輪状になる奈良火鉢である。6は口縁部外面に突帯が巡る瓦質土器の土鍋で、内面は刷毛目で成形している。7は口縁部が屈曲し、外傾する土鍋である。8は器壁が厚く、外面に突帯が2条巡り、突帯間に細い竹管を4本組合わせ、刺突したスタンプ文が連続して施文されている。

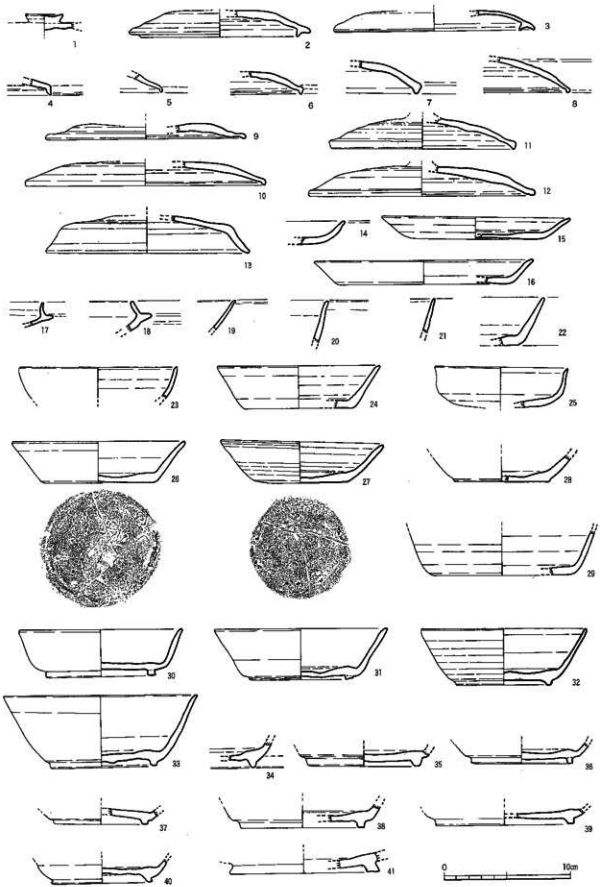
奈良火鉢

備前焼

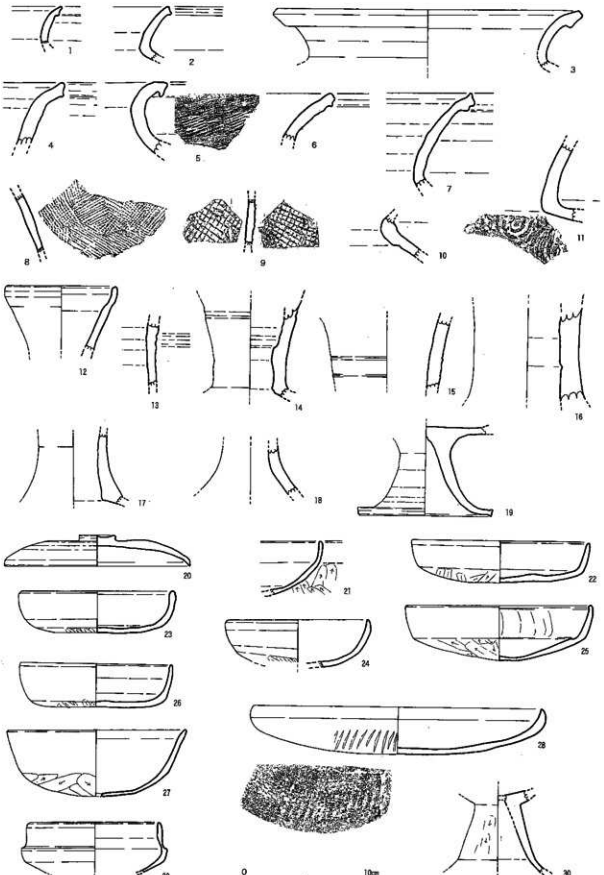
9・10は備前焼である。9は徳利の頸部で、10は壺の底部である。



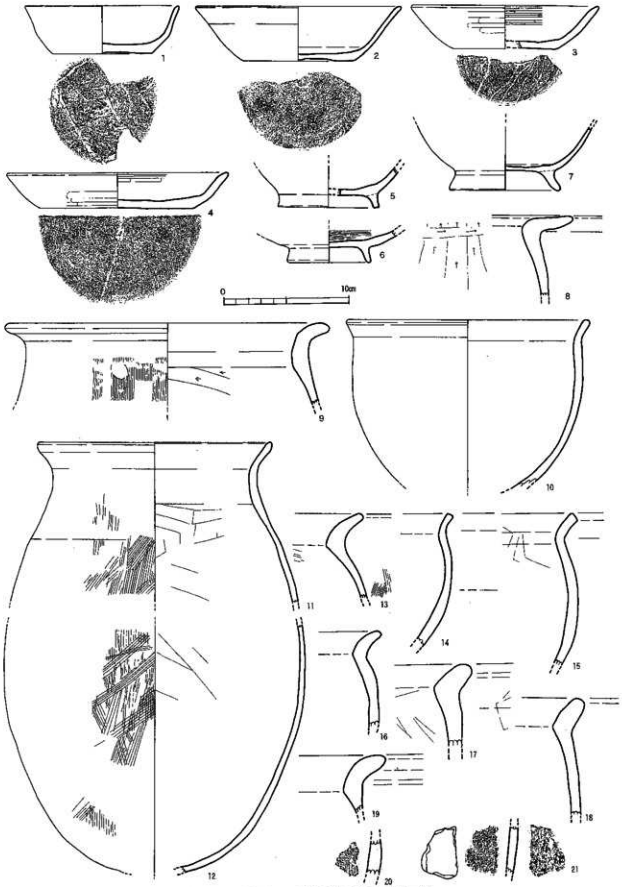
第99図　B地区Ⅱ　整地層出土遺物実測図(1)



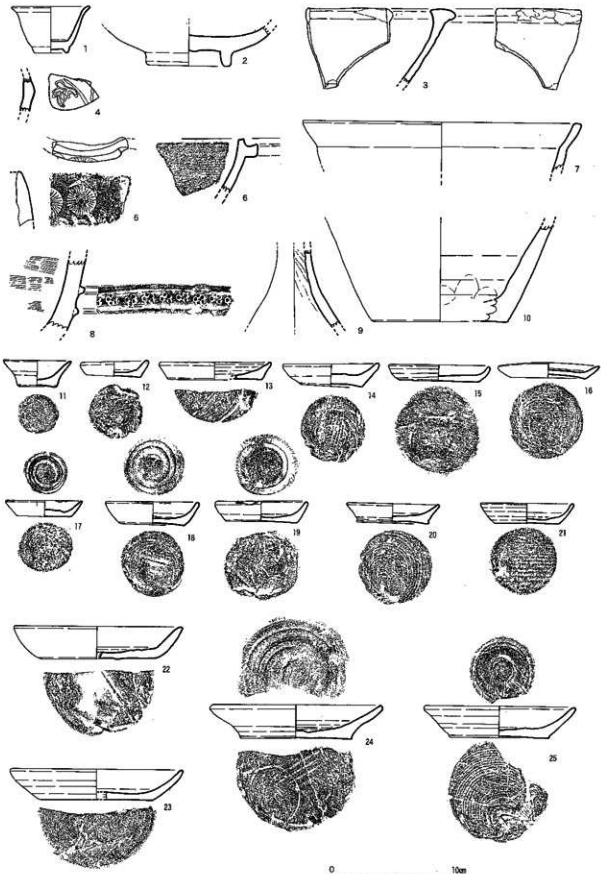
第100図　Ｂ地区Ⅱ　整地層出土遺物実測図(2)



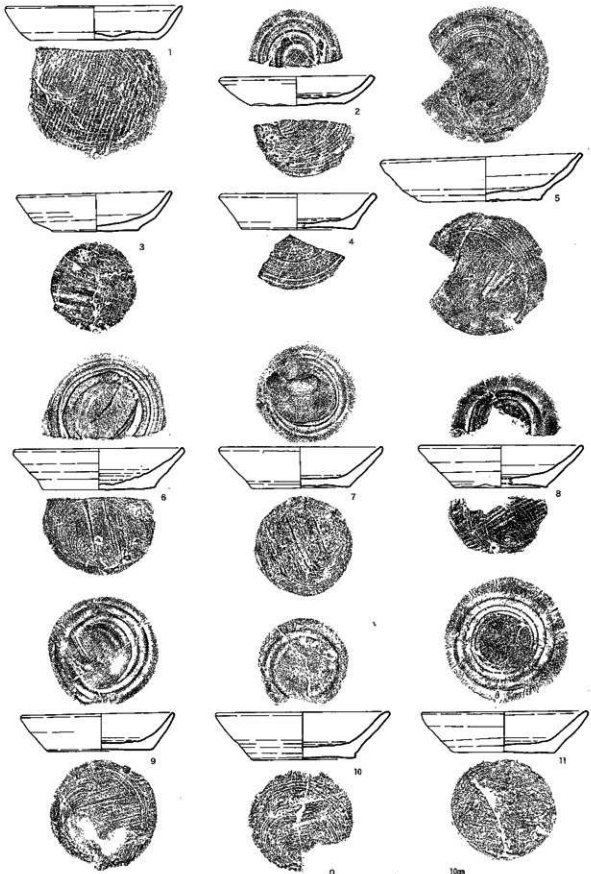
第101図　B地区Ⅱ　整地層出土遺物実測図(3)



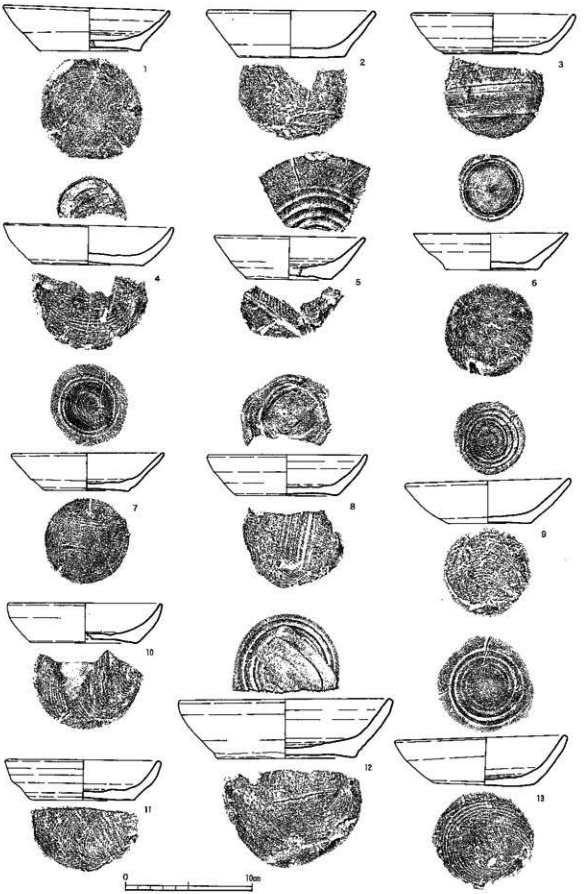
第102図　B地区Ⅱ　整地層出土遺物実測図(4)



第103図　Ｂ地区Ⅱ　整地層出土遺物実測図(5)



第104図　Ｂ地区Ⅱ　整地層出土遺物実測図(6)

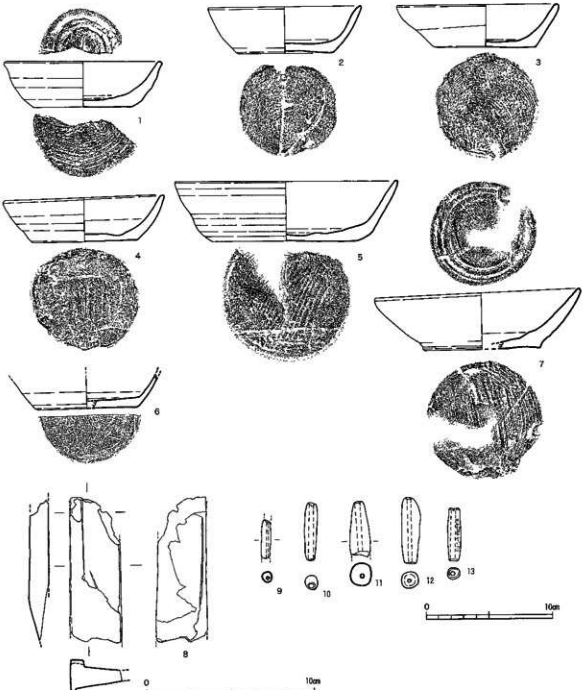


第105図　B地区Ⅱ　整地層出土遺物実測図(7)

土師質土器　第103図 11 ～ 25、第104・105図、第106図１～７は土師質上器の皿・坏の大小である。第103図 11 ～ 21 は口径が８㎝以下の小皿・小坏である。11 は特に器高が高いが、17 ～ 19 も他に比べると器高が高い。これら以外は、口径の割に器高が低く、皿状の形態である。

土師質土器で主体を占めるのは口径 11 ～ 13 ㎝台であるが、口径 16 ㎝以上のものも一定量含まれる。これらの土器にも、口径に対し、器高の比率が 24 %以下の皿状になるものと、 25 %以上の坏になるものがある。

赤間石の砥石　第106図８は赤間石の砥の資料である。両面に縁と陸が形成されているが、砥石に転用されており、使用のため薄くなっている。



第106図　Ｂ地区Ⅱ　整地層出土遺物実測図(8)

土錘　　９～13は紡錘形の土錘で、完形品の10は4.1ｇ、12は10.4ｇ、13は5.2ｇである。

銅銭　　第107図は銅銭であるが、１は北宋の1034年初鋳の「景祐元寶」である。２は北宋の1068年初鋳の「熙寧元寶」である。２点とも真書体である。３は判読不明で、４は半分欠け、「通寶」のみ判読できる。

⑺表土・表採

発掘調査は住宅地内であったため、排土置き場の確保が課題となった。そこで、調査区内を任意に幾つかのブロックに分け、重機で表土の切り返しを行いながら、表土除去を実施した。その際、整地層の一部を掘削したためか、表土として扱った土砂に混入して遺物が出土した。そうした遺物の中で、遺存状態が良好なものや、遺跡の成り立ちを示す中世以前の遺物を中心に第108・109図に図示した。

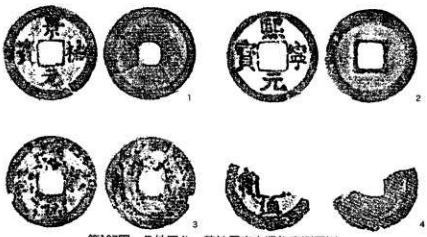
弥生土器　　第108図１～３は弥生土器で、「く」の字状に口縁部が屈曲する壺形土器である。胴部は刷毛目で、口縁部は横方向の撫でである。口縁端部は、肥厚し、３は跳ね上がり状になる。４は高坏の脚である。中期後半と考えられ、整地層出土の土器として報告した弥生土器や石包丁とほぼ、同じ時期である。

須恵器の甕　　５は大型の須恵器の甕で、外面が格子目、内面は平行叩きで器面調整している。６～８は土師器で、６は内外面ヘラ磨きで成形された資料で、蓋と考える。７は口径13.6cmの坏で、底部はヘラ切りで、その後、底部を含め、全面ヘラ磨きで成形している。８は鉢形で、口縁部は撫で、胴部は内面横方向、外面は上位が縦、下位が横方向の刷毛目で成形されている。色調は黒褐色である。

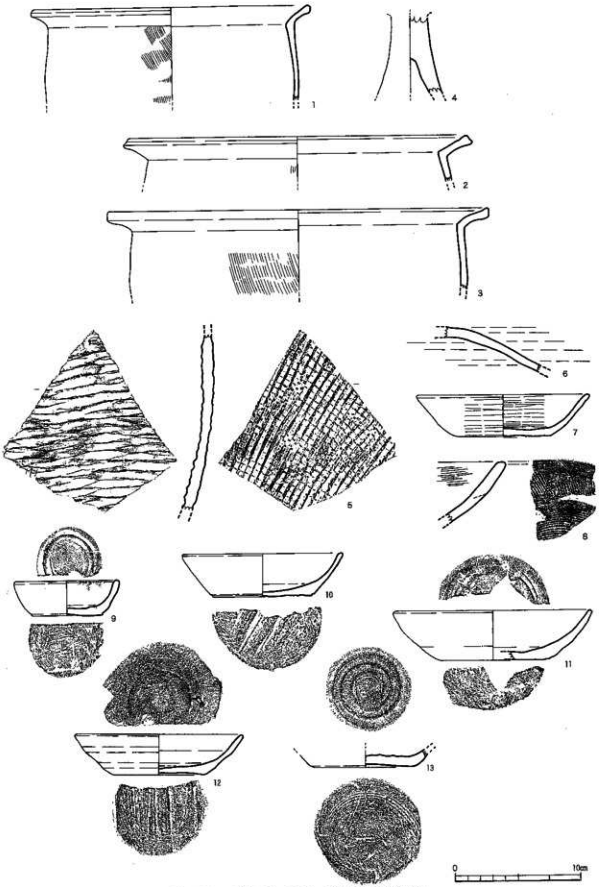
土師質土器　　第108図９～13、第109図１～３は、上師質土器の坏で、完形品や大型の破片を図化した。９の口径は8.2cmであるが、器高が高く、小坏状の形態である。内面にススが付着しており、灯明皿として使用されている。糸切り底の底部には、板状圧痕が残る。

第108図10～12、第109図１～３は第108図11を除くと、口径12～13cm台で、器高はいずれも３cmを越え、坏状の形態を示す。ただ、第108図11は口径が15.3cm、器高3.9cmの大型である。また、第108図12と第109図３は口径に対する器高の比率が24％で、皿状に近い形態である。さらに、口径に対する底径の比率は、第108図10、第109図２・３は60％以上で大きいが、他はそれ以下で、小さい底部から、口縁部が高く立ち上がる形態を示す。また口縁部の形態は、第108図10・11は内湾気味に立ち上り、口縁端部は第108図12、第109図３は肥厚し、第109図２は尖るように成形している。

器面は、底部以外は、回転を利用した横方向の撫でである。底部は糸切りで、図示した全ての上器に板目状の圧痕が付いている。



第107図　Ｂ地区Ⅱ　整地層出土遺物実測図(9)



第108図　Ｂ地区Ⅱ　表土・表採遺物実測図(1)

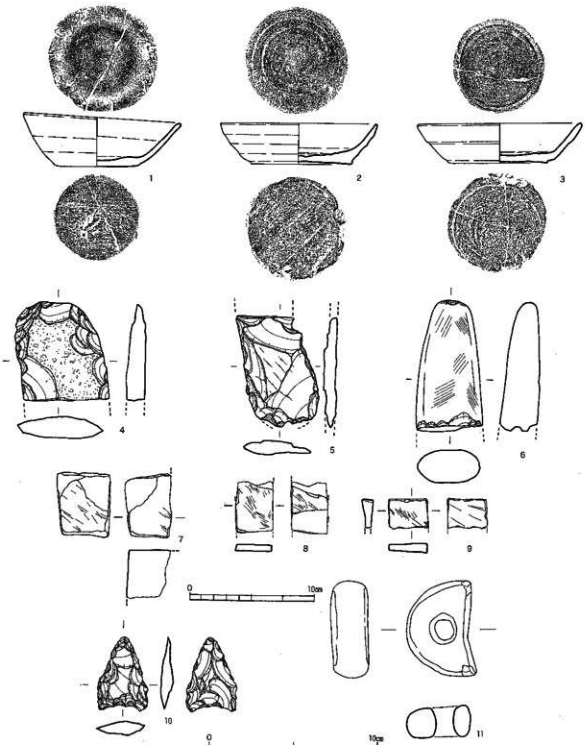
扁平打製石斧　第109図４・５は一部を欠くが、扁平打製石斧である。整地層からも同様な石器が出土しているが、石材は、４が安山岩、５は緑色片岩である。６は刃部を欠く磨製石斧で、緑色片岩製である。

磨製石斧

砥石　７～９は砥石の破片で、それぞれ、残されている両面に使用痕が観察できる。特に９の天草石を加工した砥石は、中央部が薄くなるほど使い込まれており、その部分で折れている。

打製石鏃　10はサヌカト製の打製石鏃で、両面加工しているが、図の断面の左側に図示した面には主要剥離面が残る。全長２㎝、重さ2.6ｇである。

銅製品　11は中央に孔が開く半円形の銅製品である。縦２㎝、横1.9㎝、厚さは0.9㎝で、重量は17.3ｇである。



第109図　Ｂ地区Ⅱ　表土・表採遺物実測図(2)

第4章　総　　括

平成２・３年度に実施した慈眼山遺跡の発掘調査では、縄文時代から中世に及ぶ多時期の遺物が出土した。しかし、検出された遺構は、古代と中世に限られており、この時期の慈眼山遺跡のある地区は、日田盆地の歴史の中で、重要な役割を果たしていたことが判った。そこで、以下この二つの時期についての発掘調査の成果を総括する。

第１節　古代の慈眼山遺跡

日田郡

大宝元年（701）の大宝律令制定とともに誕生したと云われる日田郡は、『豊後国風土記』に「郷は五所、里は一十四、駅は１所なり」と記され、郷名は「石井」・「駅編」の２郷のみ見える。残りの三郷については、10世紀に編纂された『倭名類聚抄』の記述に「在田」・「夜開」・「日理」・「父連」・「石井」とあり、「在田」・「夜開」・「日理」の名称が明らかにされている。

これらの郷名と現在地を特定する研究は進んであおり、日田郡成立以前の古墳時代、日田盆地とその周辺では、前方後円墳や横穴石室を持つ古墳群が小河川沿いの小平野ごとに５か所に分かれて点在する地域を継承すると考えられている。

石井郷

具体的には、「石井郷」は日田盆地南沿いを流れる三隈川以南を示し、現在も「石井町」の名称が残っている。

駅編郷

「駅編郷」は、むかし、日下部氏の先祖の邑阿自がヤマト政権に駅部として仕え、この地に住んだので「駅負」と地名が付き、「駅編」に改められたと云う。その地域は、『豊後国風土記』の記述から、盆地の東端、三隈川の北側にある現在の「刈速町（ゆきいまち）」周辺がその中心と想定されている。

亘理郷

「日理郷」は「亘理郷」の誤記と理解され、盆地北側を流れ、盆地西端で三隈川に合流する花月川以北の地域を示し、現在もこの地域は「渡里（わたり）」の地名が残っている。

在田郷

「在田郷」は日田盆地東北部を西流し、花月川に合流する有田川流域の平野が想定されている。そして、「夜開郷」は平盆地から西に約３km離れた場所を南流し、三隈川と合流する大肥川沿いの地域と想定され現在も「夜開」の地名が存在する[1]。

夜開郷

小迫辻原遺跡

こうした中、奈良時代関連する重要な遺跡が３ヶ所で調査されている。ひとつは慈眼山遺跡から北東に約２km離れた、盆地北側の標高約120mの台地上で調査された小迫辻原遺跡である。「亘理郷」と想定されるこの地域での、発掘調査の結果、８世紀代の掘立柱建物群が数棟検出されており、その配置は、南に開く「コ」の字状である。このような建物の配置は、官衙的である。律令制定下では、「郡」に「大領」・「小領」・「主帳」の３名の郡司が任命されており、日田郡も当然、配置されたものと考えられる。このことを裏付けるように、遺跡からは、「大領」と読むことができる墨書の須恵器片が出土しており、郡衙施設の可能性を示している。

大領

郡衙施設

また、慈眼山遺跡から南に約3.5kmの位置の「石井郷」に比定される地域で発掘調査された上野第１遺跡は、日田盆地の南部を東西に流れる三隈川の南側に形成された河岸段丘上に立地する。調査は1989年～1993年に実施され、８世紀代の掘立柱建物群や竪穴住居跡、連続土坑で基礎を固め構築された南北に直線的に延びる道路状遺構が検出されている。遺物では「豊馬豊馬」と刻書された分銅形石製品も出土している。この「石井郷」にあたる地域は、『延喜式』の豊後国の諸駅の中に「石井」の名称があり、古代駅伝制の石井駅が設置された場所の有力候補地となっている。

上野第１遺跡

豊馬豊馬

分銅形石製品

石井駅

大波羅遺跡

さらに、慈眼山遺跡の南側に接して立地する大波羅遺跡の発掘調査では、方形の掘方による大型の柱穴列や「山」と書かれた墨書土器が出土している。調査面積が小さいため、全容は不明であるが、一般的にこのような形態の柱穴は大型の建物が想定でき、官衙など公的な機関、あるいは地域の有力者の居館の可能性が強い。さらに墨書土器が出土していることや、日田の有力者であ

大型の建物

墨書土器

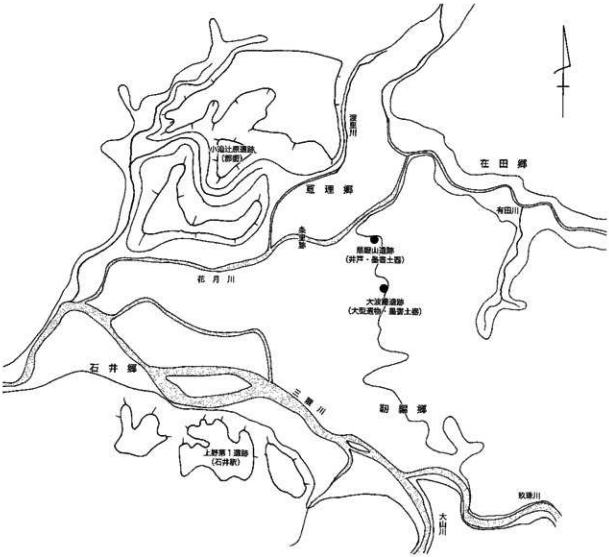
る日下部氏の「靭編郷」推定地の北部とも言えるこの地域でもあることから、その可能性をさらに高めているとともに、その拠点的範囲を考える資料となり得る。

こうした中で、慈眼山遺跡の古代の遺構を見ると、大波羅遺跡のような大型の建物遺構は確認できなかったが、内側が約三尺の規模で、構築された本格的な井桁組の井戸は、周辺に居住地があることを想定させる。さらに、「林」や「門」の墨書土器は、大波羅遺跡と同様、官人や地域の有力者の存在を推測することができる。

「林」「門」

そこで、日田盆地の五郷の中での慈眼山遺跡を位置づけると、北側は花月川を挟んで「亘理郷」があり、東北方向には丘陵地帯で区切られ「在田郷」がある。距離や地形的な障害を除けば、南側の「靭編郷」が最も近い。６世紀頃から11世紀に日田大蔵氏が台頭するまで、日田郡で勢力を保ち続ける日下部氏は、自郷を越え、亘理郷にある日田郡衙やそこに派遣された郡司等とも密接に関係していたことを推測することは容易である。距離的にも近い大波羅遺跡の大型建物や慈眼山遺跡の本格的な井桁組の井戸なども、日下部氏の関係を抜きには存在し得ないと考える。

日下部氏



第110図　日田五郷（夜明郷を除く）と古代の主要遺跡（１／50,000）

第2節　中世の慈眼山遺跡

1　遺構出土の土師質土器の時期

慈眼山遺跡に限らず、中世の遺跡から出土する遺物で、主体となるのは土師質土器の皿や坏で、あらゆる遺構から出土する。このため、遺跡や遺構の時期を決定するにはこの遺物の編年的位置付けは、重要である。小地域で地産地消されたと考えられる在地性の強い土師質土器の編年作業は、慈眼山遺跡のある大分県西部の日田・玖珠地方でも、1980年代から試みられている[2]。さらに、1991年から開発事業に伴う発掘調査が慈眼山遺跡とその周辺で相次ぐようになり、この地域を中心とした編年案が田中裕介[3]・行時志郎[4]により提案された。そうした案は2010年に渡邊隆行[5]によりまとめられ、13世紀後半から16世紀前半までをⅠ～Ⅵ期に分ける編年案を一括性の強い遺物を中心に提示している。ここでは渡邊の編年案を参照しながら、本書で報告した土師質土器の皿や坏の位置付けを行い、遺構の時期決定と土師質土器の変遷を考える。

田中裕介
行時志郎
渡邊隆行

慈眼山遺跡からは在地性の強い土師質土器は多量に出土するものの、それのみで実年代を想定することは困難である。そこで、日本列島内で広域に流通し、実年代との関連で編年研究が進行している遺物である備前焼や中国や朝鮮半島からの貿易陶磁器を手掛りに慈眼山遺跡B地区（1次・3次）から出土した遺物の時期的な特徴を見る。

国内で広域に流通する商品としての備前焼の擂鉢は、第27図2に図示したB地区1SD06出土の口縁部が未発達な形態のものから、B地区Ⅰの整地層出土の第28図8～13の次第に発達し、口縁部に帯状の立ち上がりを形成するものまである。これらは、乗岡実の編年案[6]を参照すると、14世紀末頃から16世紀前葉にあたる。また、第28図7に図示した口縁部が直立し端部が玉縁になる三耳壺も15世紀前半に位置づけられる。この他、14世紀代の奈良火鉢や東播系の須恵質土器のこね鉢などもわずかに出土している。

備前焼擂鉢
乗岡実

貿易陶磁器の主体となるのは、中国産では龍泉窯系青磁碗や皿のほか口禿の白磁皿で、わずかに磁竈窯系の鉢も認められる。また朝鮮王朝産では船徳利や目跡を残す皿がある。しかし、中国産を含め青花は全く含まれない。龍泉窯系碗は、小野正敏の編年案[7]では14世紀前半に位置づけられている外面に鎬連弁を持つものが目立つ。朝鮮王朝産の船徳利や目跡を残す皿は、博多で15世紀代から出土している。

龍泉窯系青磁碗
口禿の白磁皿
小野正敏
朝鮮王朝産

以上のことから、本書で報告する慈眼山遺跡B地区（1次・3次）の時期は、13世紀代の龍泉窯系青磁碗等も出土しているが、これらは、中国からもたらされた高級品であり威信財として伝世したものとも考えられる。このため消耗品である備前焼や朝鮮王朝産の雑器から考えると、最大で14世紀後半から16世紀前葉と想定することができる。

次に、遺構の切り合い関係を見ると、B地区Ⅱ（3次調査）では、SE13の井戸が古く、その上部に16世紀前葉を下限とする遺物を含む石積遺構が構築されている。さらに上師質土器の編年作業上、単純な様相を求めるため、製作から使用・廃棄まで短時間に終わったと想定される、一括廃棄された状態の出土状況を見せる遺構を見ると、B地区ⅡのSK10・12、SE11出土の土師質土器群がある。

以上の調査の状況に、豊後国の土師質土器の大まかな変遷である14世紀代は口径も底径も大きく、15世紀になると口径が小さくなり、15世紀末には底径はさらに縮小し、側面視が逆への字状になる傾向を考慮しながら、慈眼山遺跡B地区ⅡのSK10・12、SE11・13出土の土師質土器を編年したのが、第111図である。

まず、遺構の切り合い関係から見て、最古のグループに位置付けられるのが、第65図に図示したB地区ⅡSE13の出土の土師質土器である。数量は少ないが、3を除き、口径と底径の差が比較的小さく、大きな底部の印象を受ける。口径の平均は12.5cmで、底径も8.5cmあり、口径に対する

底径の比率は68％である。口縁部の形態は、底部近くが内湾気味に立ち上る。内底面の調整痕も回転を利用して指で撫でたような状況である。

上井手遺跡

渡邊の提示による15世紀前半の土器群は慈眼山遺跡の南に位置する上井手遺跡１号土坑と２号溝出土の土師質土器である[8]。これらの遺物も口径 12～13 cm台で、底径の比率は 65 %以上でとなり、大きな底部を持つ。また、１号土坑の口縁部は内湾気味に立ち上り、２号溝には乗岡編年[6]の 14世紀末から15世紀初頭にあたる備前焼の擂鉢が伴う。

乗岡編年

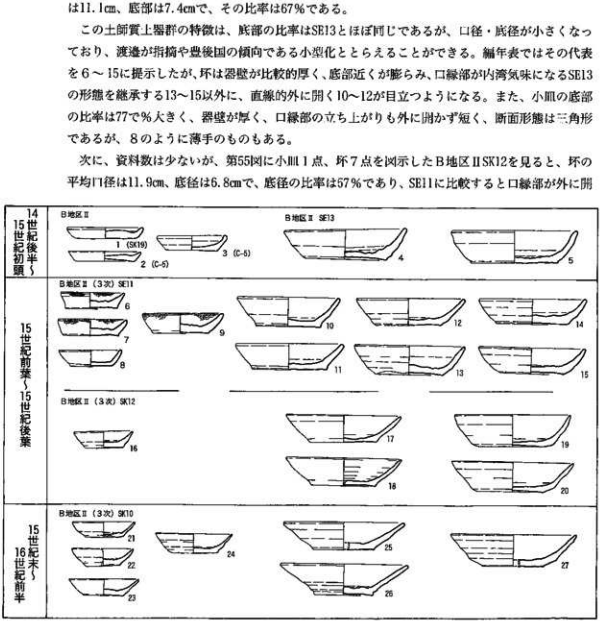
第111図の編年図では４・５をSE13の代表として提示しているが、これに伴う皿は明確ではない。ただ、形態的に SK19 の１、Ｃ－５の２・３を想定する。時期は、慈眼山遺跡から、15世紀以前の遺物である東播系のこね鉢が出土していることや、14世紀末に遡る備前焼の擂鉢があることから、14世紀後半から15世紀初頭を考える。渡邊編年のⅡ～Ⅲ期の一部と考える。

東播系こね鉢

この形態を継承するのが、第62・63図に図示したＢ地区ⅡSE11出土の土師質土器群である。これらは井戸埋設に伴い廃棄された一括性の強い遺物である。器種は小皿と坏で構成され、図示した小皿10点の平均口径は7.0cm、底径は5.4cmで、底径の比率は77％である。また、坏の平均口径は11.1cm、底部は7.4cmで、その比率は67％である。

この土師質土器群の特徴は、底部の比率はSE13とほぼ同じであるが、口径・底径が小さくなっており、渡邊が指摘や豊後国の傾向である小型化ととらえることができる。編年表ではその代表を６～15に提示したが、坏は器壁が比較的厚く、底部近くが膨らみ、口縁部が内湾気味になるSE13の形態を継承する13～15以外に、直線的外に開く10～12が目立つようになる。また、小皿の底部の比率は77で％大きく、器壁が厚く、口縁部の立ち上がりも外に開かず短く、断面形態は三角形であるが、８のように薄手のものもある。

次に、資料数は少ないが、第55図に小皿１点、坏７点を図示したＢ地区ⅡSK12を見ると、坏の平均口径は11.9cm、底径は6.8cm で、底径の比率は57％であり、SE11に比較すると口縁部が外に開



第111図　慈眼山遺跡Ｂ地区（103 次）調査出土土器編年図

くようになり、器壁も薄くなっている。小皿は1点のみであるが、口縁は開き端部が尖るように成形されている。その代表を編年図の16～20に提示した。16の小皿は次に編年するSK10出土の小皿に近く、坏も口縁部が内湾気味になるSE11の13～15の形態を継承する19・20を含むが、10～12の口縁部が外に開くタイプが17・18のように傾向がさらに強くなり、器壁も薄くなる。小皿同様、SK10の形態に近づいている。

SE13出土の土師質土器と最も異なる形態が、第52図に図示したB地区Ⅱ SK10出土の上器群である。この土坑から出土した土師質上器は、一括廃棄状態で出土したもので、小皿8点と坏14点を図示している。

小皿の平均口径は6.8㎝、底径は4.1㎝で、底径の比率は60％である。口縁部は器壁が薄く、端部が尖るように成形されている。また、坏14点の平均口径は12.3㎝で、SD13と大差はないが、底径平均は6.4㎝で小さく、底径の比率は52％で、坏の形態が大きく変化している。

編年表では21～27を代表させているが、坏の器形は小さい底部から、外側に逆への字状に大きく開き、口縁端部は尖るように仕上げている。また、全体的に器壁が薄く、底部との接合部は外側に膨らむも13～15・19～20の系譜をひく27もあるが、多くは25・26のように底部の外端部から外反気味に口縁部は広がるものが主体を占める。内面にロクロ目が残るものが多い。

以上のSE11、SK12・10のなかで、形態的に最も新しいと考えられるSK10の時期を推定する手がかりを中世大反府内町跡[6]に求める。この遺跡では15世紀後葉から16世紀前葉にかけて、内面にロクロ目が付く、底径が小さく口縁部が逆ハの字状に開く坏が主体を占める。この土師質土器とSK10の土師質土器群は類似しており、ほぼ同時期に広域で同じ変化を遂げたと想定するならば、この時期と考える。渡邊の指摘では、上ノ馬場遺跡（慈眼山遺跡4次）6号土坑から15世紀代と位置付けられている小野正敏編年[7]の染付椀B類の破片が、このタイプの土師質上器と一緒に出土している。また、慈眼山遺跡からは中国産の青花が全く出土しておらず、この遺物が大量に流通する16世紀中頃から後半のこの場所は、活発な活動の場所ではなかったと考えられる。こうしたことから、SK10の時期は15世紀末から16世紀前葉と位置づけ渡邊編年のⅤ・Ⅵと考える。

中世大友府内町跡

上ノ馬場遺跡

小野正敏編年

中国産の青花

次にSE11とSK12の時期であるが、土師質土器の形態が、先に位置づけたSE13とSK10の中間的なものと考え、その間の15世紀前葉から後葉と考える。この他、SK21・25、SD02からも6～9点の土師質土器がまとまって出土している。これらの平均口径は12.2～13.4㎝と大きいが、口縁部の形態は、内湾気味のものもあるが、SB13に比較すると外に開き、器壁も薄い傾向になっている。口径に対する底径の比率は59～64％であり、SE11・SK12同様、SK10との中間形態と考え、15世紀前葉から後葉に位置づける、渡邊編年のⅢの一部からⅣと考える。

２．中世の慈眼山遺跡の景観

中世の居館

慈眼山遺跡は出土遺物から、14世紀後葉から16世紀前葉までの約200年間継続的に営まれた中世の居館跡であることが判明した。しかし最盛期は15世紀代から16世紀前葉と考えられる。

そこで、近年の日田市教育委員会の発掘調査成果や、字図、中世山城の調査成果、周辺の寺社や文化財を元に、この時期の慈眼山遺跡の景観復元を試みる。

日田大蔵氏
日田荘

古代に「靭編郷」を中心に日田を支配していた日下部氏は中世になると衰退し、代わって11世紀以降、日田郡を支配するのが、盆地北部や有田川沿いの「亘理郷」・「在田郷」に拠点を持つ日田大蔵氏である[1]。日田大蔵氏は、地頭職を源頼朝から安堵され、御家人となり開発された領地は寄進され日田荘（金剛心院領）となった。日田盆地の北部勢力であった日田大蔵氏が日田郡を支配するためにも、前支配者の日下部氏の「靭編郷」に近く、日田盆地を一望できる花月川左岸の比高差約40mの慈眼山丘陵一帯に山城を築いたものと想定できる。

永興寺
日田神社
福田寺
大蔵永季
仏師康俊

その名残は、丘陵の西端部にある永興寺（ようこうじ）跡や日田神社などに残されている。永興寺は廃寺となった福田寺とともに延久３年（1071）に大蔵永季によって建立されたと伝えられ、現在そこには仏像の収蔵庫が建っており、そこには永興寺の仏像と想定される平安時代後期の木造兜跋毘沙門立像・木造毘沙門立像、文治３年（1187）銘の木造四天王立像、鎌倉期の木造十一面観音立像、元亨元年（1332）に奈良興福寺の仏師康俊作と刻む胎内銘のある木造四天王立像が他数体の仏像と一部寺院の跡が残されている。これらは、現在国指定重要文化財に指定されており、日田大蔵氏

第112図　慈眼山遺跡の字図集成

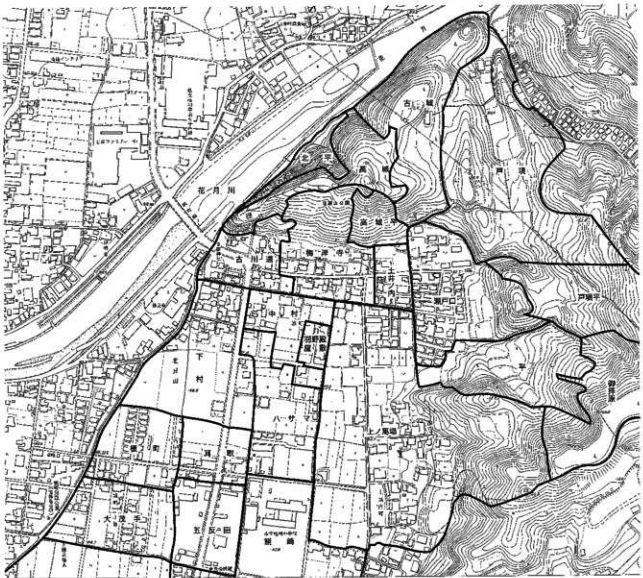
逆修塔　日山殿　大友姓日田氏　日田親将　大友義鑑　郡老

が隆盛を誇っていた頃を物語っている。さらに南側登り口にある逆修塔には貞和5年（1349）の銘が刻まれている。

また慈眼山永興寺の南麓にある日田神社は、この大蔵永季が祀られている。大蔵永季は、延久3年（1071）の宮中の相撲節会で優勝し、十度まで不敗であったと伝えられ「日田殿」と称せられている。

しかし、日田大蔵氏は文安元年（1444）に断絶し、大友姓日田氏に交替する。その大友姓日田氏も日田親将が大友義鑑の勘気を被り、16世紀前半に途絶える。以後日田郡の支配は戦国大名大友氏から指名された坂本・財津・羽野・石松・堤・高瀬と後に加わる佐藤・世戸口の8奉行の「郡老」にゆだねられた。

発掘調査をした範囲で確認された遺物や遺構は14世紀後葉から16世紀前葉であり、主体となるのは15世紀代である。すなわち、慈眼山遺跡は日田大蔵氏が断絶した後も、この地が政治的な拠点の一つとして大友姓日田氏やその側近に引き継がれ、日田親将で途絶える頃まで、機能していたと想定できる。



第113図　慈眼山遺跡の現在地図と字名

地籍図

次ぎにこの地域を明治 21 年の地籍図で表記したのが第112図で、考えて見る。地籍図の集成にあたっては、測量以降に分筆されたと考えられる部分は、可能な限り復元をおこなった。現地は、北側に標高 136.8 mの慈眼山丘陵があり、その丘陵は東側に南北方向に続き、囲まれるようにして標高約 85 mの平坦な低地が広がっている。

高城・古城

字名は、慈眼山丘陵の最高所を中心に「高城」名があり、その東側に接して「古城」名がある。

縄張り図

第114図の縄張り図のように、丘陵全体が曲輪等の区画で被われ、土塁や堀切・切岸などの施設

小柳和宏

が残されている。報告した小柳和宏は、「古城」の北端部にある主郭には内升状の虎口が構えられており、最終的な時期は 16 世紀後半まで下ると指摘している。[80]「高城」・「古城」の呼び方も築城や使用状況の時間差を示す可能性がある。

土井ノ内

日葡辞書

慈眼山丘陵の南側の麓には、東西約 50 m、南北約 100 mの長方形の区画に「土井ノ内」の地名が残されている。16 世紀に編纂された日葡辞書[81]によるとこの地名は、「土の障壁（土手）」「家を建てる場所。あるいは、地所」と説明されており、土手で囲まれた居住空間を意味し、通常は

瀬戸口

有力者の居館を意味する。この東側には「瀬戸口」名がある。示す範囲は広いが、「上井ノ内」の東北隅から裏山にあたる山城に続く堀割による通路があり、その入口部分を含む。「日葡辞書」

背戸口

には「背戸口」と記され「家の正面へ通じていない、隠れた入口」と説明されており、地理的状況と一致する。

梅岸寺

日田神社

永興寺

また、「土井ノ内」の西側には「梅岸寺」の名があり、名が示す通りなら居館に隣接する寺院の可能性が強い。さらにこの西側の「古川道」には日田大蔵氏と関連深い日田神社があり、その北側の丘陵上には先に述べた福田寺や永興寺があったと伝えられており、居館の西側は寺社区域の様相を示す。また、「七井ノ内」・「梅岸寺」・「古川道」の南側の字境は東西に直線方向に揃い、さながら山城とその麓の居館・寺社区域を区画するラインの様相を見せる。

このラインから南、「上ノ馬場」の西側は、条里地割りが施行されている。しかし、地籍図から見ると、水田的な地割を見せるのは、字名で「下村」の南半分、「耳取」・「五反田」・「榎町」・「大茂手」の南西部寄りの地域である。残りの「中村」・「ハサマ」・「熊崎」も大枠は条里区画と同じであるが、内側の区割りは細分化されており、その傾向は北寄りほど顕著である。また、「中村」

羽野殿屋敷

の中には東西約 40 m、南北約 70 mの長方形の「羽野殿屋敷」があり、この地域はかつて条里水田であったが、中世に町屋化したものと考える。なお羽野氏は大友姓日田氏が失脚後、日田郡を

郡老

治めた８人の「郡老」の一人で、拠点は日田盆地北部の「亘里郷」の羽野と考える。

町屋の道路については、この「羽野殿屋敷」の東側に接して、条里地割の東側の境と考えられる南北方向の直線ラインが延びている。またこのラインの東側の「上ノ馬場」にも条里地割りと

馬場

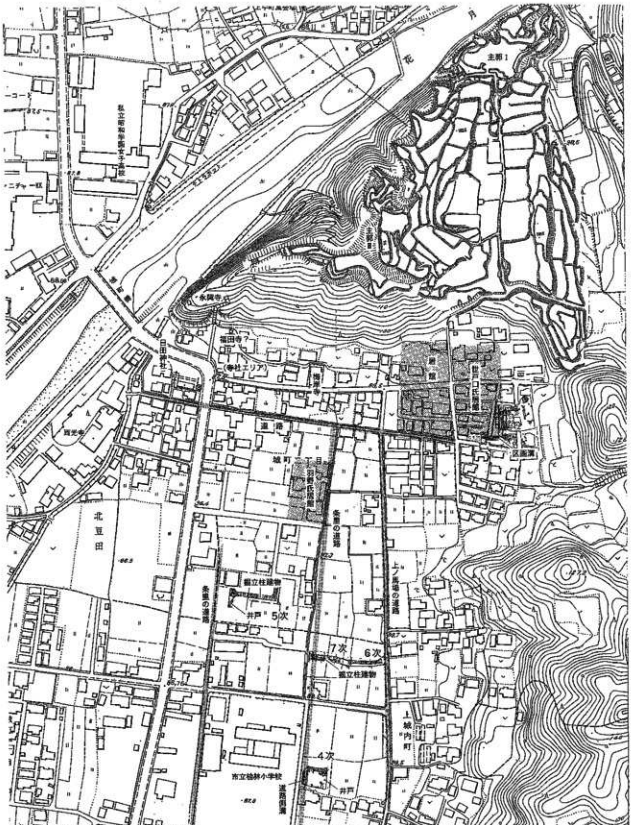
方位を異にする南北方向の直線ラインがある。日葡辞書には「馬場」を「馬を訓練し乗り回す走路、すなわち、長い道のようになっている場所」と説明しており、字図に表れ、現在は市道になっているこの南北方向の直線ラインをイメージすることが出来る。この二つの南北の直線ラインは、慈眼山麓の「土井ノ内」・「梅岸寺」・「古川道」の南側の東西方向ラインと三叉路になる。慈眼山に山城があった日田大蔵氏・大友姓日田氏の頃のこの地域の町屋の主要道路は、この三本のラインとさらに条里区画の道路が想定できる。

以上、中世の慈眼山遺跡を字図上で復元を試みたが、これに本書をはじめとする発掘調査の成果を加えると、１～３次調査は「瀬戸口」にあたり、１次調査の東西方向の大型の堀は、土井ノ内」・「梅岸寺」・「古川道」の南側の東西方向ラインの延長線上の東端となる可能性が強い。また、この東端は「土井ノ内」の東側のほぼ半町の区画であることから、隣接する別の居館の可能性も

世戸口氏

考えられ、その地名から、大友姓日田氏廃絶後、日田を治めた８人の「郡老」のうちの世戸口氏と関連する可能性が強い。

慈眼山遺跡４次（上ノ馬場遺跡）調査[4]は字名「上ノ馬場」の南西隅にあたり、西に「熊崎」に接する。注目されるのは、調査区の西隅で検出された平行する２条の溝である。この溝は、調査区の西側まである条里地割りの南北境に沿った状況で、先に「羽野殿屋敷」の西側を通る南北道



第114図　大蔵古城と城下町（慈眼山遺跡）復元想定図

道路側溝
石組井戸

路を想定した位置にあたる。３ｍの間隔で南北に続く２条の溝は道路側溝と理解することもできる。この他、多数の柱穴状土坑や石組井戸や溝が検出されており、道路に沿った町屋がこの位置まで広がっていたことが判る。

掘立柱建物

慈眼山遺跡５次調査[12]は、字名「ハサマ」の中央部にあたる。調査の結果、整地された上に、南北や東西方向に主軸を揃えた掘立柱建物や溝、石組の井戸が検出されている。さらに火災を受けた多量の土砂での再整地を行うなど大規模で計画的な事業が行われた跡を確認していると報告されている。本来低湿地であるため、町屋形成に埋め立てなどの整地作業は不可欠であったのだろ。

柱穴内礎石

慈眼山遺跡６[13]・７[14]次調査は、４次調査区の約 100 m北方で実施された。調査区は東西に細長く、狭い範囲であるが、東側を６次調査、西側を７次調査として報告されている。この位置は整地が繰り返され、東西方向に主軸を持つ柱穴内礎石の建物や、柱根の残る掘立柱建物などが多数検出されており、町屋の広がりを確認することができる。また、７次調査の西隅で南北方向の溝が検出されており、４次調査の２条の側溝と同じ方向であることから、道路側溝の可能性を持つ。

この他、桂林小学校のある字名「熊崎」でも調査がされており、同じように町屋の広がりを確認している。

以上のように、現時点での慈眼山遺跡の景観を復元すると、慈眼山丘陵に築かれた山城とその麓にある土塁で囲まれた居館を中心に、周辺に有力者の武家の屋敷や寺社を配置し、そのエリアと南側の町屋を区切るように東西方向の道や堀を設置し、北側の花月川や東側の山塊と合わせて防御装置としていると考える。南側は、武家地を混在した状況で町屋として整備し、南北方向に条里地割りを利用した道路と、その東の「上ノ馬場」に「馬場」を利用した南北道路の、少なくとも二本の主要道路を敷設したと想定できる。町屋部分は、埋め立てなどの整地を繰り返して、東西・南北方向に主軸を持つ柱穴内礎石建物や掘立柱建物、石組井戸などが造られている。その

城下町

範囲は少なくとも南北約 400 m、東西約 300 mに及ぶと考え、山城・居館を北に構えた城下町的な景観であったと想定する。

参考文献

日田市「日田市史」1990 年

日田市豆田地区振興協議会・日田市城町まちづくり実行委員会「シンポジウム 中世日田と大蔵氏」2009 年

註

(1)日田市「日田市史」1990 年
(2)欣珠町教育委員会「伐株山城跡」1984 年
(3)大分県教育委員会「慈眼山遺跡（Ａ地区）」大分県文化財調査報告第 85 輯　1991 年
(4)日田市教育委員会「上ノ馬場遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第 23 集　2000 年
(5)日田市教育委員会「慈眼山遺跡７次」日田市埋蔵文化財調査報告書第 95 集　2010 年
(6)乗岡　実「中世備前焼甕（壺）の編年案」・「備前焼捕鉢の編年案」（『第３回中近世備前焼研究会資料付第１回・第２回研究資料』所収　2000 年）
(7)小野正敏「15 ～ 16 世紀の染付椀、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№.2　貿易陶磁研究会　1982 年
(8)日田市教育委員会「上井手遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第 76 集　2007 年
(9)大分県埋蔵文化財センター「豊後府内　2」大分県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第２集　2005 年
(10)大分県教育委員会「大分の中世城館　第四集　総論編」大分県文化財調査報告書第 170 集　2004 年
(11)土井忠生・森田武・長南実編訳「邦訳日葡辞書」岩波書店　1980 年
(12)日田市教育委員会「慈眼山遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第 75 集　2007 年
(13)日田市教育委員会「慈眼山遺跡Ⅱ」日田市埋蔵文化財調査報告書第 84 集　2008 年

第1表　遺物観察表（土器・陶磁器①）

遺跡番号	遺物番号	遺構名	器種	器形	生産地	法量 (cm) ( ) は復元値 口径	底径	器高	備考
6	1	SK02	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	8.4	3.0	
	2	SK02	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	7.4	3.2	
	4	SK03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	7.4	3.4	
	5	SK04	製塩土器		国内				
	6	SK06	青白磁	碗	中国				
9	1	SD02	青磁	皿	龍泉窯		(5.4)		
	2	SD02	白磁	碗	中国		2.2		
	3	SD02	焼締陶器	鉢	中国				
	4	SD02	陶器	鉢胖	唐津焼		(9.3)		
10	1	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	11.7	6.9	3.4	
	2	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	11.8	6.7	3.5	
	3	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	7.3	3.3	
	4	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	(13.2)	(8.4)	3.6	
	5	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	(16.0)	(10.8)	3.3	
	6	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	(14.1)	(9.5)	3.3	
	7	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	13.6	6.2	4.3	
	8	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	(13.8)	(8.9)	3.1	
	9	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	14.9	7.9	4.6	
	10	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	(14.4)	(9.3)	3.7	
	11	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	8.2	3.5	
	12	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	8.4	3.6	
	13	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	(18.3)	(9.6)	5.0	
11	1	3区SD03	青磁	碗	龍泉窯	(16.6)			
	2	3区SD03	青磁	碗	龍泉窯				
	3	3区SD03	青磁	碗	龍泉窯		5.1		
	4	3区SD03	青磁	碗	龍泉窯		(5.0)		
	5	3区SD03	白磁	皿	中国		(3.8)		
	6	3区SD03	天目	碗	中国				
	7	3区SD03	陶器	皿	朝鮮王朝	(10.0)	4.8	2.9	目跡
	8	3区SD03	在地系土師質土器	皿	在地	(9.0)	(7.0)	1.3	
	9	3区SD03	在地系土師質土器	皿	在地	(8.5)	(6.6)	1.6	
	10	3区SD03	在地系土師質土器	皿	在地	(7.2)	4.8	1.5	
	11	3区SD03	在地系土師質土器	皿	在地	6.8	5.1	1.5	
	12	3区SD03	在地系土師質土器	皿	在地	(7.8)	(5.0)	1.6	
	13	3区SD03	在地系土師質土器	皿	在地	6.6	4.5	1.5	
	14	3区SD05	在地系土師質土器	皿	在地	6.8	4.5	1.6	
	15	3区SD03	在地系土師質土器	小坏	在地	6.9	4.5	1.9	
	16	3区SD03	在地系土師質土器	小坏	在地	(6.0)	(4.0)	1.5	灯明皿
	17	3区SD03	在地系土師質土器	小坏	在地	6.9	4.5	2.9	
	18	3区SD03	在地系土師質土器	小坏	在地	8.5	4.4	1.7	
	19	3区SD03	在地系土師質土器	小坏	在地	7.3	4.6	1.7	
	20	3区SD03	在地系土師質土器	小坏	在地	7.0	5.0	1.6	
	21	3区SD03	在地系土師質土器	小坏	在地	8.5	3.9	1.8	
	22	3区SD03	在地系土師質土器	小坏	在地	6.8	4.4	1.9	
	23	3区SD03	在地系土師質土器	小坏	在地	(6.0)	(4.0)	1.5	
	24	3区SD03	在地系土師質土器	小坏	在地	6.8	4.8	1.5	
	25	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(10.2)	(7.2)	2.6	
	26	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(9.8)	6.8	2.9	
	27	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	9.3	3.5	
12	1	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	(6.6)	2.8	
	2	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.6)	(6.0)	3.3	
	3	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.7)	(6.6)	3.0	
	4	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.3	5.6	2.7	
	5	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.4	6.4	1.8	
	6	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.0	6.4	2.8	
	7	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.3	6.2	3.1	
	8	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.2	6.5	3.2	
	9	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.5	6.8	2.8	
	10	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	7.8	3.0	
	11	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(13.8)	7.6	3.3	
	12	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.6	7.5	2.6	
	13	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	7.0	3.1	
	14	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	6.6	2.9	
	15	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	6.6	2.8	
	16	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.8	6.2	2.9	
	17	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	10.8	6.3	3.0	
	18	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	7.0	3.0	
14	1	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.4	6.5	3.0	
	2	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	6.4	3.2	
	3	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.5)	6.9	3.2	
	4	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	6.2	3.2	
	5	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.9	6.3	2.8	
	6	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.6	6.8	3.0	
	7	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	6.5	3.2	
	8	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.8	6.6	3.1	

第2表　遺物観察表（土器・陶磁器②）

挿図番号	遺物番号	遺構名	種類	器形	生産地	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	備考
14	9	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	6.8	3.0	
	10	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.3	7.0	3.0	
	11	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	5.1	3.0	
	12	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(15.8)	8.2	3.1	
	13	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	13.3	8.8	2.8	
	14	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.4	7.5	2.4	
	15	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.4)	6.5	2.9	
15	1	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	(7.2)	3.2	
	2	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(10.8)	(5.5)	2.9	
	3	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	5.4	3.2	
	4	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	6.6	3.1	
	5	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.5)	6.8	2.9	
	6	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.9	7.0	2.9	
	7	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.1	6.2	3.1	
	8	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.5	6.3	2.9	
	9	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	7.0	2.8	
	10	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	6.6	3.4	
	11	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	7.0	3.2	
	12	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.3)	6.6	3.0	瑞鳳に転用
	13	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.7	6.2	3.3	
16	1	3区SD03	瑞鳳		国内	(5.0)		2.5	
	2	3区SD03	在地系土師質土器	坏	在地				瑞鳳に転用
17	1	SD03	青磁	碗	龍泉窯	(16.4)			
	2	SD03	青磁	碗	龍泉窯		(5.3)		
	3	SD03	白磁	皿	中国	(9.2)	6.6	1.8	ロハゲ
	4	SD03	陶器	鉢徳利	朝鮮王朝				
	5	SD03	陶器	鉢徳利	朝鮮王朝	(13.5)			
	6	SD03	陶器	鉢	唐柄焼				
	7	SD03	陶器	鉢	備前焼				
	8	SD03	陶器	擂鉢	備前焼				
	9	SD03	瓦質土器	鍋	国内	(21.8)			
	10	SD03	瓦質土器	火鉢	国内				菊花文
	11	SD03	瓦質土器	火鉢	国内				
	12	SD03	瓦質土器	壺	国内				
	13	SD03	瓦質土器	火鉢	国内				脚部
	14	SD03	瓦質土器	火鉢	国内				脚部
	15	SD03	糸切り土師器	坏	国内		8.8		
18	1	SD03	在地系土師質土器	皿	在地	7.1	5.2	1.6	
	2	SD03	在地系土師質土器	皿	在地	(7.2)	(5.4)	1.9	
	3	SD03	在地系土師質土器	皿	在地	7.2	5.5	1.5	
	4	SD03	在地系土師質土器	皿	在地	7.2	4.0	1.8	
	5	SD03	在地系土師質土器	皿	在地	7.4	5.8	1.5	灯明皿
	6	SD03	在地系土師質土器	小坏	在地	(6.6)	4.3	1.7	
	7	SD03	在地系土師質土器	小坏	在地	(7.8)	5.5	1.9	
	8	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.2)	5.8	2.8	
	9	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	(6.2)	1.9	
	10	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(10.9)	(7.0)	2.6	
	11	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.0)	(7.2)	2.4	
	12	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.4)	5.9	3.0	
	13	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.6	7.0	2.7	
	14	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	8.3	2.5	
	15	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.1)	(7.5)	3.0	
	16	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(13.6)	(8.4)	3.2	
	17	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	8.0	2.8	
19	1	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(13.2)	(9.5)	3.0	
	2	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	(8.2)	2.6	
	3	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.5)	7.5	2.4	
	4	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	7.9	2.9	
	5	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	8.8	2.6	
	6	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.9	7.6	2.5	
	7	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.8	8.9	1.8	
	8	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.3)	8.3	2.3	
	9	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.4	8.0	2.3	
	10	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	8.7	2.2	
	11	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.7	7.8	2.6	
20	1	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.3	7.9	2.8	
	2	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.9	8.0	2.7	
	3	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.9	8.4	2.7	
	4	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	8.0	2.4	
	5	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	13.6	8.2	3.5	
	6	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	13.4	8.0	3.0	
	7	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	7.5	2.6	
	8	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.9	7.6	2.7	
	9	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	8.4	2.6	
21	1	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	7.8	2.5	

第3表　遺物観察表（土器・陶磁器③）

地区番号	遺物番号	遺構名	種類	器形	生産地	法量 (cm) ( ) は復元値 口径	底径	器高	備考
21	2	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(10.9)	(7.2)	2.4	
	3	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.0)	7.0	2.9	
	4	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.2)	(7.4)	2.8	
	5	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.6	8.0	2.9	
	6	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	8.8	2.9	
	7	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	(8.7)	2.5	
	8	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.7)	9.0	3.1	
	9	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	(7.6)	2.8	
	10	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.6	7.7	2.9	
	11	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.0)	(7.8)	2.2	
	12	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	8.0	2.1	
	13	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	9.1	2.7	
	14	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	8.0	2.4	
	15	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	8.4	2.5	
22	1	SD03	在地系土師質土器	皿	在地	(6.5)	4.8	1.4	
	2	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	6.1	2.6	
	3	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.1	6.0	3.1	
	4	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	7.0	3.4	
	5	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.9	7.0	3.2	
	6	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	13.1	9.8	2.7	
	7	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.5	6.0	2.9	
	8	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.1	7.0	3.1	
	9	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	6.0	3.1	
	10	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.9)	7.1	3.6	
	11	SD03	瓦質土器	鉢	国内				
23	1	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.7	6.5	3.4	
	2	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	6.7	3.1	
	3	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.5)	6.6	3.3	
	4	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(11.5)	6.0	3.2	
	5	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.7)	(8.8)	2.9	
	6	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	7.0	3.7	
	7	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.3	6.1	3.3	
	8	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.7	6.8	3.2	
	9	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	13.7	9.6	3.5	
	10	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	6.1	3.0	
	11	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	12.6	6.9	2.7	
	12	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	11.8	7.0	3.3～2.4	
	13	SD03	在地系土師質土器	坏	在地				混淆に転用
24	1	SD04	在地系土師質土器	小坏	在地	6.5	4.5	1.7	
	2	SD04	在地系土師質土器	小坏	在地	6.8	4.3	1.7	
	3	SD04	在地系土師質土器	小坏	在地	7.1	4.9	1.9	
	4	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	11.8	6.9	3.2	
	5	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	(10.4)	6.5	3.6	
	6	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	(11.9)	(6.2)	3.2	
	7	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	(11.6)	6.0	2.7	混淆に転用
	8	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	(11.9)	6.8	3.0	
	9	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	7.0	3.2	
	10	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	12.3	6.6	3.0	
	11	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	13.2	6.5	3.0	
	12	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	(13.1)	7.0	3.5	
	13	SD04	瓦質土器	坏	国内	20.7	11.4	5.5	
25	1	SD05	在地系土師質土器	皿	在地	7.0	4.4	1.7	
	2	SD04	在地系土師質土器	小坏	在地	5.7	4.2	1.9	
	3	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	8.5	2.4	
	4	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	12.1	8.6	2.4	
	5	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	(12.0)	(8.0)	2.4	
	6	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	(14.3)	(9.3)	3.7	
	7	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	13.4	7.5	4.0	
	8	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	(7.4)	3.4	
	9	SD04	在地系土師質土器	坏	在地	10.1	7.1	2.6	
26	1	SD06	白磁	皿	中国	(12.0)	(6.0)	3.0	
	2	SD06	陶器	擂鉢	備前焼				
	3	SD06	陶器	擂鉢	備前焼				
	4	SD06	陶器	擂鉢	備前焼				
	5	SD06	在地系土師質土器	坏	在地	(12.1)	(8.0)	3.0	
	6	SD06	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	8.0	3.2	
	7	SD06	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	(8.0)		
	8	SD06	在地系土師質土器	坏	在地	(12.0)	(6.6)	3.0	
27	1	SD07	在地系土師質土器	坏	在地	(11.3)	(6.0)	3.2	
	2	SD07	在地系土師質土器	坏	在地	(12.7)	6.2	3.1	
28	1	製地層	青磁	碗	龍泉窯				混淆弁
	2	製地層	青磁	碗	龍泉窯		(4.4)		
	3	製地層	青磁	碗	龍泉窯		(7.5)		
	4	製地層	青磁	碗	龍泉窯		(6.2)		
	5	製地層	青磁	小皿	龍泉窯	(7.0)			

第4表　遺物観察表（土器・陶磁器④）

挿図番号	遺物番号	遺構名	種類	器形	生産地	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	備考
28	6	製地層	陶器	鉢	瀬戸・美濃				
	7	製地層	陶器	三耳壺	備前焼	(11.6)			
	8	製地層	陶器	擂鉢	備前焼				
	9	製地層	陶器	擂鉢	備前焼				
	10	製地層	陶器	擂鉢	備前焼				
	11	製地層	陶器	擂鉢	備前焼				
	12	製地層	陶器	擂鉢	備前焼				
	13	製地層	陶器	擂鉢	備前焼				
	14	製地層	瓦質土器	鉢	国内				
	15	製地層	瓦質土器	鉢	国内				
	16	製地層	瓦質土器	鉢	国内				
	17	製地層	瓦質土器	鉢	国内				
	18	製地層	瓦質土器	鉢	国内				
	19	製地層	瓦質土器	鉢	国内				
	20	製地層	瓦質土器	鍋	国内				
29	1	製地層	在地系土師質土器	小坏	在地	(7.0)	(4.5)	2.2	
	2	製地層	在地系土師質土器	小坏	在地	6.5	3.8	1.5	
	3	製地層	在地系土師質土器	小坏	在地	(6.3)	(4.2)	1.8	灯明皿
	4	製地層	在地系土師質土器	皿	在地	(6.8)	(5.6)	2.0	
	5	製地層	在地系土師質土器	皿	在地	8.0	6.4	1.7	
	6	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(11.6)	(8.0)	2.2	
	7	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(13.4)	(9.4)	2.9	
	8	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(13.2)	(8.8)	2.3	
	9	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(12.0)	(8.8)	2.3	
	10	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	8.7	2.5	
	11	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	8.2	2.6	
	12	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	8.4	2.4	
	13	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	(8.0)	3.2	
	14	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	(9.2)	2.8	
30	1	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	11.4	7.3	2.6	
	2	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(11.6)	(8.0)	2.5	
	3	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	11.8	7.6	3.0	
	4	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(12.0)	7.5	2.9	
	5	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	11.9	8.7	2.7	
	6	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(12.5)	8.5	2.7	
	7	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	12.6	8.4	3.4	
	8	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	(6.0)	3.1	
	9	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	11.8	6.5	3.5	
	10	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	7.4	3.1	
31	1	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(10.4)	6.8	2.9	
	2	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	(7.6)	4.1	
	3	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(11.2)	6.8	3.2	
	4	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	6.2	3.2	
	5	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	(6.0)	3.1	
	6	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(14.5)	10.0	3.4	
	7	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(11.6)	7.6	3.2	
	8	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	16.0	9.7	4.1	
	9	製地層	在地系土師質土器	坏	在地		7.2		
	10	製地層	在地系土師質土器	坏	在地		(10.0)		
32	1	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	9.9	6.8	1.8	
	2	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(12.0)	(8.0)	2.4	
	3	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	12.3	8.1	2.9	
	4	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	11.6	7.7	2.7	
	5	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(13.4)	(7.4)	2.9	
	6	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	8.0	2.8	
	7	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(11.6)	6.6	2.9	
	8	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(11.6)	(8.4)	2.7	
	9	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(10.9)	(6.6)	3.2	
	10	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	8.9	3.0	
	11	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(11.6)	(7.6)	3.2	
	12	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	(7.6)		
	13	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	7.4	2.8	
	14	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(11.4)	(7.0)	3.2	
	15	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	11.0	6.6	2.5	
	16	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	12.3	7.6	3.4	
	17	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	(9.2)	2.3	
	18	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	11.9	6.8	3.2	
33	1	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	7.8	3.0	
	2	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	8.7	2.9	
	3	製地層	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	(6.4)	3.2	
	4	製地層	土師質土器	坩堝	国内	(5.2)		(3.0)	
	5	製地層	土師質土器	坩堝	国内	(5.0)			
35	1	混入遺物	縄文土器	壺	在地				縄B式
	2	混入遺物	縄文土器	壺	在地				縄B式
	3	混入遺物	縄文土器	壺	在地	(23.2)			縄B式

第5表　遺物観察表（土器・陶磁器(5)）

掃除区番号	遺物番号	遺構名	種類	器形	生産地	法量(cm) ( )は復元値 口径	底径	器高	備考
35	4	表土・表採	須恵質土器	鉢	常滑系				
	3	表土・表採	青磁	椀	龍泉窯	(15.0)			鎬蓮弁
	6	表土・表採	青磁	椀	龍泉窯	(16.0)			
	7	表土・表採	青磁	椀	龍泉窯				
	8	表土・表採	白磁	椀	中国		(4.8)		
	9	表土・表採	白磁	合子	中国	(6.0)			
	10	表土・表採	瓦質土器	擂鉢	国内	(21.0)			
	11	表土・表採	瓦質土器	火鉢	国内				
	12	表土・表採	瓦質土器	火鉢	国内				
	13	表土・表採	瓦質土器	釜	国内	(17.8)			
	14	表土・表採	瓦質土器	火鉢	国内				
	15	表土・表採	瓦質土器	火鉢	国内		(31.9)		脚部
36	1	表土・表採	在地系土師質土器	小坏	在地	(6.4)	(4.0)	1.7	
	2	表土・表採	在地系土師質土器	小坏	在地	(6.8)	4.5	1.6	
	3	表土・表採	在地系土師質土器	坏	在地	(12.0)	(7.6)	2.5	
	4	表土・表採	在地系土師質土器	坏	在地	10.2	6.6	2.7	
	5	表土・表採	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	8.0	2.6	
	6	表土・表採	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	8.8	2.8	
	7	表土・表採	在地系土師質土器	坏	在地	13.4	8.4	3.4	
	8	表土・表採	在地系土師質土器	坏	在地	12.7	9.0	3.6	
	9	表土・表採	在地系土師質土器	坏	在地	10.6	7.0	1.9	
	10	表土・表採	在地系土師質土器	坏	在地	(13.1)	8.5	2.6	
	11	表土・表採	在地系土師質土器	坏	在地	(11.0)	7.4	3.6	
	12	表土・表採	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	6.8	3.0	
	13	表土・表採	在地系土師質土器	坏	在地	(11.6)	(7.0)	2.7	
	14	表土・表採	在地系土師質土器	坏	在地	12.7	5.6	3.2	
	18	表土・表採	在地系土師質土器	坏	在地				掛塩に転用
39	1	SK25	須恵器	蓋	国内				つまみ部分
	2	SK23	須恵器	坏	国内	(12.6)	8.8	3.5	高台付
	3	SK23	須恵器	坏	国内	12.8	9.5	4.2	高台付
	4	SK25	須恵器	身	国内	(15.8)			
	5	SK23	須恵器	坏	国内		(8.3)		高台付
	6	SK23	土師器	甕	国内				
	7	SK23	土師器	甕	国内	(19.6)			
	8	SK23	須恵器	甕	国内	(22.0)			
42	1	井戸枠内	須恵器	蓋	国内	(14.5)			
	2	井戸枠内	土師器	坏	国内	(7.2)		2.4	
	3	井戸枠内	土師器	坏	国内	7.5	5.3	2.0	灯明皿
	4	井戸枠内	土師器	坏	国内	11.9	7.6	3.8	
	5	井戸枠内	土師器	坏	国内	(12.8)		3.0	
	6	井戸枠内	須恵器	坏	国内		6.9		
	7	井戸枠内	土師器	坏	国内	(15.8)			
	8	井戸枠内	須恵器	蓋	国内		(9.5)		
	9	井戸　埋土	須恵器	蓋	国内	(15.0)		2.1	
	10	井戸　埋土	須恵器	蓋	国内	(12.4)	(10.2)	3.4	
	11	井戸　埋土	須恵器	蓋	国内	(15.4)			
	12	井戸　調査	須恵器	蓋	国内	15.9		2.8	
	13	井戸　埋土	須恵器	蓋	国内	(16.8)			
	14	井戸　埋土	須恵器	蓋	国内	(25.0)			
	15	井戸　埋土	須恵器	蓋	国内	(25.0)		1.9	
	16	井戸　埋土	須恵器	蓋	国内	(18.2)			
	17	井戸　埋土	須恵器	坏	国内	(16.9)	(13.6)	2.6	墨書「門」
	18	井戸　埋土	須恵器	坏	国内	16.8	13.5	2.5	墨書「林」
	19	井戸　埋土	須恵器	坏	国内	(19.2)			
	20	井戸　埋土	須恵器	坏	国内	(10.0)	8.1	4.2	脚部状のヘラ記号
	21	井戸　埋土	須恵器	坏	国内	(11.7)	(8.7)	3.6	
	22	井戸　埋土	須恵器	坏	国内	11.9	8.6	3.5	
	23	井戸　埋土	須恵器	坏	国内				
	24	井戸　埋土	須恵器	坏	国内	(14.7)	7.5	6.4	高台付
	25	井戸　埋土	須恵器	坏	国内	(15.4)	(9.0)	5.6	
	26	井戸　埋土	須恵器	坏	国内		(10.0)	3.6	
43	1	井戸　埋土	須恵器	坏	国内				
	2	井戸　埋土	須恵器	坏	国内	(9.1)			
	3	井戸　埋土	須恵器	瓶	国内	(15.8)			
	4	井戸　埋土	須恵器	瓶	国内		(8.7)		
	5	井戸　埋土	須恵器	高坏	国内				
	6	井戸　埋土	須恵器	長頸壺	国内				
	7	井戸　埋土	須恵器	坏	国内				墨書あり
	8	井戸　埋土	須恵器	長頸壺	国内	(13.0)	9.6	24.6	高台付
	9	井戸　埋土	須恵器	甕	国内				
	10	井戸上面	土師器	蓋	国内	(18.2)			
	11	井戸　埋土	土師器	蓋	国内	(18.8)			
	12	井戸　埋土	土師器	坏	国内				
	13	井戸上面	土師器	坏	国内	(16.2)			
	14	井戸　埋土	土師器	坏	国内	(15.0)			

第6表　遺物観察表（土器・陶磁器⑥）

挿図番号	遺物番号	遺構名	種類	器形	生産地	法量(cm)　( )は復元値 口径	底径	器高	備考
43	15	井戸　埋土	土師器	坏	国内	(15.0)			
	16	井戸　埋土	土師器	坏	国内	(15.5)			
	17	井戸　埋土	土師器	坏	国内	(13.3)			
	18	井戸　埋土	土師器	坏	国内	(14.0)			
	19	井戸　埋土	土師器	坏	国内	(14.0)		6.4	
	20	井戸　埋土	土師器	坏	国内	(13.2)	(7.4)	4.0	
	21	井戸　埋土	土師器	坏	国内	(13.6)			
44	1	B-2	土師器	坏	国内	(12.2)			
	2	B-2	土師器	坏	国内	(8.8)			
	3	B-2	土師器	坏	国内	(12.6)	(11.0)	3.7	
	4	井戸　埋土	土師器	坏	国内	(14.6)			
	5	井戸　埋土	土師器	碗	国内	(12.7)		4.5	
	6	B-2	土師器	坏	国内	(10.8)	5.4	2.9	
	7	B-2	土師器	皿	国内	(12.0)		3.0	
	8	B-2	土師器	皿	国内	(11.3)	5.7	2.5	
	9	B-2	土師器	杯	国内	(11.2)			
	10	B-2	土師器	皿	国内	(15.3)	10.5	2.4	
	11	B-2	土師器	坏	国内	12.0	6.8	3.4	
	12	井戸　埋土	土師器	坏	国内	(13.2)	(7.4)	4.0	
	13	B-2	土師器	坏	国内	12.7	7.9	4.0	ヘラ切り
	14	B-2	土師器	鉢	国内	(14.5)			
	15	B-2	土師器	鉢	国内	(15.7)			
	16	B-2	土師器	坏	国内	(15.3)			
	17	B-2	土師器	碗	国内	(13.3)			
	18	井戸　埋土	土師器	甕	国内				
	19	井戸　埋土	土師器	鍋	国内				
	20	井戸　埋土	土師器	壺	国内				
	21	B-2	土師器	甕	国内	(24.0)		(19.0)	
	22	井戸　埋土	土師器	甕	国内				
	23	B-2	土師器	鍋	国内				
	24	B-2	土師器	鍋	国内				羽子
51	1	SK03	在地系土師質土器	皿	在地	(9.8)	(7.0)	1.1	
	2	SK03	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	8.3	2.7	
	3	SK05	在地系土師質土器	坏	在地	(11.4)	(6.0)	3.4	
52	1	SK10	在地系土師質土器	皿	在地	(6.2)	(4.2)	4.5	
	2	SK10	在地系土師質土器	皿	在地	6.3	4.1	1.5	
	3	SK10	在地系土師質土器	皿	在地	6.5	3.9	1.7	
	4	SK10	在地系土師質土器	鍋	在地	7.2	4.1	1.8	
	5	SK10	在地系土師質土器	皿	在地	6.4	3.5	2.0	
	6	SK10	在地系土師質土器	皿	在地	(6.6)	(4.3)	1.8	
	7	SK10	在地系土師質土器	皿	在地	(8.0)	3.6	2.1	
	8	SK10	在地系土師質土器	皿	在地	6.7	3.8	1.5	
	9	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	(6.8)	3.0	
	10	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	(13.8)	(7.6)	3.2	
	11	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	(8.4)	2.9	
	12	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	(13.2)	(6.4)	3.4	
	13	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	(6.8)	3.0	
	14	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	(5.8)	3.0	
	15	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	(11.6)	(6.6)	3.2	
	16	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	(11.4)	(6.0)	3.5	
	17	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	(11.4)	(6.4)	3.2	
	18	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	(6.4)	3.4	
	19	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	10.3	5.9	3.0	
	20	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	(13.2)	6.4	2.7	
	21	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	(15.4)	(6.2)	3.3	
	22	SK10	在地系土師質土器	坏	在地	(12.1)	6.4	3.2	
55	1	SK12	在地系土師質土器	皿	在地	(6.0)	4.0	1.7	
	2	SK12	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	(6.2)	3.4	
	3	SK12	在地系土師質土器	坏	在地	(11.1)	(6.8)	2.0	
	4	SK12	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	6.9	3.2	
	5	SK12	在地系土師質土器	鍋	在地	(11.7)	(7.1)	2.9	坩堝に転用
	6	SK12	在地系土師質土器	坏	在地	(12.1)	6.9	3.4	
	7	SK12	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	7.0	3.0	
	8	SK12	在地系土師質土器	坏	在地	(11.9)	(6.8)	3.0	
	9	SK12	瓦質土器	鉢	国内				
57	1	SK15	在地系土師質土器	坏	在地	11.5	8.2	2.8	
	2	SK16	在地系土師質土器	坏	在地	(15.6)	(11.0)	3.4	
	3	SK18	瓦質土器	火鉢	国内				スタンプ文
	4	SK20	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	8.1	3.7	
	5	SK19	在地系土師質土器	小坏	在地	(7.2)	(4.1)	1.8	
	6	SK19	在地系土師質土器	小坏	在地	(7.6)	(5.4)	1.9	
	7	SK19	在地系土師質土器	皿	在地	(8.1)	(6.1)	1.1	
	8	SK19	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	(7.9)	3.0	
	9	SK19	在地系土師質土器	坏	在地	13.3	8.0	3.9	
59	1	SK21	在地系土師質土器	小坏	在地	9.2	6.3	2.3	

第7表　遺物観察表（土器・陶磁器⑦）

検出遺構番号	遺物番号	遺構名	器種	器形	出土地点	法量(cm)（ ）は復元値 口径	底径	器高	備考
59	2	SK21	在地系土師質土器	坏	在地	(13.2)	(8.3)	3.5	
	3	SK21	在地系土師質土器	坏	在地	(13.5)	7.6	3.1	
	4	SK21	在地系土師質土器	坏	在地	(12.7)	6.9	3.1	
	5	SK21	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	7.8	3.1	
	6	SK21	在地系土師質土器	坏	在地	(12.7)	6.5	3.4	
	7	SK21	在地系土師質土器	坏	在地	(14.0)	8.7	3.4	
	8	SK21	在地系土師質土器	坏	在地	(16.3)	(10.0)	3.4	
60	1	SK22	在地系土師質土器	坏	在地	(13.6)	(8.9)	2.7	
	2	SK25	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	8.2	3.2	
	3	SK25	在地系土師質土器	坏	在地	12.7	6.9	2.5	
	4	SK25	在地系土師質土器	坏	在地	12.7	6.6	8.2	
	5	SK25	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	6.8	3.0	
	6	SK25	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	7.3	3.1	
	7	SK25	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	(9.6)	2.9	
62	1	SE11	在地系土師質土器	皿	在地	6.8	4.9	1.6	
	2	SE11	在地系土師質土器	皿	在地	6.4	4.5	1.7	灯明皿
	3	SE11	在地系土師質土器	皿	在地	6.8	5.6	1.7	灯明皿
	4	SE11	在地系土師質土器	皿	在地	5.6	5.7	1.7	灯明皿
	5	SE11	在地系土師質土器	皿	在地	8.2	6.0	2.0	灯明皿
	6	SE11	在地系土師質土器	皿	在地	6.8	5.8	1.5	灯明皿
	7	SE11	在地系土師質土器	皿	在地	7.2	5.0	1.7	灯明皿
	8	SE11	在地系土師質土器	皿	在地	(7.2)	5.5	2.3	
	9	SE11	在地系土師質土器	皿	在地	7.2	5.4	1.8	灯明皿
	10	SE11	在地系土師質土器	皿	在地	6.6	5.0	1.5	
	11	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	11.6	6.9	2.7	
	12	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	(11.0)	(6.8)	2.6	
	13	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	(12.5)	(6.6)	2.5	
	14	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	(11.0)	(8.0)	2.7	
	15	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	7.8	3.0	
	16	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	(11.4)	(8.0)	3.1	
	17	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	10.2	7.6	2.7	
	18	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	(10.6)	7.7	3.0	
	19	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	10.5	7.2	2.7	
63	1	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	(10.5)	6.8	2.4	
	2	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	11.2	6.9	2.8	
	3	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	10.6	7.0	2.6	
	4	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	(10.6)	7.0	3.1	
	5	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	(11.0)	7.7	2.6	
	6	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	(11.0)	6.8	2.7	
	7	SE11	在地系土師質土器	坏	在地	10.3	6.8	3.0	
	8	SE11	瓦質土器	火鉢	国内				
65	1	SE13	在地系土師質土器	坏	在地	(12.9)	(9.2)	3.2	
	2	SE13	在地系土師質土器	坏	在地	(12.0)	(8.1)	3.4	
	3	SE13	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	7.0	3.0	
	4	SE13	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	9.4	3.4	
	5	SE13	在地系土師質土器	坏	在地	12.7	8.6	2.9	
66	1	SD02	緑釉陶器	椀	畿内系				
	2	SD02	須恵質土器	鉢	東播系				
	3	SD02	在地系土師質土器	皿	在地	7.0	5.6	1.5	灯明皿
	4	SD02	在地系土師質土器	皿	在地	7.5	5.6	1.9	灯明皿
	5	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	(13.7)	10.0	2.6	
	6	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	(16.0)	5.6	2.9	
	7	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	12.6	7.4	3.0	
	8	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	7.7	2.4	
	9	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	8.0	2.9	
	10	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	7.4	2.8	
	11	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	12.9	8.0	3.0	
	12	SD02	在地系土師質土器	坏	在地	(11.7)	8.0	2.8	
	13	SD02	土師質土器	小壺	在地	(4.3)	5.0	6.8	
	14	SD02	瓦質土器	火鉢	国内				
67	1	SD03	陶器	鉢碗	備前焼		(14.6)		
	2	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(9.2)	7.4	2.0	
	3	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(14.2)	(10.0)	3.4	
	4	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(14.0)	9.0	2.8	
	5	SD03	在地系土師質土器	坏	在地	(13.3)	9.4	3.8	
	6	SD03	在地系土師質土器	鉢	在地	(24.6)			
	7	SD03	瓦質土器	火鉢	国内				
68	1	D-4 Pit2	瓦質土器	鉢	国内				
	2	D-4 Pit4	在地系土師質土器	坏	在地	11.2	7.0	3.0	
	3	C-5 Pit1	在地系土師質土器	坏	在地	7.8	1.6	5.5	
	4	C-5 Pit1	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	6.9	3.3	
	5	C-5 Pit2	在地系土師質土器	坏	在地	(13.6)	9.1	3.2	
	6	C-5 Pit2	在地系土師質土器	坏	在地	12.1	8.0	3.2	
	7	C-5 Pit3	在地系土師質土器	皿	在地	16.1	9.4	3.9	灯明皿
	8	D-5 Pit4	須恵器	壺	国内	14.0	2.0	2.3	

第8表　遺物観察表（土器・陶磁器⑧）

挿図番号	遺物番号	遺構名	種類	器形	生産地	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	備考
68	9	C-6 Pit1	在地系土師質土器	坏	在地	13.3	6.6	3.0	
	10	C-6 Pit1	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	8.2	3.4	
	11	C-6 Pit1	在地系土師質土器	坏	在地	(11.9)	7.5	3.3	
	12	C-6 Pit4	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	8.0	3.1	
69	1	D-6 Pit6	在地系土師質土器	坏	在地	(11.6)	7.7	2.5	
	2	D-6 Pit8	在地系土師質土器	坏	在地	(13.8)	8.0	3.3	
	3	D-6 Pit8	在地系土師質土器	坏	在地	(10.0)	6.3	2.8	
	4	D-5 Pit8	在地系土師質土器	坏	在地	(11.4)	5.8	3.2	
	5	D-6 Pit10	在地系土師質土器	坏	在地	(12.7)	6.4	3.3	
72	1	石鉄遺構	青磁	碗	龍泉窯	(10.0)	5.2	3.9	雲頭カラー
	2	石横遺構	青磁	碗	龍泉窯	(16.8)			
	3	石横遺構	青磁	碗	龍泉窯	(17.0)			
	4	石横遺構	青磁	碗	龍泉窯		2.7	5.8	
	5	石横遺構	青磁	碗	龍泉窯	(18.0)	(6.6)	7.1	雲頭カラー
	6	石鉄遺構	青磁	碗	龍泉窯		5.6		
	7	石横遺構	青磁	碗	龍泉窯		5.6		「金玉満堂」印文
	8	石鉄遺構	青磁	碗	龍泉窯		(5.1)		
	9	石横遺構	青磁	碗	龍泉窯		(6.4)		
	10	石鉄遺構	青磁	碗	龍泉窯		4.2		
	11	石横遺構	青磁	碗	龍泉窯	(11.8)			
	12	石鉄遺構	青磁	坏	龍泉窯		(3.5)		
	13	石横遺構	青磁	皿	龍泉窯				
	14	石横遺構	白磁	坏	中国		3.95		六角
	15	石横遺構	白磁	碗	中国		(6.0)		ロハゲ
	16	石横遺構	白磁	皿	中国		5.8		
	17	石鉄遺構	鉄釉陶器	壺か	中国		(10.8)		脚が付く
	18	石横遺構	鉄釉陶器	鉢	中国	(29.7)			
	19	石鉄遺構	鉄釉陶器	壺	中国		(16.2)		
73	1	石鉄遺構	瓦質土器	擂鉢	国内				
	2	石鉄遺構	瓦質土器	擂鉢	国内	(26.4)			
	3	石横遺構	瓦質土器	擂鉢	国内	(24.2)			
	4	石横遺構	瓦質土器	擂鉢	国内				
	5	石鉄遺構	瓦質土器	擂鉢	国内	(28.0)	13.2	12.5	
	6	石横遺構	瓦質土器	擂鉢	国内				
	7	石鉄遺構	瓦質土器	火鉢	国内				
	8	石横遺構	瓦質土器	鉢	国内	(28.4)			
	9	石鉄遺構	瓦質土器	火鉢	国内				
74	1	石鉄遺構	瓦質土器	つまみ	国内				
	2	石横遺構	瓦質土器	火鉢	国内	(27.1)			
	3	石横遺構	瓦質土器	車	国内				鉄輪
	4	石鉄遺構	瓦質土器	火鉢	国内				
	5	石横遺構	瓦質土器	火鉢	国内				脚部
	6	石横遺構	瓦質土器	鍋	国内				
	7	石鉄遺構	瓦質土器	鍋	国内	(26.0)			
	8	石横遺構	在地系土師質土器	小坏	在地	(7.6)	4.8	2.2	灯明皿
	9	石鉄遺構	在地系土師質土器	小坏	在地	(7.6)	4.6	2.5	灯明皿
	10	石横遺構	在地系土師質土器	小坏	在地	4.9	3.0	1.5	
	11	石横遺構	在地系土師質土器	皿	在地	6.2	5.0	2.0	
	12	石横遺構	在地系土師質土器	皿	在地	8.1	6.2	2.1	
	13	石横遺構	在地系土師質土器	皿	在地	6.7	5.2	2.0	
	14	石鉄遺構	在地系土師質土器	皿	在地	(4.6)	5.2	1.6	
	15	石横遺構	在地系土師質土器	小坏	在地	(7.3)	5.4	2.0	
	16	石鉄遺構	在地系土師質土器	皿	在地	(7.3)	6.0	1.5	
	17	石横遺構	在地系土師質土器	皿	在地	9.2	6.8	2.2	灯明皿
75	1	石鉄遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	8.0	2.7	
	2	石横遺構	在地系土師質土器	坏	在地	11.8	7.0	2.8	
	3	石横遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.2)	(7.6)	3.2	
	4	石鉄遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.3	8.4	3.0	
	5	石横遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	8.0	2.8	
	6	石横遺構	在地系土師質土器	坏	在地	11.6	8.8	2.8	
	7	石鉄遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	7.4	3.2	
	8	石横遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	(8.0)	3.0	
	9	石鉄遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	8.1	3.0	
	10	石横遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	(9.0)	2.8	
	11	石鉄遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	7.0	3.0	
	12	石横遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(15.3)	(10.6)	3.4	
	13	石横遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	8.2	2.3	
	14	石鉄遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.5)	8.0	3.5	
	15	石横遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.3	8.7	2.9	
76	1	石鉄遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(10.8)	5.4	2.8	
	2	石鉄遺構	在地系土師質土器	坏	在地	11.4	7.3	2.1	
	3	石横遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	7.5	2.2	
	4	石鉄遺構	在地系土師質土器	坏	在地	10.1	6.8	2.5	
	5	石横遺構	在地系土師質土器	坏	在地	11.9	8.2	2.7	
	6	石横遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.3	7.4	2.8	

第9表　遺物観察表（土器・陶磁器⑨）

図版番号	遺物番号	遺構名	種類	器形	生産地	法量 (cm) ( ) は復元値 口径	底径	器高	備考
76	7	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	8.2	2.8	
	8	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.6	8.2	2.7	
	9	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.4)	9.4	3.0	
77	1	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	11.8	8.6	2.4	
	2	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	11.9	7.8	2.6	
	3	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	8.2	3.0	
	4	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(11.1)	7.2	2.6	
	5	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.9	8.0	3.1	
	6	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(11.2)	8.3	2.8	
	7	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(14.0)	(9.0)	3.4	
	8	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	6.3	3.1	
	9	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	8.6	2.9	
	10	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.8)	9.1	3.3	
	11	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	8.8	3.0	
78	1	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.3	8.4	3.4	
	2	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	10.8	7.4	2.9	
	3	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.3	8.1	3.0	
	4	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.1	8.4	3.1	
	5	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	7.0	3.4	
	6	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.2	8.6	3.2	
	7	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.2)	8.2	3.5	
	8	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	7.8	2.8	
	9	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.4)	10.0	3.5	
79	1	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	8.8	2.9	
	2	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	11.4	7.7	3.0	
	3	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	8.0	3.6	
	4	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.4)	8.4	3.4	
	5	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	15.0	9.0	3.4	
	6	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	9.0	2.9	
	7	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	8.0	3.4	
	8	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.2)	(7.0)	3.4	
	9	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	8.7	3.0	
80	1	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	(6.8)	3.6	
	2	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.1	7.6	3.5	
	3	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	7.8	3.3	
	4	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	(7.7)	(3.4)	
	5	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	7.9	3.5	
	6	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(11.9)	7.5	3.0	
	7	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	7.0	3.4	
	8	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.6	7.8	3.2	
	9	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	(8.0)	3.0	
	10	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	7.7	2.9	
	11	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.1	8.7	3.0	
81	1	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.2)	7.5	3.4	
	2	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	(6.4)	2.8	
	3	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	8.8	3.0	
	4	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.7	8.5	3.5	
	5	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	8.8	3.3	
	6	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.4)	8.6	3.3	
	7	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	8.4	3.2	
	8	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	7.7	2.8	
	9	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.6	7.4	3.5	
	10	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(14.8)	(8.6)	3.6	
82	1	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	7.5	3.0	
	2	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.2	7.8	3.5	
	3	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(10.7)	5.8	3.0	
	4	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	8.4	3.7	
	5	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.5)	7.2	3.3	
	6	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.2	8.7	3.8	
	7	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	7.1	3.2	
	8	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(14.9)	9.0	3.6	
	9	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.2)	7.2	3.4	
	10	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(15.4)	9.1	3.7	
	11	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(15.3)	7.3	3.4	
83	1	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	(9.4)	3.7	
	2	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	7.0	3.7	
	3	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	(7.5)	3.7	
	4	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.2	(8.2)	3.2	
	5	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	(7.6)	3.8	
	6	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	8.4	3.7	
	7	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	7.6	3.3	
	8	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(16.0)	10.4	4.2	
	9	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	16.3	10.8	3.6	
84	1	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	7.2	3.8	
	2	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.6)	(8.8)	4.4	

第10表　遺物観察表（土器・陶磁器⑩）

掃部遺物番号	遺構番号	遺構名	種類	器形	生産地	法量(cm)（ ）は復元値 口径	底径	器高	備考
84	3	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	7.0	3.7	
	4	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(14.2)	(8.3)	3.5	
	5	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(15.8)	(8.6)	3.9	
	6	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	7.9	4.1	
	7	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.9)	7.2	3.7	
	8	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.5)	7.9	3.9	
	9	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	7.5	4.3	
	10	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.9)	7.6	3.7	
	11	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.7)	7.3	3.9	
85	1	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	8.5	3.9	
	2	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.9	7.1	3.8	
	3	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	7.9	3.6	
	4	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.4)	(8.0)	3.4	
	5	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.9)	8.6	4.0	
	6	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.3)	(8.3)	3.7	
	7	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.3	7.8	4.0	
	8	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	(7.6)	3.9	
	9	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.7)	8.0	4.0	
	10	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.5	6.9	3.9	
	11	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.1	7.0	3.6	
	12	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.3	7.5	3.6	
86	1	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.9	7.5	3.4	
	2	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	7.3	3.9	
	3	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	8.3	3.6	
	4	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	7.5	3.6	
	5	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.5)	8.0	3.9	
	6	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.7	7.8	3.9	
	7	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	7.4	3.9	
	8	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	7.7	3.5	
	9	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	16.1	9.6	4.6	
87	1	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	7.4	3.7	
	2	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.4	8.2	3.6	
	3	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	7.0	3.6	
	4	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	7.0	3.7	
	5	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	7.4	3.6	
	6	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.4	7.5	4.1	
	7	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	8.0	4.1	
	8	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(15.3)	9.3	4.4	
	9	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	13.2	6.9	3.5	
88	1	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	8.2	3.6	
	2	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(15.7)	7.8	4.6	
	3	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	14.4	8.2	5.1	
	4	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	15.8	9.0	5.0	
	5	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	16.9	9.0	4.1	灯明皿
	6	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地	15.6	8.4	5.1	
	7	石鉢遺構	在地系土師質土器	坏	在地		(10.4)		
92	1	石鉢遺構C-5	石臼	合子	中国				蓋
	2	石鉢遺構C-5	青磁	碗	龍泉窯		(5.6)		双魚文
	3	石鉢遺構C-5	須恵質土器	鉢	東播系				
	4	石鉢遺構C-5	須恵質土器	鉢	東播系				
	5	石鉢遺構C-5	陶器	擂鉢	備前焼	(28.4)	(13.2)	10.0	
	6	石鉢遺構C-5	瓦質土器	鉢	国内		(14.8)		
	7	石鉢遺構C-5	瓦質土器	鉢鉢	国内				
	8	石鉢遺構C-5	瓦質土器	火鉢	国内				
	9	石鉢遺構C-5	瓦質土器	火鉢	国内				
	10	石鉢遺構C-5	瓦質土器	釜	国内				
	11	石鉢遺構C-5	瓦質土器	鍋	国内				
	12	石鉢遺構C-5	土師質土器	小皿	国内	(8.9)			
93	1	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	小坏	在地	6.2	3.5	2.1	
	2	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	小坏	在地	(5.6)	2.7	2.0	
	3	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	小坏	在地	(6.4)	3.6	2.5	
	4	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	皿	在地	7.2	6.1	1.1	
	5	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	皿	在地	6.9	5.5	1.6	
	6	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	皿	在地	7.1	5.0	1.5	
	7	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	皿	在地	(7.2)	(5.0)	1.5	
	8	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	皿	在地	7.4	5.2	1.8	
	9	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	小坏	在地	(7.4)	4.2	2.3	灯明皿
	10	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	皿	在地	7.4	5.0	1.8	
	11	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	小坏	在地	9.3	5.8	2.6	
	12	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	皿	在地	(8.2)	(5.2)	2.1	
	13	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	皿	在地	(8.4)	(5.2)	2.1	灯明皿
	14	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	皿	在地	7.3	4.9	1.6	灯明皿
	15	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	13.5	8.0	2.9	
	16	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	8.0	3.1	
	17	石鉢遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	13.4	9.4	2.6	

第11表　遺物観察表（土器・陶磁器①）

挿図番号	遺物番号	遺構名	種類	器形	生産地	法量（cm）（ ）は復元値 口径	底径	器高	器厚	備考
93	18	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.1	8.1	2.7		
	19	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	8.2	2.9		
	20	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	8.4	2.9		
94	1	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	(7.7)	2.5		
	2	石積遺構C-5	在地系土師質土器	皿	在地	(12.8)	(8.8)	2.5		
	3	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	8.3	2.5		
	4	石積遺構C-6	在地系土師質土器	坏	在地	(12.5)	7.5	2.7		
	5	石積遺構C-6	在地系土師質土器	坏	在地	11.8	7.8	2.5		
	6	石積遺構C-6	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	7.7	3.0		
	7	石積遺構C-6	在地系土師質土器	坏	在地	13.2	8.5	3.1		
	8	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.6	8.8	2.9		
	9	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.6	3.3	7.2		
	10	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	7.8	3.1		
95	1	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(12.1)	(8.1)	2.7		
	2	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	7.4	3.0		
	3	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	8.2	3.0		
	4	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	13.4	8.4	2.8		
	5	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(13.7)	8.7	2.8		
	6	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	7.7	3.3		
	7	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	7.4	3.0		
	8	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	6.9	2.7		
	9	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	7.9	2.7		
	10	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(14.4)	8.6	3.0		
96	1	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	(8.0)	3.2		
	2	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	9.7	2.9		
	3	石積遺構C-6	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	8.6	2.7		
	4	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	13.4	7.5	3.1		
	5	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	13.2	7.4	3.2		
	6	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.2	8.2	2.8		
	7	石積遺構C-6	在地系土師質土器	坏	在地	12.6	6.9	3.2		
	8	石積遺構C-6	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	(7.4)	3.7		
	9	石積遺構C-6	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	7.7	3.7		
	10	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	7.4	3.5		
	11	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.3	8.4	2.9		
97	1	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(12.5)	7.4	3.1		
	2	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	8.6	3.2		
	3	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	8.2	3.5		
	4	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	7.5	3.1		
	5	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(12.7)	6.8	3.7		
	6	石積遺構C-6	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	7.6	2.9		
	7	石積遺構C-6	在地系土師質土器	坏	在地	15.4	9.8	4.0		
	8	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(16.3)	10.4	4.2		
	9	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	7.3	4.0		
98	1	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(12.0)	7.8	3.6		
	2	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	15.4	8.4	3.9		
	3	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	(6.8)	4.1		
	4	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	8.1	3.7		
	5	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	12.4	7.1	4.0		
	6	石積遺構C-5	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	6.8	3.8		
99	1	B-3	弥生土器	甕	在地					中期
	2	C-4	弥生土器	甕	在地					中期
	3	B-3	弥生土器	甕	在地					底部
	4	B-2	弥生土器	高坏	在地	6.4	(18.6)			
	5	B-3	弥生土器	高坏	在地					
100	1	SX15	須恵器	蓋	国内					つまみ部分
	2	石積遺構	須恵器	蓋	国内	(12.4)		2.1		
	3	C-3	須恵器	蓋	国内	(16.0)				
	4	石積遺構	須恵器	蓋	国内					
	5	石積遺構	須恵器	蓋	国内					
	6	C-4	須恵器	蓋	国内					
	7	石積遺構	須恵器	蓋	国内					
	8	C-4	須恵器	蓋	国内					
	9	D-5	須恵器	蓋	国内	(15.7)				
	10	石積遺構	須恵器	蓋	国内	(19.0)		1.9		
	11	B-3	須恵器	蓋	国内	(14.4)				
	12	C-4	須恵器	蓋	国内					
	13	C-4	須恵器	蓋	国内	(16.2)				
	14	SD01	須恵器	皿	国内					
	15	石積遺構	須恵器	皿	国内	(14.8)	(11.0)	1.8		
	16	C-4	須恵器	皿	国内	(17.2)	(13.3)	1.9		
	17	SD02	須恵器	坏	国内					
	18	D-5	須恵器	坏	国内					
	19	石積遺構	須恵器	坏	国内					土師器風
	20	石積遺構	須恵器	坏	国内					
	21	C-4	須恵器	坏	国内					

第12表　遺物観察表（土器・陶磁器⑫）

第図番号	遺物番号	遺構名	種別	器形	生産地	法量 (cm) ( ) は復元値 口径	底径	器高	備考
100	22	C-5	須恵器	坏	国内				
	23	石槨遺構	須恵器	坏	国内	(12.6)			
	24	石槨遺構	須恵器	坏	国内	(12.6)	(8.8)	3.4	
	25	B-3	須恵器	坏	国内	(10.4)			
	26	C-4	須恵器	坏	国内	(13.6)	9.1	3.3	
	27	C-4	須恵器	坏	国内	12.7	7.6	2.8	
	28	石槨遺構	須恵器	坏	国内		(7.6)		
	29	石槨遺構	須恵器	坏	国内		(11.0)		
	30	D-5	須恵器	坏	国内	12.6	8.7	3.7	
	31	D-5	須恵器	坏	国内	(13.6)	(8.2)	4.0	
	32	C-4	須恵器	坏	国内	(13.0)	(7.7)	4.5	
	33	C-4	須恵器	坏	国内	15.2	8.4	5.8	
	34	C-3	須恵器	坏	国内				
	35	石槨遺構	須恵器	坏	国内		(9.0)		高台付
	36	石槨遺構	須恵器	坏	国内		(8.1)		高台付
	37	D-5	須恵器	坏	国内		(7.4)		
	38	D-5	須恵器	坏	国内		(9.8)		
	39	SD02	須恵器	坏	国内		(11.0)		高台付
	40	B-3	須恵器	坏	国内		(8.0)		
	41	D-5	須恵器	坏	国内		(11.8)		
101	1	C-3	須恵器	甕	国内				
	2	C-2	須恵器	甕	国内				
	3	D-5	須恵器	甕	国内	(24.0)			
	4	石槨遺構	須恵器	甕	国内				
	5	SK01	須恵器	甕	国内				
	6	B-3	須恵器	甕	国内				
	7	C-3	須恵器	甕	国内				
	8	石槨遺構	須恵器	甕	国内				
	9	C-4	須恵器	甕	国内				
	10	C-4	須恵器	甕	国内				頸部
	11	C-4	須恵器	甕	国内				
	12	C-4	須恵器	瓶	国内	(8.6)			
	13	C-4	須恵器	長頸壺	国内				頸部
	14	C-3区	須恵器	長頸壺	国内				
	15	石槨遺構	須恵器	長頸壺	国内				頸部
	16	D-5	須恵器	長頸壺	国内				
	17	石槨遺構	須恵器	長頸壺	国内				頸部
	18	石槨遺構	須恵器	高坏	国内				
	19	石槨遺構	須恵器	高坏	国内		10.45		
	20	石槨遺構	土師器	甕	国内	(14.7)	2.0	2.9	
	21	B-3	土師器	坏	国内				
	22	B-3	土師質土器	坏	国内	14.0		3.3	
	23	C-4	土師器	坏	国内	(11.8)		3.3	
	24	B-3	土師器	坏	国内	10.9			
	25	石槨遺構	土師器	坏	国内	14.9		4.4	
	26	C-4	土師質土器	坏	国内	(12.0)	(7.8)	3.4	
	27	石槨遺構	土師器	坏	国内	13.8	6.0	5.2	
	28	B-3	土師器	大皿	国内	(12.7)		3.7	
	29	B-3	土師器	坏	国内	(10.2)			
	30	B-3	土師器	高坏	国内		3.4		
102	1	C-4	土師器	坏	国内	(12.1)	(8.0)	3.8	
	2	石槨遺構	土師器	坏	国内	(16.0)	(8.8)	4.3	
	3	C-4	土師器	坏	国内	(14.6)	(8.1)	3.4	
	4	C-4	土師器	坏	国内	(17.3)	(12.2)	2.8	
	5	石槨遺構	土師器	坏	国内		8.0		
	6	石槨遺構	土師器	鍋	国内		6.5		内黒鍋
	7	石槨遺構	土師器	坏	国内		8.4		
	8	石槨遺構	土師器	甕	国内				
	9	SD02	土師器	甕	国内	(25.2)			
	10	C-4	土師器	甕	国内	(18.6)			
	11	石槨遺構	土師器	鉢	国内	(18.3)			
	12	石槨遺構	土師器	甕	国内				
	13	B-3	土師器	甕	国内				
	14	B-3	土師器	甕	国内				
	15	C-4	土師器	甕	国内				
	16	C-5	土師器	甕	国内				
	17	C-4	土師器	甕	国内				
	18	B-3	土師器	甕	国内				
	19	C-4	土師器	鍋	国内				
	20	石槨遺構	製塩土器	鉢	国内				
	21	C-4	製塩土器	鉢	国内				
103	1	B-3	白磁	小坏	中国	(6.0)	2.7	3.2	
	2	B-3	青磁	碗	龍泉窯		(6.4)		
	3	C-3	焼締陶器	鉢	中国				
	4	D-6	青白磁	壺	中国				胴部片

第13表　遺物観察表（土器・陶磁器⑬）

掲載遺物番号	遺構番号	遺構名	器種	器形	生産地	法量 (cm) ( ) は復元値 口径	底径	器高	備考
	5	B-3	瓦質	火鉢	国内				奈良火鉢
	6	C-4	瓦質	鍋	国内				
	7	B-3	瓦質	鍋	国内	(22.0)			
	8	B-3	瓦質	火鉢	国内				
	9	B-5	陶器	皿形	肥前焼？				
	10	B-3	須恵器	甕	備前焼		(10.6)		
	11	C-4	在地系土師質土器	小坏	在地	5.2	3.2	2.1	
	12	B-3	在地系土師質土器	皿	在地	5.2	4.3	1.1	
	13	B-3	在地系土師質土器	皿	在地	(6.8)	7.5	1.4	
	14	B-3	在地系土師質土器	皿	在地	7.4	5.0	1.8	
103	15	C-4	在地系土師質土器	皿	在地	(7.9)	(6.2)	1.3	
	16	C-4	在地系土師質土器	皿	在地	8.0	5.8	1.2	
	17	C-3	在地系土師質土器	皿	在地	6.0	4.3	1.3	灯明皿
	18	C-3	在地系土師質土器	皿	在地	7.2	5.2	1.8	灯明皿
	19	B-5	在地系土師質土器	皿	在地	7.2	5.8	1.6	
	20	B-3	在地系土師質土器	皿	在地	(7.2)	5.8	1.5	
	21	C-4	在地系土師質土器	皿	在地	(7.2)	(5.1)	1.6	
	22	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	9.0	2.6	
	23	B-4	在地系土師質土器	坏	在地	(13.5)	(9.0)	2.4	
	24	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	(13.3)	(9.0)	2.6	
	25	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	(11.7)	8.0	2.5	
	1	C-4	在地系土師質土器	坏	在地	(13.8)	(10.0)	2.7	
	2	C-3	在地系土師質土器	坏	在地	(11.6)	7.5	2.2	
	3	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	6.9	3.0	
	4	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	(12.0)	9.0	2.8	
	5	B-2	在地系土師質土器	坏	在地	16.0	9.4	4.0	
104	6	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	(15.2)	8.8	3.3	
	7	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	7.7	3.1	
	8	B-2	在地系土師質土器	坏	在地	(12.8)	(7.4)	3.3	
	9	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(12.0)	8.4	2.9	
	10	石橋遺構	在地系土師質土器	坏	在地	(13.5)	8.2	3.7	
	11	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	13.0	8.2	3.2	
	1	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	13.1	8.0	3.1	
	2	B-5	在地系土師質土器	坏	在地	(13.0)	(8.5)	3.7	
	3	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	(7.8)	3.2	
	4	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	(13.1)	(8.8)	3.1	
	5	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	7.0	3.4	
	6	B-2	在地系土師質土器	坏	在地	12.0	7.4	2.9	
105	7	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	11.8	6.6	2.9	
	8	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	8.0	3.2	
	9	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	6.6	3.4	
	10	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	(12.0)	8.4	3.1	
	11	B-5	在地系土師質土器	坏	在地	(11.8)	(8.2)	3.2	
	12	C-3	在地系土師質土器	坏	在地	(16.5)	11.0	4.6	
	13	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	13.2	8.0	3.2	
	1	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	(12.2)	(8.0)	3.6	
	2	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	(12.0)	7.6	3.7	
	3	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	12.6	8.0	3.4	
106	4	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	12.5	8.4	3.5	
	5	C-3	在地系土師質土器	坏	在地	(17.6)	11.4	4.8	
	6	C-3	羽釜	坏	在地		(7.8)		
	7	B-3	在地系土師質土器	坏	在地	16.0	9.3	4.5	
	1	表土	弥生土器	甕	在地	(21.8)			
	2	B-2	弥生土器	甕	在地	(28.8)			
	3	表土	土師質土器	甕	在地	(30.0)			
	4	D-6	弥生土器	高坏	在地				
	5	表土	須恵器	大甕	在地				
	6	表採	須恵器	壺	在地			3.6	
108	7	一括	土師器	坏	在地	(13.6)	(7.7)	3.3	
	8	C-5	土師器	鉢	在地				
	9	D-6	在地系土師質土器	小坏	在地	(8.2)	5.6	2.7	灯明用
	10	表土	在地系土師質土器	坏	在地	(12.6)	7.9	3.4	
	11	SD-2	在地系土師質土器	坏	在地	(15.3)	(8.1)	3.9	
	12	表土	在地系土師質土器	坏	在地	(13.2)	(7.0)	3.2	
	13	表土	在地系土師質土器	坏	在地		8.1		
	1	表土	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	6.5	4.3	
109	2	表土	在地系土師質土器	坏	在地	(12.4)	8.0	3.2	
	3	表土	在地系土師質土器	坏	在地	12.8	7.6	3.1	

第14表　遺物観察表（木製品）

検出遺構番号	遺物番号	遺構名	種類	材質	部位	法量 (cm)							重量	備考
45	1	井戸枠内	曲げ	木	板目	長さ	15.5	最大幅	1.6	厚さ	0.4			
	2	井戸　堰土	木製品	木	板目	長さ	(6.4)	幅	(15.1)	厚さ	0.5			穿孔あり。両端欠く。
	3	井戸　堰土	角材	木	板目	長さ	(6.4)	幅	(10.7)	厚さ	(4.3)			一側面上面が残る
	4	井戸　堰土	木製品	木	板目	長さ	4.6	幅	(7.1)	厚さ	0.8			一部を欠く
	5	井戸　堰土	木製品	木	板目	長さ	(13.3)	幅	6.4	最大厚	2.1			
	6	井戸　堰土	木製品	木	板目	長さ	(27.2)	幅	16.7	厚さ	3.0			
	7	井戸　堰土	木製大臼	木	板目	口径		底径	(17.1)	器高				
46	1	井戸　周土	板材	土	板目	長さ	20.5	幅	4.6	厚さ	0.9			
	2	井戸　堰土	曲物	木	板目	口径	18.5	底径	20.6	器高	5.7			

第15表　遺物観察表（土製品）

検出遺構番号	遺物番号	遺構名	種類	材質	部位・出土	寸法 (cm)							重量	備考
16	3	3区 SD03	土錘	土師質		長さ	3.8	幅	0.9	孔径	0.3		3.4	
	4	3区 SD03	土錘	土師質		長さ	3.2	幅	0.9	孔径	0.3		3.2	
23	14	SD03	土錘	土師質		長さ	5.2	幅	1.0	孔径	0.2		6.2	
	15	SD03	土錘	土師質		長さ	(2.9)cr	幅	1.0	孔径	0.3		3.2	
44	25	井戸　堰土	土錘	土師質		長さ		幅	3.3	孔径	0.5		45.1	
89	6	石積遺構	土錘	土師質		長さ	4.3	幅	1.1	孔径	0.4		4.6	
	7	石積遺構	土錘	土師質		長さ	5.4	幅	1.1	厚さ	1.0		6.0	
106	9	C-3	土錘	土師質		長さ	2.9cr	幅	0.8	孔径	0.3		2.0	
	10	C-3	土錘	土師質		長さ	4.6	幅	1.0	孔径	0.5		4.1	
	11	C-3	土錘	土師質		長さ	4.1	幅	1.6	孔径	0.3		13.4	
	12	C-3	土錘	土師質		長さ	5.1	幅	1.5	孔径	0.2		10.4	
	13	C-4	土錘	土師質		長さ	4.1	幅	1.0	孔径			5.2	

第16表　遺物観察表（石製品）

検出遺構番号	遺物番号	遺構名	種類	材質	部位	寸法 (cm)							重量	備考
6	3	SK02	ひき臼	安山岩	下臼	上部径	(33.4)	底径	(29.4)	器高				
	7	SK07	石鍋	滑石		長さ	1.8	幅	8.6	厚さ	1.0		25.7	
16	5	3区 SD03	硯	輝緑凝灰岩		長さ	8.6	幅	3.9	厚さ				赤間硯
33	6	製塩層	石鍋	滑石		口径	(30.6)	底径		器高	8.4			
	7	製塩層	硯	粘板		長さ	9.8	幅	3.3	厚さ	1.2		58.1	
	8	製塩層	茶臼	砂岩	下臼	口径	(39.6)			器高	4.7			
36	15	一括	砥石	輝緑凝灰岩		長さ	6.2	幅	2.1	厚さ	1.2		39.5	赤間硯を転用
	16	表土	石鍋	姫島産黒曜石		長さ		幅	3.0	厚さ	0.3		2.0	
	17	表土	石鍋	姫島産黒曜石		長さ	4.0	幅	3.2	厚さ	0.4		2.1	
89	1	石積遺構	硯	輝緑凝灰岩		縦	9.5	横	7.7	厚さ	1.6		128.7	赤間石
	2	石積遺構	臼	輝緑凝灰岩		縦	4.1	横	3.9	厚さ	1.4		18.8	赤間石
	3	石積遺構	硯石	天草石		縦	4.0	横	2.6	厚さ	2.5		34.9	
	4	石積遺構	石鍋	滑石		縦	3.7	横	5.1	厚さ	1.3		32.3	石鍋を再利用
	5	石積遺構	石鍋	滑石		縦	3.7	横	4.5	厚さ	1.1		28.8	
	7	石積遺構 C-5	石鍋	滑石		縦	4.5	横	5.4	厚さ	1.6		48.8	
98	8	石積遺構 C-5	石鍋	滑石		口径		底径	9.9	器高			278.7	
	9	石積遺構 C-6	茶臼	凝灰岩	上臼	上部径	(18.8)	底径	(19.4)	器高	12.3		—	
	6	B-3	石庖丁	緑泥片岩		縦	4.5	横	5.8	厚さ	0.6		23.4	
	7	C-4	石庖丁	輝緑凝灰岩		縦	4.4	横	7.0	厚さ	0.8		37.8	立岩産
	8	B-2	石庖丁	頁岩		縦	5.0	横	5.1	厚さ	0.7		22.4	
99	9	石積遺構	石匙	サヌカイト		縦	4.3	幅	8.4	厚さ	1.2		29.3	
	10	B-2	打製石斧	安山岩		縦	12.5	横	6.7	厚さ	1.7		190.6	
	11	C-6	扁平打製石斧	安山岩		縦	12.5	横	10.5	厚さ	1.0		230.1	
	12	SK25	扁平打製石斧	緑泥片岩		縦	15	横	7.8	厚さ	1.5		289.2	
	13	C-3	打製石斧	安山岩		縦	13.1	横	7.6	厚さ	3.0		372.0	
106	8	B-3	硯	輝緑凝灰岩		縦	7.6	横	2.3	厚さ	1.7		37.0	赤間石
	4	B-2	扁平打製石斧	安山岩		縦	7.7	横	6.9	厚さ	1.7		128.4	
	5	B-2	扁平打製石斧	緑泥片岩		縦	8.6	横	5.7	厚さ	1.8		70.5	
	6	表土	磨製石斧	結晶片岩		縦	10.1	横	5.3	厚さ	2.9		239.4	
109	7	C-3	砥石			縦	5.1	横	3.7	厚さ	4.3		105.1	
	8	C-3	砥石			縦	4.1	横	3.0	厚さ	0.5		16.5	
	9	表土	砥石	天草石		縦	2.3	横	3.1	厚さ	0.9		9.8	
	10	表土	石鏃	サヌカイト		縦	2.0	横	2.3	厚さ	0.3		2.4	

第17表　遺物観察表（金属製品）

挿図番号	遺物番号	遺構名	種類	材質	状態	寸法（cm）						重量	備考
98	10	C-5	念持仏	青銅		長さ	3.9	幅	1.3	厚さ	1.0	10.3	光背を欠く
109	11	表上	耳？	銅		長さ	2.0	幅	1.9	厚さ	1.4	18.8	

第18表　遺物観察表（瓦）

挿図番号	遺物番号	遺構名	種類	部位	寸法（cm）							重量	備考
34	1	敷地層	丸瓦	軒瓦	長さ		径	15.0	厚さ	1.8			2区　北斜面下層
	2	整地層	平瓦		長さ	15.0+α	幅	15.4+α	厚さ	1.8			4区　8～10層
	3	整地層	平瓦		長さ	27.6	幅	21.2	厚さ	2.0			
90	1	石横遺構	丸瓦		長さ	22.0	幅	14.8	厚さ	2.4			
	2	石横遺構	丸瓦		長さ	14.8	幅	10.7	厚さ	2.7			
	3	石横遺構	平瓦		長さ	17.2+α	幅	16.5+α	厚さ	2.9			

第19表　遺物観察表（銅銭）

挿図番号	遺物番号	遺構名	銭貨名	国・王朝名	初鋳年	重さ（g）	直径（cm）	書体	備考
16	6	3区 SD03	元豊通寶	北宋	1086	2.7	2.4	篆書	
	7	3区 SD03	盛宋元寶	北宋	1086	2.7	2.5	真書	
	8	3区 SD03	不明			25.2			銭が錆びて重なっている
91	1	石敷遺構	天禧元寶	北宋	1023	2.1	2.4	真書	
	2	石横遺構	至道元寶	北宋	995	2.7	2.5	草書	
	3	石横遺構	皇宋通寶	北宋	1038	2.7	2.5	篆書	
	4	石敷遺構	聖宋元寶	北宋	1101	2.0	2.5	行書	
	5	石横遺構	不明			2.0	2.4		
107	1	整地層	景祐元寶	北宋	1034	2.1	2.4	真書	
	2	整地層	熙寧元寶	北宋	1068	3.0	3.5	真書	
	3	整地層	不明			1.9	2.4		
	4	整地層	不明			1.5	2.4		

報告書抄録

ふりがな	じげんざんいせき
書名	慈眼山遺跡
副書名	国家公務員合同宿舎（日田住宅）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第55集
編著者名	坂本嘉弘
編集期間	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113　大分市大字中判田1977　TEL 097-597-5675
発行年月日	2011年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
じげんざんいせき 慈眼山遺跡	ひたし 日田市 しろまち 城町 二丁目	204	134	33° 19′ 46″	130° 56′ 52″	平成２年 ９月５日 ～ 12月17日 平成３年 ８月８日 ～ 平成４年 ２月19日	1600㎡	国家公務員 合同宿舎 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
慈眼山遺跡	包含層 中世居館	・古代 ８世紀 ・中世 15世紀 ～16世紀	・古代 井戸 ・中世 溝・井戸 石積み 廃棄土坑	・古代 墨書土器・斎串・曲物 ・中世 糸切土師器の坏・皿 貿易陶磁器（青磁・白磁） 備前焼・硯 青銅製念持仏	・古代 井桁組の井戸 ・中世 居館を構成する遺構

要約

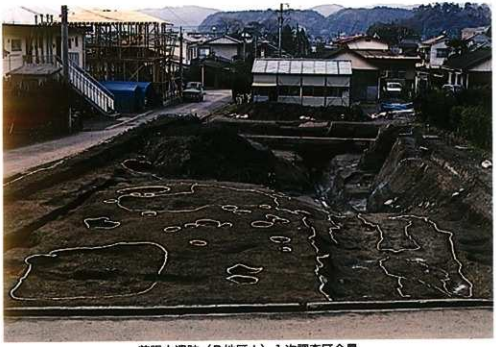
古代

井戸を中心に８世紀後半の遺物がまとまって出土した。遺跡から北西に約２㎞離れた台地上の遺跡である小迫辻原遺跡では、ほぼ同時期の南に開く「コ」の字状に配置された掘立柱建物群が検出され、「大領」とも読める墨書土器も出土していることから、日田郡衙の可能性が指摘されている。本報告書の井桁組の井戸もこうした遺跡と関連するものと考え、日田盆地の古代を考える上で、重要な遺跡と言える。

中世

遺跡の北側の丘陵は中世山城である「大蔵古城」として知られ、調査地は字「瀬戸口」で西側には字「上井ノ内」があり、「大蔵古城」と関連することが想定できる。中世の出土遺物は13世紀から16世紀に及ぶが、主体を占めるのは15世紀から16世紀前葉である。この時期は、14世紀に隆盛を極める日田大蔵氏が文安元年（1444）に滅び、大友姓日田氏に替わる時期である。検出された区画性の強い溝や石積み、段落ちなどの遺構は、この時期の居館の一部と想定され、北側に構築された山城と一体になっていたものと考える。さらに14世紀代の銘文の残る永興寺の木造仏群や石造物なども、年代から隆盛期の日田大蔵氏との関連が想定でき、山城・居館・寺院に日田神社が加わり構成された、日田盆地の拠点的景観を想定できる。

慈眼山遺跡（「瀬戸口」と「土井ノ内」）南から



慈眼山遺跡（B地区Ⅰ）1次調査区全景

B地区Ⅰ（1次調査）
SD03 全景

B地区Ⅰ（1次調査）
SD03 近景

B地区Ⅰ（1次調査）
SD03 遺物出土状況

B地区Ⅱ（3次調査）
古代の井戸全景1（東から）

B地区Ⅱ（3次調査）
古代の井戸全景2（南から）

B地区Ⅱ（3次調査）
古代の井戸全景3（北西から）

B地区Ⅱ（3次調査）
古代の井戸近景

B地区Ⅱ（3次調査）
古代の井戸と底面の遺物

B地区Ⅱ（3次調査）
古代の井戸の内側状況

B地区Ⅱ（3次調査）SE11

B地区Ⅱ（3次調査）
C-5 石積み遺構と SE13

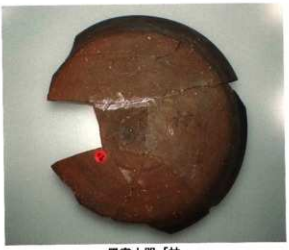
B地区Ⅱ（3次調査）
SE13 の井筒

B地区Ⅱ（3次調査）
SD02・SD03

B地区Ⅱ（3次調査）
石積み遺構（西から）
（手前の石列は近世以降）

B地区Ⅱ（3次調査）
石積み遺構（南から）
（左側の石列は近世以降）

墨書土器「門」



墨書土器「林」

龍泉窯系青磁各器種

龍泉窯系青磁と磁竈窯系の鉢

朝鮮王朝産陶器

備前焼の壺と擂鉢

第115図　慈眼山遺跡（1・3次調査）遺構配置図（1／200）

慈眼山遺跡

国家公務員合同宿舎（日田住宅）建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第55集

平成23年3月31日

編集・発行　大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田1977
TEL（097）597-5675

印　　刷　いづみ印刷株式会社
〒870-1117
大分市高江西1丁目4323番25号
TEL（097）535-8655